

平V27

93-118

森大狂纂輯

近世禪林言行錄 全

東京

金港堂書籍株式會社



序

我友森大狂居士杜門絕客兀坐披卷數年
不出戶偶人來談時事則曰孤貧而多病才
疎而薄命不言其他嘗聞居士年少慷慨卓
落負氣凌人談論縱橫苟關于世道人心之
隆污消長耳熱眉揚今也雖貧且病豈不言
而已者哉所謂虎行如病鷹立如眠者也居
士頃日編述近世禪林言行錄徵余序言自

白隱天桂二大老迨近世尊宿碩德之機緣
言行細大無遺網羅蒐輯哀然成帙有益于世
道人心豈鮮少哉居士一默數年杜門絕
客蓋欲使後進溫故知新也雖然斯道愈入
則愈深夢窻國師曰溫故知新猶是一重關
居士爲我將透關之一句來如言不得則居
士亦刻舟求劍徒也壬寅仲春京都萬年山
瘦竹寒流相映處無隱居士

例言

一麒麟の一角を撃け獅子の爪牙を張り大法をまさに地に墜ち
むとするに起し、本有圓成の道を激揚したるものは、實に鶴林
白隱老漢なり。白隱老漢と時を同くして崛起し、大に森嚴綿
密の禪を唱へ、再ひ吉祥古佛の家風を鼓吹したるものは、明月
林天桂老漢なり。この二老は、近世における二大宗匠なり。
二老起てより、宗師相踵て出て、その高躅、後人を激發するに足
るものあり。余、平生、僧傳を讀み、また耆宿に會して、近世宗師
の一言一行を見聞することに、之を記し、遂に哀然帙を成す。
此において、琴臺氏の先哲叢談に倣ひ、國字をもて之を記述し、
題して近世禪林言行録と云ふ。

一、卷頭には、白隱、天桂の二老を置きぬ。こは、二老か近世の禪風を激揚するの功、最も大なるものあるを以てなり。示寂年月の前後如何に拘はらず、白隱を前にしたるは、他なし臨濟開宗の尤も舊きに由るのみ。その他は、おほむね示寂の年次に随ひき。されど、師にして弟子に後れたる者あり、弟子にして師に先たちたる者あり。必ずしも、悉くその年次に拘せず。はた、示寂年月のいまた詳ならざる者あり、此のときは、その年代を推測して、之を收めたり。

一、引用および参考に資したる書は、無慮一百餘種あり。臨濟は、多くは、棘園老師の荆棘叢談、退耕老師の僧寶傳等に負ふ所、甚た大なり。最近の宗師の言行は、天香窟鈴木無隱翁および寒山窟鈴木子順和尚より得たるもの多し。曹洞は、聯灯の後、そ

の書に乏しく、頗る搜閲に勞しき。幸にも、最乗寺石川素童和尚、永祥寺在田彦龍和尚、大にこの舉を贊し、余の爲めに、百方、各山に就て、語録、行録、舊記等を探りて示されたるをもて、之を網羅補苴することを得たり。龔て這の四翁の恩を記す。但た、黄檗にいたりては、余の寡聞、多く得ること能はず、僅かに二三宗師の言行を雜書中より拾ひたるのみにて、太た寂寞なるは、余か尤も遺憾とする所なり。

一、宗師中なほ記すべきもの少からず、曹洞の大梅、無底、元綱の諸老、さては、黄檗の宗師のときは、他日、その行録を得て、之を補ふことあるへし。江湖の老宿、幸に慈教を吝むこと勿れ。至囑。

一、古宗師、その行事の身後に存せざるを尙む。余や、勞々、その遊

戲三昧を收拾して、世上人の面前に呈露す。竟來、余は、古宗師の罪人たることを免れざる乎。噫。

壬寅の春一月、東京麻布の梅花無盡藏に於て、大狂居士識す。

引用書目

- | | |
|--------|---------|
| 延寶傳灯録 | 法山四祖傳 |
| 洞上聯灯録 | 續日本高僧傳 |
| 黄檗宗鑑録 | 緇林年芳 |
| 紫巖譜略 | 正受老人崇行録 |
| 澤水法語 | 獨妙禪師年譜 |
| 天桂老人年譜 | 壁生草 |
| 荆叢毒藥 | 白隱和尚畫集 |
| 賣茶翁偈語 | 夜船閑話 |
| 葦葭堂雜錄 | 對客言志 |
| 北禪遺草 | 庵居集 |
| 快馬鞭 | 近世禪林僧寶傳 |
| 荆棘叢談 | 宗門無盡灯論 |

近世名家書畫談
日本名勝地誌
畫乘要略
睡餘小錄
默子老師行實錄
金龍尺牘
草庵稿
仙臺史傳
名家略傳
面山和尚年譜
曹海錄
洞水和尙行業記
蓮藏海五分錄
金翎和尙行狀

近世畸人傳
藝苑叢話
扶桑名畫傳
續茶人花押藪
鷹峰系譜
幽谷餘韻
指月和尙法語
遺文集覽
近世叢語
頑極和尚語錄
瑞祥開山行狀
卍庵老人法語
湯山普說
圓通鐵文樹禪師事實

道樹錄
近世偉人傳
良寬上人和歌集
雲樞禪師行實
佛通和尚行實
本朝高僧詩選
竹田自畫題語
南山外集
譚海
鐵翁禪師塔銘
鐵翁畫談
浪華墓跡考
奕堂和尚遺稿
鶴巢集

皓臺住山記
良寬上人詩集
靈潭和尚語錄
名人忌辰錄
佛通老漢遷化記
竹田居士傳
仙崖禪師遺稿
覺巖禪師年譜錄
話園
鐵翁畫譜
物外和尚大圓鏡
退耕語錄
蒼龍廣錄
杞憂庵遺稿

鐵舟居士傳
 餘身歸
 隨々草
 各宗高僧譚
 曹洞革新論
 正法輪
 佛教
 禪學
 明教新誌
 曹洞宗報
 城南評論
 三眼

隨園集
 和歌禪話
 繪書叢誌
 曹洞史要
 維新史料
 反省雜誌
 禪宗
 骨董協會雜誌
 曹洞教報
 柵草紙
 效海指針

目

錄

白隱禪師
 天桂禪師
 圓瑞禪師
 馬蹄禪師
 月坡禪師
 密山禪師
 澤水禪師
 無得禪師
 全國禪師
 祖山禪師
 覺芝禪師
 默子禪師
 印光禪師
 古月禪師
 嶺南禪師
 一丈禪師

一頁
 二三
 三四
 三五
 三六
 三七
 四〇
 四二
 四四
 四六
 四七
 四八
 四九
 五〇
 五三
 五四

無聞禪師
 德水禪師
 雪庭禪師
 疊屋禪師
 三洲禪師
 拈華禪師
 曹海禪師
 寂仙禪師
 月海禪師
 笑堂禪師
 宜默禪師
 卍庵禪師
 遊女大橋
 指月禪師
 雲門禪師
 逆水禪師

五五
 五七
 五八
 五九
 六〇
 六三
 六四
 六八
 六九
 七六
 七八
 七九
 八二
 八六
 八九
 九一

目錄

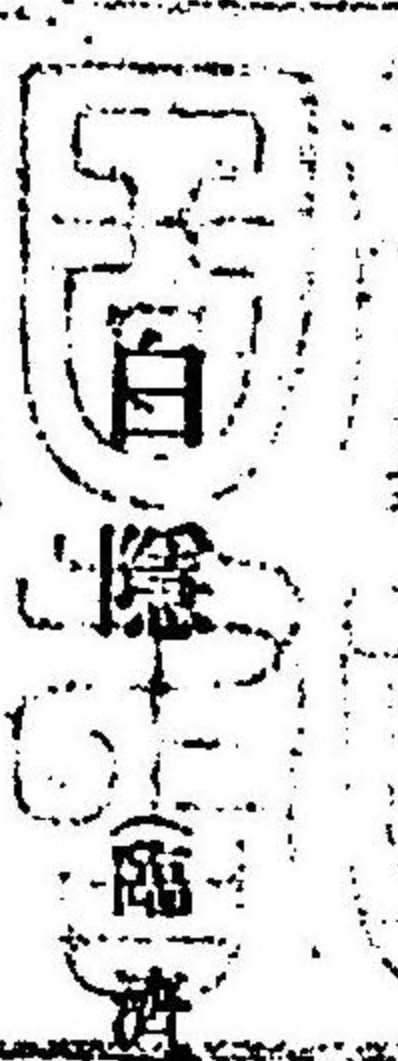
佛星禪師	性堂禪師	誠拙禪師	佛通禪師	漢三禪師	宜詳禪尼	妙峰禪師	活步禪師	良寬禪師	行應禪師	卓洲禪師	雪關禪師	田竹田	太元禪師	仙崖禪師	道海禪師	棠林禪師	天猷禪師
二三五	二三六	二三八	二四三	二四六	二四七	二四八	二四九	二四九	二五九	二六五	二七一	二七三	二七五	二七八	二八三	二八四	二八六
清蔭禪師	金華禪師	巨海禪師	淡海禪師	春叢禪師	磨瓶禪師	古梁禪師	象兜禪師	黃泉禪師	盤谷禪師	眞淨禪師	大觀禪師	見泥禪尼	顧鑑禪師	玉湖禪師	海山禪師	風外禪師	春應禪師
二八七	二八八	二八九	二九〇	二九一	二九二	二九三	二九八	三〇〇	三〇二	三〇三	三〇四	三〇六	三〇六	三一	三一	三一	三一

妙喜禪師	詠洲禪師	綾河禪師	耕隱禪師	拙堂禪師	回天禪師	通應禪師	月珊禪師	大拙禪師	陽關禪師	京璨禪師	石應禪師	迦陵禪師	萬寧禪師	覺巖禪師	大綱禪師	寶船禪師	大丘禪師
三二七	三二八	三三〇	三三一	三三四	三三五	三三六	三三七	三三九	三三二	三三三	三三四	三三五	三三六	三三六	三三八	三三九	三四〇
伊山禪師	智教禪尼	筏舟禪師	羅山禪師	佛山禪師	義堂禪師	月潭禪師	物外禪師	純圓禪尼	蘇山禪師	天章禪師	願翁禪師	歌女	薩門禪師	大震禪師	雪航禪師	鐵翁禪師	無三禪師
三四一	三四二	三四三	三四五	三四七	三四九	三五一	三五三	三五九	三六〇	三六五	三六六	三六七	三六八	三六九	三七一	三七三	三七七

晦巖禪師	三九九	泰龍禪師	四二五
蓬洲禪師	三八六	星定禪師	四二九
龍水禪師	三八八	環溪禪師	四三〇
雪潭禪師	三八九	越溪禪師	四三七
長沙禪師	三九三	恐溪禪師	四四一
橋仙禪師	三九四	山岡鐵舟	四四二
伊達自得	三九六	龍關禪師	四五〇
奥宮慥齋	三九九	坦山禪師	四五二
西鄉南洲	四〇〇	洪川禪師	四六二
俄山禪師	四〇五	獨園禪師	四六八
超首座	四〇七	匡道禪師	四七四
白翁禪師	四〇九	潭海禪師	四七八
海州禪師	四一〇	無學禪師	四八二
綾洲禪師	四一三	滴水禪師	四八二
春日載陽	四一四		
奕堂禪師	四一六		
惟庵禪師	四二三		
馬應禪師	四二四		

近世禪林言行錄

森 大 狂 纂 輯



諱は悲禪、白隱と號し、別にまた鶴林、開提翁などの稱あり。俗姓は杉山氏、母は長澤氏、幼名を岩永郎といひ、貞享二年十二月二十五日をもて生る。駿河國駿東郡原驛の人なり。實に源義經の臣鈴木重家の遠裔に出つといふ。年甫めて十五、松蔭寺單嶺に依て難染し、正受老人に侍して、關山國師の肝膽心腸を徹見し、また泉州蔭涼寺壽鶴老人に謁して、洞上の宗旨を究盡し、松蔭に住して、大に天下の道俗に接す。明和五年十二月十一日化す。世壽八十又四、法臘七十。後櫻町天皇、特に諡號を賜ふて神機、獨妙禪師といひ、明治十六年、今上天皇、更に諡を賜ふて正宗國師といふ。

興て按するに、本有圓成關山國師、大機大用、佛祖の慧命を截斷し、人天の眼目を瞎

却す。その門より授翁を打出す。授翁の子を無因といひ、無因の子を日峰といひ、日峰の子を義天といひ、義天の子を雪江といふ。雪江、四子あり、いはく、景川、いはく、悟溪、いはく、特芳、いはく、東陽、これを妙心の四派といふ。東陽、七子あり、天蔭、大雅、朴龍、春鳳、天關、希雲、亭仲、これなり。大雅の子を功甫といひ、功甫の子を先照といひ、先照の子を以安といひ、以安の子を東漸といひ、東漸の子を庸山といふ。大雅より庸山にいたるまで六世、景川、悟溪、特芳の三派に比して、頗る寂寥たりしか如し。庸山の門に愚堂を出すに及びて、東陽の一派、頓に大に振ひき。愚堂、無難を出し、無難、正受を出し、正受、つひに白隠を出しぬ。白隠、か法幢を建るや、道俗雲集して、恰かも一佛の出世するかごとく、臨濟の禪風大に揚り、法席の盛なること、前古希に觀る所なりき。叢林相稱して、五百年間出の大宗匠とす。

白隠 幼より穎異勇敢にして、事に觸れて沮す、自ら世縁の控勒を受くることを欲せず。年甫めて十五、單嶺を拜して落髮受戒す。單嶺もと大度にして、越格の量あり。白隠の髮を剃りをはりて、その脊を打つていはく、梵儀たしなまんとす、すなはち安名を授けぬ。德源東芳、偈もて祝して云ふ、善哉眞出家。悲喜佛與魔。若

欲成斯道。莫忘三願摩。白隠誓ふて曰く、もし肉身にして火も焼くこと能はず、水も漂はすこと能はざる底の力を獲すは、たとひ死すとも休せずと、日夜作禮す。寶永元年の春 白隠、濃州檜木の瑞雲にゆきて、馬翁に師事す。堂中時文さに書を曝し、内外の典籍、架上に堆きを見る。白隠、進て禮拜していはく、儒佛老莊諸家の道、我はた何をもて師となさむ。護法天龍、願はくは我に正路を示したまへとて、目を閉ちて黙禱し、手に任せ把著して、一小冊を得たり、禪關策進と名く。頂受して之を開き、引錐自刺の事に撞著す、いはく、昔慈明在汾陽時。與大愚、瑯琊等六、七人、結伴參究。河東苦寒。衆人憚之。明獨通宵坐不睡。自責曰。古人刻苦。光明必盛大。我又何人。生無益于時。死不知于人。於理有何益。即引錐自刺其股。白隠、閱して此に至り、宿習智を發し、決定心を生して、策進をもて日新の銘とす。時に白隠年二十なりき。

白隠 年わかしくして、志望遠大、庸流と伍するを欲せず。朝夕、富岳に對して、自ら怡ふ。一日、富岳いつくにか隠れて、眸中に映し來らす。因てつらく、四邊を視るに、富岳前後に圍繞せり。時に白隠自ら號して白隠と呼ふこと三たび、富岳、數歩を

退きて固坐するを感す。けたし富岳つねに雪に隠れて白きを以てなり。のち白隠の名天下に轟き、その徳を仰かざる者なし。里俗に謠ふていはく、駿河には過ぎたるものか二つあり、一に富士山、二に原の白隠。

白隠二十三歳の春 備後福山の正壽に抵り、正宗贊會を終へ、伴を結て東に歸る途上、行く／＼狗子佛性の話に參す。たゞ／＼岡山城を過ぎて、同友みな城樓の莊麗と、風土の勝概とを語る。白隠ひとり謂へらく、我道いまた成せず、何の暇ありてか遊觀を事とせむやとて、目を閉ちて見す。かくて播州に入り、一山寺に宿し、溪水の流るゝを見て、詠していはく、山下有流水。滾滾無止時。禪心若如鬼。見性豈其遲。辭して途に上る。一友病あり、白隠すなはち代てその擔包を負ふ。一友また囑していはく、我尙ほ太た困めり。吾兄は肥壯にして且力多し、盍そ我を扶けさると。白隠、忤はず、三包子を合せて搭起し、毫も難色なし。ひそかに念して云ふ、願はくはこの微善力に依りて、速に見性の素願を遂けむと、杖もて卓著し、歩々、無字を參詳す。行て兵庫に到り、舟を僦ふ。同舟の人みな月に對して談笑す。白隠すなはち包子を卸して甘眠し、一覺して目を開けは、舟をさし津口に在り。よつて舟

子に問ふていはく、いまた纜を解かざるか、はた半程に泊るか。舟子、罵りて云ふ、咄この睡眠漢、何をか言ふや。昨夜纜を解くもの、おほよそ十艘ありしか、颶風の爲めに多くは覆没し、幸にして命を全うせしもの唯た吾か舟のみ。爾時一舟の人みな神に訴へ佛に禱り、我もまた髪を斷て海神に誓へりき。然るに子ひとり假臥して、舳聲あたかも雷のことし。我の海上を往來すること多年なるも、いまた曾て子かことき膽大の臭禿奴を見ず。白隠、驚き起て之を視るに、衆みな手巾もて頭を縛し、面色宛も土の如く、右に倒れ左に顛し、氣息奄々たり。たゞ見る、滿場の嘔吐物、四邊に臭を放ちて鼻を掩ふに暇なく、脚を著くるに所なきを。即ち合掌して謝していはく、頼に諸聖の擁護に依て、夜來の患難を免れ得たりと。舟を出て、宿を借り、藥を辨して苦惱を扶けぬ。のちつねにこの事を舉げて門人を戒めていはく、陰德陽報、我その實なるを知ると。

寶永五年の春二月 白隠、春長等と共に越後高田の英巖にゆき、性徹の人天眼目を講するを聞く。寺後に先俟の廟あり。聽講の餘、必ず此に坐し、日夜鑽研して、動もすれば寢食を廢するに至る、かくて筵に臨みて講を聴けとも、聲その耳に入

らす、堂に登りて食を受くれとも、物その眼に遮らす、人を見るに、陽炎の浮ふかごとく、身を顧るに、雲中に在るかごとし、譬へは、水晶世界のごとく、森羅萬象みな悉く明徹にして、都て一點の陰翳なし。なほ精神を奮起し、所現境界に著せず、單々に提持し、重擔を負ひて峻嶺に登るかごとく、十二時中、四威儀間、本參話頭の外更に異念を難へず、十餘日を経て、一夜、恍然として曉に達し、忽ち遠寺の鐘聲を聞き、微音纒かに耳に入れば、徹底根塵を剝落し、恰かも洪鐘を耳邊に撃つかごとく、豁然として大悟す。即ち大聲に叫ていはく、やれ、巖頭和尚は眞而息災であつたはやい。直ちに走せて、性徹に見えて所見を呈す。性徹の機語俊ならず、一掌を與へて出づ。是に由て、大に所見を擔ふて、諸方を併呑し、自ら思へらく、三百年來いまた予かごとく、痛快に了徹する者あらず、四海を一掃するも、誰か能く我か機鋒に當らむやと。時に一僧の宗格といふものあり、面目嚴冷、顧視凡ならず、人みな錯て膽大の輩とす。白隠、これを異なりとし、またその言の妙詮多きを聞き、よつて之と宗旨を論す。宗格のいはく、公は誠に超卓なり。たゞ惜むらくは、到り不到あり。公もし吾か老漢に見えは、必らず觀るべきの事あらむ。白隠その人如何を叩く。宗格いはく、我

もと信州の人なり、州の飯山城の上倉村に一庵主あり、名を正受端首座といひ、愚堂の孫にして、至道庵主手度の子なり。専ら吾か宗向上の一著を提く。我、他の毒手に觸るゝこと此に年あり。思ふに公の器識ささに他の針錐を受るに堪えたりと。白隠これ聞き、徑ちにゆきて見えむとす。宗格いふ、老漢の門風たゞ眞正の種草を要し、もとも多衆鬧熱を惡む、必らず人を伴ふことなかれ。散筵を待て、ひそかに逃れて往かむと。正格また白隠の道の太た易きを持むを見て、これに誠めていはく、公請ふ傳灯録中の諸祖を見よと。白隠よつて記傳を閲し、達磨大師の章に、七歳出家得道。尙侍般若多羅二十年而盡其繚奥。といふにいたりて、慢心稍減して、増進智を發しぬ。

同年四月 白隠、宗格に従ふて飯山正受庵に抵る。時たゞゞ正受の柴を刈るにあふ、白隠進て調を通す。その庵に歸るに及ひて、白隠所解一篇を呈す。正受、左手に偽を握りていはく、這箇はこれ汝か學得底。右手を展ていはく、那箇かこれ見得底。白隠いはく、もし見得底の呈すべきものあらは、須らく吐却すへしと云ひ了て、嘔吐の聲をなす。正受抄していはく、趙州の無字、作麼生か會す。白隠いはく、

趙州の無、何の處に向てか手脚を著けむ。正受、指もて白隠の鼻頭を抑へていはく、
「ても大きな手の著様な」。白隠、此において、通身汗流れて、慢幢倒れ了れり。正受、大
に笑ひて云ふ、箇の鬼窟裡死禪和。白隠、語なし。正受いはく、汝、恁麼にして足れり
とするか。白隠いはく、何の足らざる處かあらむ。正受、南泉遷化の話を擧す。白
隠、耳を掩ふて出づ。正受いはく、開梨。白隠、首を回す。正受いはく、箇の鬼窟裡死
禪和。これより白隠を見ることに、總に呵して云ふ、箇の鬼窟裡死禪和。また室に
入ることに、纒かに門に跨るを見れば、便ち云ふ、嗟呼、誰い。恰かも樓上より井
底に臨むに似たり。また室中示していはく、陳操、尙書登樓次。有數僧過樓下。衆
官曰。來者總是行脚僧。尙書曰。不是行脚僧。待近爲汝勘。僧至樓下。尙書召
曰。僧。僧回首。尙書顧衆官曰。不信道耶。正受、急に責めていはく、官人に代て
如何か下語して、尙書をして喜て好知音と道はしめむと。この一轉語において、白
隠の室に入り門に跨るを見ることに、急に逗拶す。纒かに口を開けは、便ち喝出せ
らる。また碧岩五十一則の頌を擧していはく、同條生也共相知、すなはち問はず。
不同條死還殊絕。是れ什麼邊の事をか明す。またいはく、南北東西歸去來。夜深

同見千巖雪。句裡機を含む。汝、作麼生か會す。道へく。白隠、心に思へらく、老
漢、總に我か得悟の痛快なることを知らず、却て我を輕蔑すること、是の如し。重ね
て威力を全うして死戦一場せむには、如かすとて、室に入りて商略す。正受、怒罵す。
白隠、持論して已ます。正受すなはち捉住して打つこと數十拳して、暈倒す。白隠、
欄下に墜ちて、失心茫然たり。正受、これを瞰下して、呵々大笑す。白隠、猛省して、通
身汗を滴らす。直ちに堂上に登て禮拜す。正受、高聲に叫ていはく、箇の鬼窟裡死
禪和。白隠、此において、親く南泉遷化の話に參す。一日、省あり、入室下語す。正受、
許さす、なほ云ふ、箇の鬼窟裡死禪和。白隠、苦吟すること累日、因に分衛に出て、某家
の門に立つ。老婆いふ、別處に過ぎ去れ。白隠、恍然として立つ。老婆、怒て竹帚を
拈していはく、この漢、去れと道ふに、なほ此に在て踟躕するかと云つて、便ち打つ。
白隠、釋然として、又さに古人の旨を領し、従前の手脚を挾むことを得ざる底の荷葉
團々の頌、疎山壽塔の因緣、南泉遷化の話、その他の難透の深旨、一時に現前す。欣然
として還り來る。いまた門閭を踰えざるに、正受、見て喜ていはく、汝、徹せりと。一
日、曹洞五位偏正を請益す。正受いはく、汝、試に道へ、看む。白隠、所見を呈す。正受、

笑ていはく、たゞ這箇のみか、更に別に在ることありや。白隠、無語。正受、呵していはく、洞山の五位は、もとも悟後の修行を明す。太深理あり。もし汝か所解のこ
とくならば、たゞ是れ一場の閑家具。洞山、許多の階位を立て、什麼をか爲すと。
のち真訣を傳へぬ。また一日、白隠、正受と、同く施主家の齋に赴き、路の嶮崖に臨む
處に到りて、正受、急に顧みて、捉挂していはく、我有正法眼藏、涅槃妙心、實相無相法門。
付囑摩訶迦葉。これ什麼邊の事ぞ。白隠、欄口に一掌を興ふ。正受すなはち休す。
白隠の正受に侍すること八月餘、旦夕咨扣して、つひに蘊奧に至りぬ。正受たゞ扶
起真風の一著を擧す。平生垂語していはく、我がこの禪宗、宋にいたりて衰へ、明に
及ひて滅絶す。その餘毒傳へて日本にありといへとも、恰も白晝に斗を見るかこ
とし、誠に痛歎すへし。またいはく、方今四海を一掃して、但た是れ相似學標の死漢、
見地不脱の宗匠のみ。佛祖傳來の些子にいたりては、いまた曾て夢にたも見さる
ところなりと。白隠のち人に謂ていはく、予かつて正受老漢の評論を聞く時、私に
思惟へらく、今や列刹相望み、名師互に興る。老漢、何か故に是のことく諸方を憤激
するや、これ謂はゆる我に同き者に黨するならむと。のち江湖に遊歴して、數員の

宗匠を見るに、一箇の大眼目を具する底の真正の宗師に撞著せず。是に於て始め
て正受老漢の道遙に諸方に卓出することを知りぬと。十一月、同友の蹤を追ふて
來るに會し、その行道を妨げむことを恐れ、つひに辭して去る。正受、相爲めに送る
こと二里餘、脚に木屐を穿ち、戀々として行く。白隠、居士不自に告げて、正受をして
還らしめむことを請ふ。不自すなはち正受到謂ふやう、老師よろしく歸りたまふ
へし。たとひ送りて十里に至るも、別離の情竟に盡しかたからん。正受乃ち顧み
ていはく、鶴藏司いつくにかある。白隠、近前す。正受、親くその手を握り、囑してい
はく、請ふ腕力を盡して、伶俐の衲子兩箇を打出せよ。必ず多く求ることなかれ。
多く求るときは、太器成しかたし。もし兩箇真正の種草を獲は、或ひは古風再び回
ることあらむと、良久して手を放ちぬ。また隆藏司に囑していはく、汝、鶴藏司に隨
ふて去れ、伊れ汝か爲めに點發し去ることあらむと。白隠、叮囑を受けて、感泣告謝
して去りぬ。

白隠 參學に勞し、遂に肺を病み、二十六歳の時にいたりて、十二種の凶相を現し、
良醫もまた匙を投するにいたりぬ。たゞ山城白河に白幽子といふ者ありて、

内觀の法を得たるを聞き、直にゆきて、その訣を受け、始めて如來禪と祖師禪と共に安那覺般那覺二三昧をもて諸佛自在通、諸聖無漏果の父母となすことを知り、病もまたつひに癒ゆ。事は、つはらに夜船閑話に見えたり。

正徳三年正月 白隠先師單嶺の忌齋に値て、炷拜を消していはいはく、日域眞丹及月支。東風吹轉百花枝。眼前多少好春色。盡是先師醜面皮。

白隠 かつて曹洞の尊宿鐵心の道風を聞き、自ら思へらく、他すてに化し去るといへとも、必ず遺風の鑑むべきものならむとて、直に泉州にゆき、錫を蔭涼に掛く。禪規たゞ嚴烈なるのみにして、頗る鐵心の古風を失へり。一日、白隠衆に隨ひて後園を灑掃するの次、把茅の一陋室の中に大涅槃經を机上に安するを見る。白隠これを怪みて僧に問ふに、僧いふ、壽鶴道人といふ者あり。久しく鐵心に侍す、性度狂簡にして、世の人と交らずと。白隠これを物色して得たるに、醜面弊衣、形わたかも狂人に似たり。之と語らむと欲し、纒かに近くに、忽ち走り避けたり。白隠、遂ふて路頭盡くる處に到り、衣を捉へてはいはく、老兄且つ住まされ。我遠く鐵心の風を慕ふ、故に來りて錫を掛く。願はくは、老兄我か爲めに他か平生の示誨を舉せよ。壽鶴

愕然としてはいはく、東西を回看するに、眞風地に墮ち、いまた一箇も先師の道を問ふ者なし。子何そひとりこの言をなすやと、便ち閑に乗して、鐵心の作用を語りぬ。一夜、端坐して、曉に徹す、たゞく雪ふる音を聽きて、女子出定の大事に撞著し、歌を詠みてはいはく、さかせはや信田の森の古寺の小夜ふけかたの雪のひゝきを。

白隠 濃州巖瀧山に潜みて刻苦す。一日、出て、山村に分衛す。人あり語りていはく、むかし關山國師、敕を奉して伊深山を去るの時、一翁媪あり、泣てはいはく、我ら開恩にして、目前に活佛の在すことを知らず、懺謝するに地なし。願はくは一言を賜ひて我らか冥路を資けたまへ。國師いはく、近前來。翁媪、近前す。國師すなはち二人をして左右に低頭して頭々相近かしめ、一手は翁の項を握り、一手は媪の項を握り、良久しうして、兩頭相撃つこと一下して之を放つ。翁媪、會せず、感信して謝すと。白隠これを聞きて、ふかく國師の傷悲徹困なるを領すといふ。

享保丁酉の正月十日 白隠諸檀および同門尊宿の勸に依り、單嶺の忌齋をもて、入院の儀を整ふ。この時にあたりて、松蔭の顏廢言ふへからず、上漏下濕、室懸磬のことく、堂中事を執るに、或ひは笠を戴き履を穿つにいたりぬ。一老僕の覺左

衛門といふ者あり、薪を拾ひ菓を探りて、僅かに晨昏の食に供す。一僧あり、來り侍し、毎日外に出て食を乞ふて助給す。白隠僧の面色いたく糞れたるを見て、感していはく、我が爲めに勞すること、一に何ぞ此のことくなるや。今や堂上に障戸なく、室内に灯を點せず。一室洗ふかごとく、一物の汝に酬ゆべきものなしと。乃ち彼の僧の爲めに大悲の書を講す。因に巖瀧山中の事を追憶し、歌を詠みていはく、な
さけあるもつらさも遠くなりはてぬうれしやよその山はたつねし。

松蔭の厨庫　の空乏なること殆と言語の外にあり。商家にて捨つる所の敗醬を乞ひて膳に供するに至る。ある時の藏司、典座となりて冷汁を侷む、椀面に蟲の蠢くあり。白隠、叫していはく、汝何そ事を作すこと放懶なるや。的いふ、敗醬蟲を生せり、されとこれを壓殺するに忍ひす、たゞ水に和するのみ。白隠いはく、別物なしや。的いふ、松蔭もとより之を貯へず、僅かに他の捨る所の物を乞ふて、自ら給するのみ。須臾くせば、蟲出て去らむ、而して後之を喫せよと。その枯淡なること想ふべきなり。

享保丙午の秋七月　白隠、一夕、法華經を讀み、譬喩品にいたりて、乍ら蚤の古

砌に鳴きて聲々相連るを聞き、豁然として、法華の深理に契當す。初心に起すところの疑惑、釋然として消融し、従前多少の悟解了知大に錯て會することを覺得す。經王の王たるゆゑ、目前に燦然たり。覺えず聲を放ちて號泣し、初めて正受老漢平生の受用を徹見し、また大覺世尊舌根、兩莖の筋を缺くことを了知す。これより大自在を得て、佛祖向上の機、看經の眼、徹底了當して復た餘蘊なし。時に白隠年四十二なりき。

原驛の商某　といふ者あり、平生ふかく白隠の高徳に歸依し、しはく、財物を供養す。某の女たましく、その家奴と通して、一子を擧ぐ。某巖に之を責め問ふ、女すなはち欺きていはく、實に白隠和尚と通すと。某いたく怒りていはく、我十年かくの如き惡禿頭を供養す、臍を嚙むも及ぶことなしと、直にその子を抱きて松蔭に來り、之を白隠の膝下に投し、口を極めて白隠を罵りて去る。白隠また争はず、儲をもてその子を養ひ、常に之を抱きて眠り、おたかもおのか子のことし。見る者もまた實に白隠か某の女と通して、さうけたるものとなしき。ある日、雪のふりけるに、白隠また例のことく子を懷にして分衛す。某の女これを見て、大に悔い、泣て實を

某に訴ふ。某驚きて措く所を知らず、馳せ來りて、白隠の膝下に伏して、その事の由を語り、かつ涙をふるひつゝ、言ひけるは、我開眼にして、活佛なることを知らず、さきに悪舌を弄したることのおそましさよ、願はくは我か罪をゆるしたまへと。白隠莞爾として笑ていはく、この子また父あるかと、毫も之を意に介せざるものゝことし。某ますく敬仰しきといふ。

白隠因に快俊來り謁す 俊は密門の名衲なり。白隠、火筴を拈していはく、這箇の一莖、纒かに刃を以て擬せば、則ち尙ほ眞證の者にふらす。快俊これを聞きて愕然たり。のち白隠これを陽春に舉似す。陽春いはく、彼のことき密門の豪傑すらも、なほ長老を如何ともしかたしと。

元文庚申の春 白隠、虛堂録を提唱す、闍衆四百餘。開卷示衆にいはく、欲念息耕雜毒海。參疎山壽塔因緣。可憐十刹斷貫索。擲著一錢打兩錢。乃ちいはく、我はこれ禪門宗師の糟粕なりといへとも、もし破叢林、放蕩不羈の後生あらば、嚴責痛棒を加へむ。執事者照顧著せよ。こゝにおいて、道價、天下に冠たり。江湖飽參の銅頭鐵額、東西三四里間の山林樹下に駢集して、庵居修禪場となす。

延享四年の春

尾藩の士織田平治郎信茂、松蔭に來りて白隠に參す。白隠問ふていはく、前來何事をか爲す。信茂いふ、我平生法を聞くことを好む。此を以て病を感ず。白隠いはく、公の病如何。信茂いふ、我始め一禪師に逢ふて心性の理を探り、また律師に會ふて秘密藏を問ひ、二宗において疑惑を生じ、阿字觀の中において、乍ち地獄の相を生ず。心性の理をもて之を制すれば、二見こもく争ひ、心意寧からず、寐ねては悪夢を見、寤めては思想を勞するのみ。白隠、咄していはく、遠て地獄を恐るゝ底の者を識るや。信茂いふ、空見、這の病を感ず。白隠、連喝に喝散す。いはく、這の小奴子。夫れ士たる者は、君のために忠を竭して、水火を避けず、身を鋒刃に寄せて、膚撓ます、目瞬かす、汝何ぞ空見を恐るゝや。即今一々地獄に墮して點檢して看よ。信茂いふ、善知識なんそ人をして惡道に墮せしむるや。白隠、笑つていはく、老僧か墮する底の地獄八萬四千所、汝看よ、一所として老僧か墮せざる底あることなし。信茂これを聞き、歡喜して禮拜し、かつ云ふ、願はくは、照心すへきの書を示したまへ。白隠いはく、我か授與する所廣博なり、汝得て見るへからず。信茂いふ、たとひ萬卷なるも、我豈に敢て辭せむや。白隠、良久しうしていはく、嘆、此を去

て門を出ては、便ち往來の絡繹たるを見よ、左右の館舎を見よ、洞軒を見よ、茶店を見よ、驛路の夾松を見よ、驢馬の交馳を見よ、沼津より品川を過ぎて江府に到り、兩國橋上の往還淺草寺裡の撥關、朝より暮にいたるまで、那時か打失、那時か不打失を試むへしと。信茂拜受して去りぬ。

白隠 正受老漢の三十三回忌に値り、自ら老漢の頂相を描き、香語をもて贊に當ていはく、掀倒天源一嫡流。飯山深處使人愁。嫉妬妒火懶拈出。留與兒孫結寇讎。寶曆丙子の夏四月 白隠、高林の大應國師四百五十年忌齋に赴き、大應録を評唱す。拈香にいはく、擧。建長與這老和尚相隨多年。面面相視。眼眼相照。所以一年一度燒一炷香、點一甕茶。不作楊岐女人拜。羅蔔從來出鎮州。伏以。祖師正好供養。血滴滴地。唯恨露柱掉頭不悅。何故。天下之車。莫不由轍。而言車之功。轍不與焉。

寶曆己卯の秋七月 白隠、江戸に赴きて臨川精舎に入る。時人戲に誦ふていはく、名僧を引籠町の臨川寺藪の中にも香の物かな。

小出侯 ふかく白隠の道風を欽し、しはく、使を遣はして、その邸に請す。白隠

すなはち便を得て訪はむことを約す。寶曆己卯の冬十一月、白隠たゞく、江戸に在り、乃ち約をふみて侯の邸に至る。時に侯外に出て、ゝゝらす、よつて書院に入りて候つ。侯の臣、屏風を出して書を乞ふ。白隠筆をとりて題していはく、小出々々と待つ日にこいて待たぬ日に來て屏風書く。侯歸りて大に喜び、之を珍襲して家に傳へきといふ。

岡山城主 池田侯ふかく白隠に歸依し、しはく、來りて心要を問ひ、時としては曉に徹することありき。寶曆中、侯文た江戸に來るの次、駕を原驛の本陣渡邊氏に駐めて、白隠を松蔭に訪ふ。時に典座の僧、厨庫の大拙鉢を破る。白隠、時節到來と謂ひしや、出て、侯を室に迎へ、談笑刻を移す。侯去るに臨みて云ふ、今日は微行にて、從者なく、爲めに見參の禮を缺けり。老師もし望む所あらは、他日これを呈せむと。白隠いはく、林下枯淡なりといへとも、足らざるものなし。た、即今、厨庫の大拙鉢を破れり、請ふ之を贈りたまへ。侯いよく、白隠か心事の清淡なるに成し、岡山に歸りてのち、備前燒の大拙鉢數箇を作らしめ、驛馬を馳せて、之を松蔭に送りきといふ。

西國の大諸侯某 江戸に行くの次白隠に謁して垂示を乞ふ。時たま／＼村婦あり、來りて黍餅を供す。白隠すなはち執て之を俟に進む。俟色沮みて、食ふこと能はず。白隠叱していはく、強ひて之を喫せよ、小民の疾苦を知ることを得へし。老稱か垂示、此に外ならずと。侯、大に感謝しきと云ふ。

原驛の富豪 植松與右衛門、資性敦厚にして、能く家を守る。その家法に奴婢の傘を携ふるを禁す。之か爲めに奴婢は傘を知人の家に托しおきて、外に出る時之を用ふるを常とす。ある日、一婢新に一柄の傘を購ひ、松蔭に來りて、おのか名を記さむことを求む。侍者これを諾し、事の情を白隠に告ぐ。白隠すなはち筆をとりにて題していはく、雨か降らふか車軸かしよふか主の仰はそむくまい。婢もとより文字を知らず、之をおのか名を記せるものと信し、雨の降りける日、事に托して暇を乞ひ、その傘を張りて行く、見る者みな之を嘲り笑ふ。婢これを怪み、人に問ふて始めてその名を記せるものにおらざるを知り、大に怒り、松蔭に來りて、傘價を償はむことを乞ふ。白隠よつて、婢を延き、ねもころに主に事るの道を諭し、また與右衛門に逢ひて、奴婢もまた人の子なり、決して賤むべきにおらず、それをして雨に打た

れしむるときは不仁の太甚しきものなることを諭し、その家法を改めしめたりきといふ。

白隠 また人の囁に應し、多く畫を作りて之に與へき。その畫みな人の意表に出て、筆墨飄逸にして韻致多し。

明和戊子の冬十一月 白隠、松蔭に歸り、衰病いよ／＼篤し。十二月六日、冬雷、松蔭に震す、一衆悚然たり。七日、醫古郡氏來り診し、いはく、脈微大異なし。白隠、呵していはく、我が死まさに三日を出てさらむとす、子いまたその徴を知らず、豈に良醫と云ふへけむや。山梨丁徹來り訪ふ、之と對局手談一兩著して休す。十日、臥褥にありて、門人遂翁を召して後事を囑し、十一日、曉旦、安眠高臥し、俄かに大陣一聲、脇を右にして化す。東嶺いはく、最後の吽聲、真成に巖頭老漢に通似す。世人批議していはく、遺偈を留めざるは、大小の鶴林、一著を放過すと。錯々、好箇の吽聲、上霄漢に透り、下、黄泉に徹す。世の遺誠遺偈に較ぶるに、我は道はむ、他に勝ること十倍と。

白隠の法

を得たる者は、遂翁東嶺をもて二神足とす。語録あり、荆叢毒藥と

いふ。その他槐安國語、闍提紀聞、息耕錄、開筵普說、寒林貽寶、寶鑑貽照、および假名法語等若干あり、今なほ盛に世に行はる。

明和六年六月八日 後櫻町天皇、特に褒章を賜ふ、いはく、教。萬俣芙蓉。卓現海隅。峰分八葉。根蟠三州。至清之氣。神秀之象。集大成者。爰大寂常照禪師。遠胤白隱座元。間出偉人。格外名僧。深入正受。大圓鏡沒寶明。親徹本光無盡。燈發靈焰。勘破東山關號令。舖張南浦毒爪牙。留下室內救弊之微言。道行四海。成被庵居參禪之真種。化旺十方。可謂。天澤雲彌。龍澤注霖。少林春回。鶴林垂蔭。師之德音。洋洋盈耳。簡加褒章。蓋曰神機獨妙禪師。

天桂 (曹洞)

諱は傳尊、天桂と號す。また滅宗、老螺蛤、老米蟲、睡眠樓などの別號あり。俗姓は大原氏、紀伊國和歌山の豪族なり。慶安元年五月五日をもて生る。甫めて八歳にして、憲養寺傳弓を禮して、薙染し、遊方して、興聖の龍蟠、萬松の祖海、可睡の衝天に參し、のち靜居の五峰に侍し、つひにその法をつぎぬ。實に永平道元禪師より

十九世なり。攝津の藏鷲庵、退藏峰に住して、大に四來の學人を接得す。享保二十年十二月十日化す。世壽八十又八、法臘七十又一。

けたし聞く、室町の末造よりこのかた、曹洞の宗風やうやく振はす、吉祥古佛の道、まさに地に墜ちむとす。興聖寺萬安か高く法幢を建つるに及びて、月舟、山徳翁等の宗匠相つきて起り、やうやくまた盛んなりき。ついで、天桂のいつるに至りて、大に森嚴綿密の宗風を宣揚し、二たひまたその古に回すことを得たりき。曹洞の古佛を論する者、天桂をもて玄虎藏主このかた稀有の大宗匠とし、臨濟の白隱と併稱すといふ。

寛文乙巳の春 天桂ひそかに腰包して行脚し、尾州に抵りて、萬松寺祖海に參す。祖海、天桂の氣宇太た高くして、凡流にあらざるを知りて、大に之を激勵し、因て特に天桂の爲めに碧巖を提唱し、僅かに三日にして、卷を終ふ。天桂また更に研釋すること三晝夜にして、初めて眠に就きぬ。その大根大機、純一無雜なること、おほひねこの類なりき。

天桂 二十三歳の春、京に上り、泉涌寺にゆきて、戒光院周律師の法華を講ずるを

聞き、六十小劫猶如食頃の文と、菩薩地誓願の事とを思ひ、忽ち大疑團を起し、之を周律師および輪下の耆宿に質すに、おほむねみな義訓をもて之を辯し、模糊して勳絶すること能はず。天桂すなはち義學の益なきを知りて、遂に去て、純ら參禪し、また教律に遊はさりき。

延寶癸丑の春 天桂駿河にゆきて、五峰に島田の靜居寺に謁す。五峰一見して、その凡庸ならざるを知りて、之を器重し、示すに向上の針錘をもてす。一日、天桂出て、他處にゆく、次の山の容、水の流の最と麗しきを見て、豁然として、従前の疑氷を泮解す。直に歸りて、所證を呈す。五峰印可していはく、眞に我か宗の種草なりと。天桂すなはち禮拜す。これより閃機電轉、能くその鋒に當る者なし。時に天桂の年二十六なりき。

天桂 蔭涼寺鐵心の道望太た高きを聞き、適きて參見す。鐵心つらく見ていはく、汝を待つこと久し、何ぞ來ることの遅きや。天桂いふ、和尚某を見ること什麼に因て遅きや。鐵心いはく、長老太た饒舌。天桂いふ、たゞ遮掩し得ざるか爲めなり。鐵心微笑して休し、之を待つこと最と懇なりきといふ。

延寶丁巳の正月 天桂再び靜居に歸り、五峰に依りて、太源下十四世の法をつき、五峰に代りてその席を董す。三月、諸嶽山に瑞世し、鳳闕に詣り、教黃を拜して歸り、たゞく佛生會に值ふていはく、指天指地。指頭有眼。脚下有眼。恁麼具大眼目底。爲什麼被山僧一點。恭逢敵手、行難藏。この時に當りて、靜居の頽廢尤も甚しく、寺田もまた多くは村民の奪ふ所となれり。天桂、毫も之に悵に置かず、日々、分衛して枯淡を甘み、自ら畚築して之を修め、手足胼胝たり。然れども、晨香夕灯、清規儼として叢林のことくなりき。

天桂 妙心寺盤珪を島田の僑居に訪ひ、這事を商量す。盤珪もまた靜居に來り、信宿して閑談す。盤珪、諸堂を巡視するの次、選佛場の額字を見ていはく、是れまた野狐窟なり。僧問ふ、是れ什麼の謂ぞ。盤珪いはく、眼、佛に瞞せらるると。僧のち之を天桂に告ぐ。天桂ひそかに盤珪の用處を勘破し、微笑していはく、實に宗門の老骨樞なりと。このうち、天桂また盤珪を江戸に訪ひ、眼、佛に瞞せらるゝの語を商確して、他の痒處に抓著す。盤珪いはく、然るといへとも、更に須らく人を見るの眼を具すへし。天桂いはく、和尚某を見ること如何。盤珪いはく、不恁麼々々々。天桂

いはく、這の野狐精と。盤珪すなはち休す。

天桂 因に僧あり、婆子燒庵の則を以て請益す。天桂いはく、古へよりこの則を解する者太た多しといへとも、たゞに婆子の用處を會せざるのみならず、庵主の行履もまた識らざることありとて、示すに頌をもてす、いはく、正恁麼時何以對。縱令佛來合他燒。可憐大小禪和上。阿附臭婆滴未消。

元祿己巳の夏 江州の大雲寺疏をもて天桂を請す。天桂いはく、弊風久しく扇き、斗米嗣を易へ、呂牛、姓を冒す、すてに家法の本を喪ふ。何の出世かこれあらむ。爾らまた言ふことなかれと。專使いはく、大雲の一衆、たゞ大法の爲めに師を假るのみ、誰か之を不典と謂はむと、懇請して已ます、遂に起て之に應ず。この翌年四月五日、事に因つて、遽かに退院す。偶にいはく、去還好矣來還好。萍水浮雲一箇僧。豈爲別人穿鼻孔。隨緣今日又騰騰。

天桂 孤錫飄然、大阪に抵りて、一庵を結ひ、署して明月林藏賢庵といふ。偶あり、いはく、問津浪速寓萍跡。尙隨宿鷺收翎藏。從來不是無雅趣。兼設叢聲咽且揚。此において、士衆參禮して市の如し。一官人あり、祖意を問ふ。天桂、偈を與へてい

はく、一華開五葉。誰道是心傳。狗子庭中走。貓兒甕上眠。また教徒あり、南泉三不是の語を請益す、天桂また偈を示す、非佛亦非物。非心是阿誰。元來人不識。破杓ノ麻皮。

元祿丙子秋七月 阿波丈六寺石峯まさに退鼓を搦たむとし、書を寄せて、天桂を請すること尤も懇なり。天桂すなはち之に應ず。偶あり、いはく、山僧今日事如奈。不爲法還不爲人。只得麟山風水好。隨隨委委任天真。

天桂 三冬、三轉語を設けて、參徒を試験す。一轉にいはく、不念彌陀佛。南無乾屎橛。二轉にいはく、一字不著劃。八字無兩ノ。三轉にいはく、張三喫鐵棒。李四忍疼痛。この會、濟洞の學人多く來り參して、百三十餘員あり。濟家の僧某問ふていはく、和尚、碧巖を講す、昔時、人の哀悼するあり。今日また悼まは、什麼を將てか祇對せむ。天桂、欠伸していはく、會すや。僧いふ、不會。天桂いはく、碧巖死すること已に多時。僧いふ、忽ち活する時如何。天桂いはく、方さに老僧か欠伸を會せむと。僧茫然たりき。

天桂 一日、草木成佛の義を以て、衆を策勵す。僧あり、三更、樓に上りて請益して

いはく、草木成佛那の時劫そ。仔細に示せ。天桂、僅かに起つて脚聲していはく、甲

猫の歳、乙、あまのしほの日。僧、舊窠を脱して禮拜す。
元祿壬午の春。天桂門人の請に依りて、自らその頂相に題す、いはく、不修戒定。

業識茫茫。眼目稜角。破口爛腸。撥無佛法。吐瀉諸方。咳。此是何人。鬼州生

下天桂子。斷見外道睡眠坊。
天桂 永平開祖の四百五十年遠忌に値り、齋を設けて、感懃に供養す。香語あり、

いはく、滅却天童正法眼。眼横鼻直不入瞞。四百五十年滯貨。誰知點點又瞞瞞。

蜂須賀侯の老職稻田氏 心を禪要に寄せ、性鐵居士と號す。ふかく天桂

に歸依し、之をその邸に迎へて、尤も優禮を加ふ。一日、示語を乞ふ。天桂すなはち
佛の字を書し、自ら歌を詠みて之に與ふ、いはく、ほとけとは誰かむすひけむしらい
とのしつのをたまきくりかへしみよ。

天桂 戲に寒拾二士の圖を書き、自ら贊していはく、世云。寒山拾得。不知族氏
生土。權化之人也。吁。傳者鹵莽。老僧多劫來。與彼舊相識。能審其因由。寒
山拾得共是與乾屎橛同一氏族。開廁國生緣。個儻無依。不存規則。在國清寺撰

食殘餐菜滓。齋又鴉。是權者。是化人。咳。兩箇風浪子。輕脫怒殺人。手裡何
卷。口業未泯。孽。

天桂 客の大におのれを嘲る者あるを聞き、微々として笑ひ、因みに歌を詠み、
いはく、まゝよやれすめはこそあれなにはへによしといふともあしといふとも。

天桂 つねに門人を戒めていはく、備ら、一切事上須らく實頭なるへし。おほよ
そ世間に實なる者は、佛法に實ならざるなし。佛法に實ならざる者は、世間上もま
た實なることなしと。また云ふ、眼にして能く見るへく耳にして能く聞くへし。
天下に藏す所なし。我をして又何をか云はしめむと。

天桂 ふかく永平開祖の正法眼藏を敬信し、しはく、之を拜閱す。ひそかに謂
へらく、この一書は、佛乘の玄樞、祖宗の命脈にして、千齡未有の裁體なりとて、つひに
之を校して註を加へ、享保十四年の春をもて卒業す、今盛に世に行はる所の正法眼
藏辨註すなはち是れなり。

天桂 一日、侍者の沸湯を地に瀉くを見て、叱していはく、地上に蟻子多し、よろし
く冷水を加へて瀉くへし。侍者いふ老和尚つねに鳥を憎み、童行をして屋上の鳥

を驅らしむ。什麼に因つて却て蟻子を愛するや。天桂いはく、老僧たゞ鳥を憎み蟻子を愛すと。侍者、茫乎として、その意を測ること能はさりき。

天桂 船唄を作りて參徒に與ふ。いはく、あれはいつくの船しややら、生死無常の大海に、風にまかせて乗出す、四大の板を假りおつめ、出入の息のかりの釘、心一つの帆柱に、眼耳鼻等の六枚帆帆を十分に引上げて、まともに行くはよけれとも、ちと傾けて開くのか、舟ののりての上手さよ、表楫取楫ゆるすまし、いつれの方とあてもなく、灘を知らざる船頭は、覺束なくも思はるゝ、曠悲の浪の立つ時は、早く碇をおろすへし、放逸懈怠の透間より、貪欲水の垢入らは、中の寶は皆すたる、信心つよきまきはたを、よつくきめこひものならば、つひに湊に入りぬへし。

天桂 かつて大燈國師の「坐禪せは四條五條の橋の上ゆきゝ、の人を深山木に見て」の歌を擧げていはく、山僧は然らず、いはく、坐禪せは四條五條の橋の上ゆきゝ、の人をそのまゝに見て。

享保二十一年の秋 天桂、退藏峰にあり。ある日の朝、洗面の次、玄端を召していはく、老僧の行脚まさに邂きにあり。汝ら、老衲か爲めに葬埋の地を修治せよ。

玄端いふ、老和尚、巖鑿たり、塔を作ること、未だ遅しとなさす。天桂いはく、否なくと。即日、山に上りて、自ら起塔の地を擇ひ、門人を督促して、之を経營せしむ。十一月二十八日、塔所成る。その翌月三日の夜に至りて、天桂忽ち微恙を示す。七日、床に在りて、門人に垂示していはく、如來禪、祖師禪。古人之を論し來ること多し。汝ら、更に試に道へ。看むと。衆おのゝ下語す。天桂いはく、未だ在。老僧、汝らか爲めに道はむ。如來に在る時は、則ち如來禪なり、祖師に在る時は、則ち祖師禪なり、汝に在る時は、則ち汝か禪なり。然かも、與麼なりといへとも、若し老僧か口滑頭に倣ふ時は、則ち錯々、實に究明せよ。八日、暫時、睡に就き、覺めていはく、某か頭上に紅華開き、某か頭上に白華開く。因つて他に如何と問著すれば、便ち曰ふ、一切處是れ空華、いつれの處にか開かさらむと。始らく汝等に問ふ、還て這の花の生處を知るや。一僧云ふ、或ひは黑白、或ひは長短、何ぞ奇とするに足らむ。天桂いはく、唯た八成を道ひ得たり。一僧云ふ、老和尚、讒語いまた止まざること有り。天桂乃ち休す。九日、徳島城主蜂須賀侯かつて天桂に參して、心要を問ひ、號を無等と云ふ。此に至りて、使を馳せて病を問ふ。天桂几に隠りて、應接し、玄端に命して、代つて書を修せ

しむ。いはく、齊家治國も亦た菩薩の行道なり。篤く仁政を施き、上下相信して乖戻あること莫れ。是れ老衲か最後の赤心なりと。この夕、天桂病篤し。大衆悉くその前後を擁して啼哭す。天桂顧視していはく、如來まさに涅槃に入りたまはむとする時、四衆涕泣悶絶す。如來叱して曰ふ、汝等實に四聖諦義を了達せは、何の涕泣することかあらむと。今日、汝等啼哭いまた法愛を除かざるか故に、之を叱せず。その故如何となれば、老僧、一生宗乘を負荷して、専ら人の爲めにすと雖も、而かも人情於高教化また怯弱にして信する者、太た少なし。他日正法を擧揚する底の人師なからむことを想像して、覺えず涕墮つ。蓋し、諸法因縁生、畢竟性空た、この一段、道ひやすくして、明めかたし。恐らくは、汝ら諸人錯つて之を會せむ。もし實にこの義を明むる時は、則ち是れ如來遺法の弟子にして、佛祖の恩を報するものなり。向來この義を擔荷し、展轉して人の爲めにせよ。もしいまた此の場に到らざる者、他時、老僧を慕ひ來ることあらば、則ち報して道へ、臨末涕泣して、この語を爲すと。必らず忘ることなかれ。吁、余太た勞困せり、道はし、嗚々。また遺範數條あり、その要にいはく、退藏峰は、老僧在世隠棲、滅後葬身の地なり。有志の道者、三五

箇結會安居し、専ら元古佛の坐禪儀の兩篇に依りて、只管辨道せむことを要す。老僧戒化の日、他に告報すへからず、且つ年回の時、牌前莊嚴一切之を爲すへからず。老僧を供養せむと欲せば、欽んて正法眼藏辨註を閲せよ、是れ第一の孝順心たるべしと。かくて、十日の曉、安祥にして臥し、泊然として化す。門人ら涙を攪つて、全身を奉して退藏峰の塔基に窺め、土を封して、樹うるに一株の楠をもてす。地を不老峰と云ひ、塔を靈楠と云ふ。

天桂 著はす所、正法眼藏辨註、報恩篇、海水一滴、般若心經止啼錢、大智度論參解、隨耳彈琴、從容錄、辨註、供養參、その他假名法語若干卷あり、今なほ盛に世に行はる。

天桂 の法を得たる者には、靜居、泰州、寂文、印光、西林、大隨、海藏、黃龍、洞明、本了、寶光、于鱗、普明白、肥、興國、恆川、大光、圭堂、永福、龍田、天德、仙嶺、法泉、亮重、西林、孟耕、長源、老山、長松、斷崖、陽松、直指、孝顯、異眼、龍滿、問厚、蔭涼、石窓、長松、即之、丈六、跋山、普門、萬子、一心、喝玄、真如、好山、高松、泰禪、瑞雲、擔山、龍文、兀堂、長祿、龍水、高昌、百步、光真、絶海、靜居、禪峯の三十一人あり、おのゝ東西にありて、互ひに化を揚げ衆を領し、以來一百有餘年、天桂下の宗匠尤も多し。

圓瑞 (曹洞)

諱は即心、圓瑞と號す、甲斐國の人なり。正山の法を得て、文珠院に住し、享保二十一年正月六日化す、世壽七十餘。

圓瑞 神氣溫粹にして面に嗔色なく、口に言語寡し。脇席を汚さず、時に過きて食はず。財色の二欲、天然に有ることなし。初め大乘にありし日、たま／＼郷信あり、送るに金十餘兩をもてす。圓瑞すなはち之を以て沈香百餘兩を贖ふて、大衆百餘員に喜捨す。正山大に賞讃して偈を興ふ。

圓瑞 の友に千秀といふものあり。曾て濃州に遊ひて、惟慧を拜す、惟慧問ふ何の許より來る。いふ、甲州より來る。いはく、甲に圓瑞といふ者あり、頗る是れ一味坐禪の僧なり。吾か會に入りて、日すてに久し。おもふにその精進智發、昔年に倍するものあらむと。圓瑞の宴寂をもて稱せらるゝこと、おほむねこの類なりき。

正山 かつて圓瑞を召し、呵していはく、持齋不臥、是れ汝か道機を障く。精進禪定、是れ汝か慧命を損す。如何そ一切に放過して任運に時に隨ひ、箇の漚々落落々無

爲無事の人と作り去らざるやと。圓瑞拜謝して、涙を掩ふて去り、これより、精進いよいよ加へ、苦行また前に倍す。一旦豁然として不疑の地に至り、遂にその印可を受けぬ。

圓瑞 郷に歸りて、文珠院を營み、正山を請して開山とし、自ら二世に居る。これよりかたく誓ふて人間に出てす、故舊書を通するものあるも答へず、參玄の徒、門を叩けとも開かず。享保丙辰の春、病なくして化す。その徒某、遺誠を帯ひて鷹峰に來り、顛末を語りていはく、先師一生持齋不臥、死に至るまで止まず、僧伽梨を著け、椅に據りて化し、遺體儼然として、定印散せすと。

馬蹄 (曹洞)

馬蹄は、洞上の尊宿なり。いまたその本貫および示寂の年月を詳にせず。

馬蹄 心越に水戸の祇園に參して首座たり。人あり、その年を問へば、總て七十といふ。享保五年の春三月、白隠たま／＼豆州吉名の温泉に浴するの次、馬蹄と會し、戯れていはく、幼にして首座となり、老いて侍者となるは、蓋し大明の禮か。馬蹄

いはく、何の謂そ。白隠いはく、我聞く、心越の會に、和尚は衆に首たり、木室は閣に侍すと。今や木室の年齒をもて、之を考ふれば、和尚は僅かに志學に近し。馬蹄、咄して、いはく、這の膽大の長老、恁麼に人を瞞することを得たり。白隠いはく、却て是れ和尚、我を瞞す。馬蹄、大に笑ふ。

月坡 (曹洞)

諱は道印、月坡と號し、別に自ら老臥佛と稱す。蔭涼寺鐵心に侍して、洞山の宗旨を極め、加賀の天徳院に住す。また太原下の一尊宿なり。

寛文甲辰の春 月坡、比良山の獅山谷に棲遲し、山居七律三十首あり。その一にいはく、山是比良獅子谷。林間恰好縛柴門。南溪泉美煎茶馥。北苑薇肥打菜尊。西嶺中空無動相。東江分地遠譚喧。十年求隱今初得。此處扶桑第一番。

同丁未の夏 月坡、また錫を關山の琵琶苑に移し、また十絶句を打す。その一に云ふ、説佛談心總寐言。磨瓶觀壁是非禪。頭陀自得茆居趣。一路關山明月前。

月坡 かつて參徒に示すに和歌をもてす。いはく、そめねともおのかいろく

おのつから松はみとりに雪は白妙。この歌、大に叢林に傳稱せらる。

密山 (曹洞)

諱は道顯、密山と號し、別に朽木子と稱す。俗性は足立氏、近江國の人なり。甫めて十二歳、越前永建寺海翁に依りて雜染し、初めは、月舟、獨庵の二老に參し、のち大乘寺明州の法をつきて、その席を董す。また河内の天童山に住す。元文元年十月十二日化す、世壽八十又五、法臘五十又九。

密山 寛文十一年、加賀にゆきて、月舟に大乘に謁す。一夕、月舟無字の話を舉げて、反覆提激す。密山これよりますます、精進を加ふ。この夏、まさに辭し去らむとするや、月舟、告げていはく、六和威神。無諸魔擾。法歲周圓。禪規資始。憑此勝緣。曠劫爲主伴。扶起法幢。密山ふかく之を肺腑に銘し、談此に至ることに、涙を揮つて門人を激勵したりきといふ。

延寶二年の夏 密山、再び月舟に參す。一夕、省發する所あり、直に方丈に上りて展拜していはく、劫火洞然、萬象俱に壞し、法身巍々として顯現し、蘇迷慮の大虛に

獨立するかことし。月舟、徴していはく、何ぞ身心器界俱に燒盡せざる。密山いはく、色身法身相去ること多少ぞ。月舟、拳頭を壓起す。密山いはく、一も亦た守らざる時如何。月舟いはく、恁麼なく。密山すなはち禮拜して去る。

密山 病を抱きて、紀州に遊ひ、城北の吉田村に棲遲す。病間、涅槃經を閲し、如來品に至りて、無佛性の話を徹見し、病もまた癒ゆ。元旦の偈にいはく、雲水生涯無固必。流行坎止任因緣。時哉大地韶風起。焉戻天兮魚躍淵。時に黃葉の圓通また岡田村に庵居す、吉田を距る僅かに二里。密山これと語りて、大に悦ひ、たかひに往來して、共に簡事を商量す。

密山 獨庵を河内の經山に訪ひ、針鉢機契し、相遇ふてその晩きを惜みき。密山、偈を呈していはく、禪苑蕭々秋已深。規條搖落見難禁。方便風力屬師手。覺樹開花慰衆心。

永祿十二年の春二月 密山、明州の後をつきて、大乘に住す。上堂にいはく、
「德山拆却佛殿。唯存法堂。大乘未營法堂。先建佛殿。大衆且道。請訛作麼生。」
良久曰。推之輓之。俱司車行。

正徳元年 密山、河内の摩尼峯に隱居す、偈あり、いはく、蝸厓縛就占名區。林壑雲開天畫圖。宴坐空存淨名默。病牀何必接文珠。また、前控明石後金剛。十笏軒中身心忘。不借灯王三萬座。盡教來者得清涼。

密山 山か鷹峯にありて病革るを聞き、往きて之を問ふ。山、病を力めて禪戒の因由を説き、囑していはく、子は我か諸孫に列すといへとも、化縁もとも廣し。我か滅後、毘尼を流布するは、全く子に繋かれり、謹んで失墜せしむることなかれと、その言、太た懇なりきといふ。

密山 微恙を示し、徐に門人を顧みていはく、老耆殘喘久しく留るへからすと、よつてねもころに之に戒め、また偈を書していはく、一箇畜四蛇。不知幾歲華。今日解繫縛。縱橫任放過。

山 かつてしはく、歎していはく、密長老は、真に福慧僧なり。また爲めにその肖像に題していはく、麻蕪遠谷護臍堂。蚌襲九淵潛寶光。綿密密時還照露。枉勞行水不行霜。世稱していはく、子を知るは、親に如かすと。

澤水 (臨濟)

諱は長茂、澤水と號す。久しく龜庵珠光に參して、その印記を受く。實に中峰第十四世の法孫なりと云ふ。江戸の大住庵に住し、元文の末年化す。世壽百六十餘歳なりと云ふ。

澤水 因に居士某といふ者あり、來り謁して曰く、さきの日、客と談す。某云ふ、この身は限りあり、必ず變滅すといへとも、たゞその心は不生不滅にして、遂に變易なし。喩へは、家の火を失したるか如し。家は焼却するも、主人は走り出つと。澤水、聞きて、大に呵していはく、是れ外道の惡見なり。むかし、大惠和尚、一日、某の家を過きて、壁間に白骨を描き、尸在這裡。其人何在。乃知一靈。不居皮袋。と題するを見る。乃ちいはく、こは汝の作れる偈か、是れ外道の見なりと。よつて改めていはく、即此形骸。便是其人。一靈皮袋。皮袋一靈。と爰を以て知るへし、汝もまた誤れる事を。元來生滅なし、たゞ是れ信不及なるか故に、種々の妄念やむ事なし。今日宜しく心を改め、底を盡して修練せよ。必ず老衲の言を誤り聞き、或ひは世智の

賢に奪はれて、愚劫の殃を招くことなかれ。拔隊和尚のいはく、真か虚か、急に眼を著て見よと。老衲もまた此の如し。真に實悟見性して、始めて知るへし。老衲に歸依して、たとひ一日に百千の黄金を供養すとも、老衲か二便を嘗むとも、よく大疑工夫に赴かされは、いまた眞の歸依者と云ふへからすと。某、拜謝して去りぬ。

澤水 つねに參徒に示していはく、世尊曰く、汝等比丘、若し勤めて精進せば、事として難きものなし。譬へは、小水の常に流れて能く石を穿つか如し。若しくは、行者の心しはく、懈廢すること、火を鑽つて未だ熟せずして息めは、火を得むと欲すといへとも、火を得ることかたきかことしと。今汝もし木中より火を取らむと欲し、火の出るを限りとして、退屈なく木をもむ時は、火必ず出つ。もし中途に退屈せは如何ぞ火を得ることを得む。工夫疑團もまた、此の如し。汝ら、怠ることなかれと。

澤水 かつて參徒に示したる和歌あり、いはく、なにこともいふへきことはなかりけり、問はて答ふる松かせの音。

無得 (曹洞)

諱は良悟、無得と號す。俗姓は山口氏、會津の人なり。甫めて十四歳、天寧の忠恕に投して、薙染し、出て、黃檗の木庵、獨湛、潮音の諸老に參し、のち月舟、鐵心に侍し、長州の大寧寺に住し、大に道俗を接す。寛保二年五月二十三日化す、世壽九十又二、法臘七十又九。

無得 わかき時、黃檗に上りて、木庵に見え、隱元を松隱堂に禮し、乃ち問ふていはく、如何なるか、是れ祖師西來意。隱元いはく、恰かも老僧の假臥に値ふと。無得すなはち禮拜して去りき。

延寶元年 潮音、法幢を大慈、館林の二處に樹つ。無得、良高と共にゆきて之に従ひ、餐せず、寐ねす、死坐七日、一夕、定中、豁然として大悟し、覺えず、因^カ地一聲し、急に方丈に趨る。潮音、問ふていはく、我かこの丈室、十方路なし。無得、甚麼の處よりか來る。無得いはく、和尚の鼻孔裡より來る。潮音いはく、老僧鼻孔なきを奈何せむ。無得いはく、正に好し、某甲往來の處。潮音いはく、近前來、痛く一頓を興へむ。無得いは

く、羅籠不住と、走り出つ。潮音、その後、に隨ふていはく、爾に三十棒を放す。無得いはく、劔去る久し。潮音いはく、合に狗口を取るへしと。時に年二十三なりき。一夕、また月下に、宴坐す、外に殿堂、牀座あることを知らず、内に身心氣息あることを知らず。定より起て、精神朗廓なり。乃ち偈を打していはく、萬里乾坤一色天。夜明籠捲六窓前。等閑坐破蒲團月。不覺渾身光燦然。潮音、證明していはく、爾、今日工夫熟せりと。

無得 月舟を宇治田原の隱棲に訪ひ、偈を呈していはく、峰頭有雲、淵有泉。普門每見接來賓。一輪推上補巖月。照破閻浮萬劫天。月舟、和していはく、眉間三尺古龍泉。法戰場中誰敵賓。轉處分明轉將去。凜然志氣獨衝天。

貞享二年 無得、加州實性寺、明州の招に應じて、その席を繼ぐ。示衆にいはく、諸佛出世爲一大事、因緣。祖師西來唯要見性。至于曹洞、臨濟、沩仰、雲門、法眼之宗。亦唯傳此事。無有別事。汝等諸人。齊皆具足廣大靈明德用。互古互今。煒煒燁燁。如或自退屈不爲。諸佛出世。亦不可奈之何。

無得 晩に長州大寧の法泉庵に住し、ふかく門戸を掩ふ。寛保二年五月二十二

日、無得の誕辰に當りて、門人ために祝齋を設く。その翌、無得、忽ち諸子に告げていはく、老僧、今年九十二。且つ昨日誕辰、是れ壽も足り、祝もまた足れり。今まさに往くへし。汝ら、我が滅後において、専ら法に依りて住し、流俗に従ふことなかれと。また自ら舉火の語を示していはく、自以火光三昧火。燒彰沒後大人形。請看烟散雲收處。獨露滿山未了看。辭世の偈に云ふ、毘嵐吹起。崩倒牆壁。閃電激空。大千拂追。と泊然として化す。

無得 大法を荷擔して、綿密森嚴、學徒を策勵して、少しくも怠らす。日に諸呪數萬遍を課し、且暮、左右と語りて、いまた曾て一言も榮利に及ぶことなかりき。得法の弟子には海淋、獨橋、無聞、無隱ら六十二人あり。著はす所の語錄二卷および洞上佛祖源流贊を傳ふ。

全國 (曹洞)

諱は高外、全國と號す、別に自ら臥龍道人と稱す。俗姓は眞野氏、武藏國高麗郡中澤村の人なり。年甫めて十二、宗穩の法瑞に依りて、難染し、大乘德翁の法を得て、

三河の賢王、近江の清涼に住し、寛保二年九月十八日化す、世壽七十又三、法臘六十又二。

全國 年わかき時、大山に詣て、誓ふていはく、盡未來際、精進渝らす、苟くも一念怠惰の心あらば、伏して願はくは、明王、索もて之を縛し、劍もて之を斬れと。その刻苦工夫、想ふべきなり。

全國 大乘德翁の法席盛なるを聞き、即日、包を腰にして之に參す。然るに、衆滿ちて容れざるを以て、去つて、祇陀寺に寓す。一日、忽ち回光返照、就己研窮の語を念ふて省發す。即ち大乘に趨りて、之を呈す。德翁、呵していはく、不可なりと。この冬、玉龍寺に居て、結制す。日夜、爰々として、頭燃を救ふかとし。ある夕、平地にして顛し、茫として知覺なし。起來て、連聲に大に叫て已ます。之を久ふして、忽ち鐘聲を聞き、疑團を打破することを得たり。德翁すなはち之を印可す。時に全國の年二十五なりきと云ふ。

全國 家風森嚴にして、言句を事とせず、拈掣を逞ふせず、たゞ純一辨道を以て、普ねく四來をして七尺單前に魂飛膽喪せしめ、鬼全國の名大に叢林に噪きぬ。名藍

に住すといへとも、衣鉢を除くの外、長物を貯へさりきと云ふ。

祖山 (曹洞)

諱は輔教、祖山と號す。俗姓は關口氏、越後國刈羽郡山室村の人なり。業を郷の飯涌山香積寺の寰海に受け、法を西來德翁につきぬ。寛保三年閏四月十二日化す、世壽八十餘。

祖山 享保年中、香積に住し、新に僧堂を建て、知事用心指南記を著はす。専ら楢樹林指南記を模倣す。東福の慈船、賀するに偈をもてす。いはく、欲支我禮樂陵遲。新立僧堂行定規。椽下驅魔空有作。草前選佛學無爲。如同太白呵眠日。思慕少林壁觀時。鳥意衣冠顛倒世。此中再見漢官儀。

祖山 門人の請に依りて、その自像に題していはく、水月鏡中見不難。電光石火太無端。而前背後似何去。別起眉毛子細見。嘆、一把柳絲收不得。和風搭在曲欄干。

覺芝 (黄葉)

諱は廣本覺芝と號す。久しく桂堂に侍して、その法をつぎぬ。延享三年五月十日日化す、世壽六十一。

覺芝 機發閃電のことし。かつて樂山の幹事たり。たましく病あるを以て之を辭す。客あり、問ふていはく、和尚是れ金剛の性體、何の病かある。覺芝いはく、金剛に金剛の病ありと、遂に退きて、江州馬淵の福壽寺に潛み、賣茶翁、太田見良、猩々庵原松、龜田窮樂、安田是誰らと共に遊ひき。

覺芝 の病あるや、太田見良の家にあり。見良の妻つねにその起臥を助く。覺芝、病間に戯れていはく、女ほとめてたきものは又もなし、釋迦や達磨をひよいと生む。

猩々庵原松 布袋の圖に題する句、小袋に大千入れて花こゝろ。をもて、覺芝に呈す。覺芝、微笑していはく、未たし。老衲ならば、底ぬけの袋に實あり、芥子の花。と云はむと。覺芝また原松か生死の間に答へて示していはく、生死事大の

かれはないそもろ人よきのふの夢かけふもさめねは。
覺芝 天資機巧にして、一たひその目に觸るゝものは、之を善くせずといふことなし。尤も醫術に精しく、病ある者を見れば、自ら藥を調へて之に與ふ。かつて月海に戯れていはく、汝茶を賣らば、我は藥を傳らむと。また裁縫を善くし、門人らの法衣は、みな自ら之を作りたりきといふ。

默子 (曹洞)

諱は素淵、默子と號す、俗性は馬場氏、肥前國佐賀の人なり。德翁の法を得て、備中の西來に住す。延享三年六月二十日化す、世壽七十又四。

默子 年わかき時より、諸方に遊ひ、萬松の惟慧、西來の德翁、黄檗の高泉、弘福の鐵牛らに參し、遂に德翁の法をつきて、西來および遠州の少林に住し、また備中の梅長、伊勢の東雲を開きて、四來に接し、頑極、鐵文ら、みなその門に出て、法席の盛なること、一時に冠たりきといふ。

默子 兜率三關の頰を打して衆に示す。一にいはく、撥草參玄圖見性。展爲掌

兮握爲拳。今時學者、墮知解。劔去幾人、謾刻船。二にいはく、識得自性、脫生死。甚脫眼光、落地時。不移寸步、越塵刹。五十三參、八刻遲。三にいはく、脫得生死、知去處。火風水大、各分離。心肝鐵鑄、淚先落。唯有虛空、暗展眉。

印光 (曹洞)

諱は道明、印光と號す。武藏國の人なり。幼にして、薙染し、隱元に參して、大悟し、また廓門、妙喜などに參して、悉く印可を蒙り、武藏の瑞光寺に住す。いまた示寂の年月を詳にせず。

元文中 印光、孤錫を曳きて、相州に遊ひ、たま〜一友某と、海濱に邂逅し、草に坐して語る。某云ふ、今や澆薄性と成り、人根劣にして、簡に就き、一箇も一隻手を出して、佛法を扶植する、大丈夫なし。賢者よく之を勉めよと。印光これを聞きて、慨然として、自ら勵み、護法の心いよ、厚し。頻りに祖道の陵夷を感し、一書を著して、野雲隨筆といふ。この書、袷衣、瓦鉢、筆所、筆牘、筆叢、筆款の五科に分ち、纂して二卷とす。その筆叢にいはく、虛空世界一夢場也。戒定慧學一夢法也。諸佛衆生一

夢中人也。古之於言。雖肖迂誕。乃此頑心之鍼砭也。數車無車。賢否易塞ひたひた。堯亦腐骨。跖亦腐骨。雖暫悟迷覺夢。亦總屬夢。而收則動止云爲僉未始不夢事也。夢中之人據夢場受夢法。玄學所須用心見性而已。宗師所須繫念爲人而已。統之而言。護法而已。護法則佛法也。

印光 かつて投子青祖の録を獲て、録中の事蹟八百餘條を參考し、分つて二本と成し、名けて抱壘編といふ。また飲光より大陽に至るまで、列祖の機縁語要を疏略し、集めて一本となし、名けて洞上宗旨といひき。

古月 (臨濟)

諱は禪材、古月と號す。俗姓は金丸氏、日向國那珂郡佐賀利村の人なり。甫めて十歳、松巖寺一道に依りて薙染し、阿波慈光の梁巖、豊後多福の賢巖に參し、日向の大光に住して、大に化を揚く。寶曆元年四月二十五日化す。世壽八十又五、法臘七十又六。

古月 一日、楞嚴經を讀みて、汝修三昧。本出塵勞。婬心不除。塵不可出。縱有

多智。禪定現前。如不斷姪。必落魔道。といふに至りて、大に感激し、乃ち佛前に跪き、祈誓していはく、たゝ願はくは、我形壽を盡し、初志を改めず、堅く佛戒を持し、敢て違犯せず。願はくは、慈悲哀愍攝受せよと。

古月 年二十二、たゞく慈光梁巖の爐鑪最も熾なるを聞き、徑ちにゆきて參す。一日、梁巖の命に依りて、禪灯の燭を打す、いはく、光明照破盡乾坤。這裡何人著談論。四七二三直吹滅。今來古往暗昏昏。梁巖一見して、善と稱す。古月、自ら是とせず、ひそかに嘆していはく、高峰妙禪師自ら死限を立て、己事を究明す。我思ふに、古人、大法の爲めの故に、頭目髓腦を捨て、惜まらず。我何人と、敢て斯の身を愛まひやとて、制了て、豊後の多福に往き、賢巖に相見し、日夕參究して、寢食ともに忘れ、脇を席に著けさること數年なりきといふ。

古月 四十一歳、薩侯島津惟久の請に應じて、大光寺に視察す、緇素參禮して市をなす。尋て新に一庵を結ひて知又軒と號し、その終焉の處とす。のちまた島津侯の命をもて之を修す。偶あり、いはく、時人知又否。松徑遠禪關。茅屋三間窄。神光萬境閑。朝瞰晴浴浪。烟竊暮纏山。何管非和是。偶諧自解顏。

古月 　また自ら衣鉢の餘資を用ひ、小室を天壽山に構へ、扁して骨清堂といひ、此に退隱す。時に年六十七なりき。退隱の偈あり、いはく、三十年來立化城。點過寶所接群情。累思寂室好言語。死在巖根骨亦清。

久留米侯 　有馬頼備ふかく古月の道風を欽し、新に一寺を創め、朝日寺主を遣して古月を請す。古月いはく、わか命、且暮にあり、何を待みて命を奉せむや。寺主いはく、老師もし諾せされは、余敢て反らすと、切に請ふて已ます。古月すなはち強ひて起つて之に應ず、士女拜瞻して、途を塞く。梅林に入りて説法三句餘、化に嚮ふ者、勝けて計ふへからず。十三部に到り、地を相して寺基を定め、山を慈雲といひ、寺を福聚と號す。偈あり、いはく、祇林繁衍慈雲濕。福聚無量鎮國家。挿草先看萬年兆。松間競發白桃花。

古月 　晩に妙心の勸請を受けしも、辭して應せず、いはく、徳薄く躬もまた衰へたり、豈に千金を費して臭骨を莊嚴するを願はむや。我か寺黒衣をもて主とす、これ余の希ふ所なりと、竟に従はず。

古月 　傳大士開光の偈にいはく、忘却率佗宮裡樂。雙林樹下坐高臺。匪唯古佛

變身影。無數天龍擁護來。韋駄天點眼にいはく、金剛寶杵攘災障。厨庫康寧轉二輪。匪管三洲要護法。國家永鎮幾千春。また參徒に示す和歌あり。いはく、一時もわたにはなさしさりとてもあひかたきみのくれやすき日を。

寶曆辛未の夏四月 　古月微恙を示し、二十四日、辭世の偈を書す、いはく、好不啣喙。八十五年。棒身一擲。棒殺青天。二十五日、門人を集めて誠を遺す、音吐、常に異ならず。つひに泊然として化しき。

嶺南 (曹洞)

諱は秀恕、嶺南と號す。江戸の人なり。甫めて十五歳、青松寺如實に投して、殖染し、遂にその法を得たり。寶曆二年十一月二十三日化す、世壽いまた詳ならず。

嶺南 　資性捷敏にして、儕輩と同じからず。如實、大に之を愛して策勵す。一日、室中、雲門須彌山の話を擧して試験す。嶺南、契はす。此に於いて、嶺南、大に憤激し、直ちに去つて、惟慧、卍山に參し、次て西來の徳翁に見えて、鉗鎚を受け、また東に歸りて、黙室に參し、工夫やうやく熟して、空然として、徹證し、始めて如實か策勵の虚なら

さるを知り、直ちに青松に歸り、香を懷にして入室し、遂に如實の印記を受くと云ふ。
享保丁未の秋 嶺南貫山をして青松の席をつかしめ、事を謝して、室を西溪に掩ひ、専ら文字禪を事とし、遂に日本洞上聯灯録を著はす。今世に行はるゝもの即ち是なり。

一丈 (曹洞)

諱は玄長、一丈と號す。俗姓は鍋島氏、佐賀侯俊信の子なり。甫めて十五歳、高傳寺寂照に投して出家し、默子、祖曉の二老に參し、のち木橋の法をつき、佐賀の龍泰、長崎の皓臺に住す。寶曆三年七月七日化す、世壽六十又一、法臘四十又七。

一丈 幼より慧敏にして、好みて詩書を誦す。十五歳の時、たゞく高傳寺に詣す。時に堂頭寂照、結夏上堂、龍象一百餘員、法儀嚴然たり。一丈、寂照を見て、忽ち景仰の心を生し、遂に侯に請ふて披剃し、躬ら苦役に服す。觀る者、感せざるはなかりき。

一丈 東に遊ひ祖曉に清源寺に參す。一日、祖曉呵していはく、汝か師寂照は、禪

門の巨擘なり。汝その門より出て、遲鈍なること此のときか。一丈憤然として去らんとす。祖曉之を喚ふ。一丈首を回す。祖曉聲を勵ましていはく、遲鈍底もまた首を回し來ると。此に於いて、一丈通身汗流れ、豁然として桶底を脱しぬ。
一丈 つねに流俗に阿らず、拜せむと欲する者あれば、唯た歸戒を授くるのみ。故を以て、丸山、寄合兩街の士女、皓臺を辭して、他寺の檀越に屬する者八十餘戸あり。一丈笑つていはく、また枝葉なく、純ら眞實のみあり。一闍提の徒退くもまた佳しと。

一丈 終に臨んで、偈を書していはく、東村西村。一牛一馬。昨日乃騎。今日乃下。と筆を投して逝きぬ。

無聞 (曹洞)

諱は寂端、無門と號す。俗姓は石塚氏、近江國高島郡岡村の人なり。十六歳、梅長院久巖に依りて剃度し、慧極、惟慧、槐國らに參し、のち、無得の法を得て、大寧寺に住し、寶曆七年正月六日化す、世壽七十又五、法臘五十又九。

無聞 年わかき時。出て、講肆に遊ぶこと數年。一日、嘆していはく、這事もし名相に在らば、安そその疏鈔を火く周金剛のとき者あらむやと。たま〜朝明山の拈華か蓬累して來るに會し、乃ち請ふて同參となりき。拈華授くるに永平の梅花卷をもてす。無聞、之を閱して、ます〜自ら誓ひき。

無聞 慧極に阿波の法雲に謁す。慧極、逆て之を徵す。無聞、報を加ふること能はず、乾屎橛の話を授かりて退き、走つて禪堂の前を過く。一僧あり、忽ち奔出して、劈面に拶著す。無聞また應すること能はず、僧そか提る所の茶瓶をもて、横に無聞の額頬を築くこと三下す。瓶の蓋地に墜ちて聲あり。大に衆の笑ふ所となりき。無聞すなはち大に恥ちてやます、これより、いよ、激勵し、去つて黃葉の悅山、西來の德翁、小松の覺性、德巖の惟慧に參す、いまた得る所なし、乃ち去つて大林の槐國に參し、一夕たま〜犬の月明に吠ゆるを聞きて、忽然として、疑團を撲破し、偈を述へて、夜半金鳥掌上走の句あり。槐國これを頷す。されと、自ら槐國に縁なきを知り、また去つて、無得に東禪庵に參す。無得問ふ、死了燒了、何の處に安身立命せむ。無聞いはく、某をして、何の處にか安身立命せしめよ。無得、微々として笑ふ、正徳丙申、無

聞また東禪にゆき、入室の儀を整ふ。無得、拶していはく、不慕不重、如何。無聞いはく、冬瓜は直、苦瓜は曲。とこれより後、無得の江湖に遊化するときは、無聞、必らず随ふて侍者たりきといふ。

寶曆丁丑の正月 無聞、祝祚人事、一も缺くる所なし。六日、鷄鳴、遽かに起て、剃浴して衣を更へ、靜坐して偈を書し、渣焉として寂す。偈に、破鏡重照。落花上枝。の句あり。

無聞 始め無門と號し、のち事に因りて、聞の字に易ふ。室中、毎に我が這裡に門なし、何の處より入り來るの語をもて、學者を詰驗せり。

徳水 (曹洞)

諱は慧性、徳水と號す。俗姓は松藤氏、筑前國怡土郡波呂村の人なり。龍國の鴻漸を禮して、薙染し、卍山に參して大悟す。寶曆七年化す、世壽七十餘。

寶永四年 徳水、卍山に鷹峰に參し、機語相契ふ。卍山すなはち入室を許し、またその頂相に題していはく、如臨寶鏡。形影相觀。爾不是渠。渠正是爾。是爾是

渠。寂然昭著。非爾非渠。寧容思慮。天真而妙。本無迷悟。相見了也。如忍如魯。

德水 襟度洒落にして、外物に拘らす、つねに禪誦を嗜み、もとも墳典に耽りき。享保の末、松月庵に通れ、優遊老を養ひきといふ。

雪庭 (曹洞)

諱は宗白、雪庭と號す。越後國古志郡中山村の人なり。十六歳の時、海見寺中岸に投して剃度す。德翁、慧極らの諸老に參し、のち國に歸りて、中岸の法を嗣きて種月寺に住す。寶曆八年九月十八日化す、世壽八十又二、法臘六十又六。

雪庭 朝明山の拈華と同じく、慧極に法雲に參し、まさ共に去らむとするに臨み、問ふていはく、時々、永祖の正法眼藏を問せは如何。慧極、叱していはく、汝もし箇事を明めむと欲せば、須らく猫兒の鼠を捕るかことくすへし。何の暇ありてか看讀することをせむ。二人これを聞きて服膺す。

雪庭 また拈華と共に、肥前の高傳寺に挂搭す。一日、黄昏、乍ち人の篝燈を點す

るを見て、忽然として失笑す。時に、嘯山、傍にありて之を觀て、その面色の常ならざるを異み、喚んで後門に出て、之を詰る。雪庭、機鋒提出して、迥かに平昔に殊なり、堂頭了爲すなはち召して之を勘し、ふかく激賞を加へきといふ。

雪庭 參方の始より、晝夜、脇席を沾さす、六十年の久しき、恰かも一日のことし。一襪を穿つこと三十年にして、之を更へず、古の獅子襪のことし。その福德を惜むこと、おほむねこの類なりき。

曇屋 (曹洞)

諱は一枝、曇屋と號す、筑後國柳川藩士某の子なり。定林寺に入りて、蓬染し、皓臺寺古岳の法をつき、寶曆九年八月十三日化す。

寶曆癸酉 曇屋、長崎の皓臺寺に住し、古岳の席をつきて雲衲を接す。一住七年、法道大に興る。一日、曇屋衆に示していはく、任他非矣、任他僧。六十餘年一不能。老去彌灰度生念。莫遮人喚聲門僧。

三洲 (曹洞)

諱は白龍、三洲と號す、俗姓は村山氏、武藏國大里郡忍庄の人なり。甫めて八歳、卍山を王山に拜して脱素し、遊方して、盤珪、高泉、獨漉、央山、潮音、惟慧、德翁らの諸老に參し、遂に卍山の法を得て大乘を董し、寶曆十年四月八日化す、世壽九十又二、法臘八十又三。

三洲 の薙染するや、卍山、偈を授けていはく、頻伽初出毘。弱冠漸成文。擇水翔而集。一鳴必駭群。十五歳の時、禪定に上りて月舟に謁す。月舟もまた偈を示す、いはく、道苗種子欲迎春。春至看光華四新。此語分明須記取。後來恐在爾之身。三洲 かつて虚堂普説を讀みて、先徳の做工夫大に容易ならざることを知り、憤然として省み、遂に所業をすて、心を禪要に留めきと云ふ。

三洲 央山に瑞龍に參す。央山いはく、參は須らく實參なるへく、悟は須らく實悟なるへし。三洲いはく、自己を見ること冤家のことし。央山、徴して云ふ、自己、甚に因て冤家のことくなる。三洲他に一拶せられて、茫として對ふることなし。こ

れより、冤家の兩字、目前に頓在して、剖破すること能はず。解制の日を待ちて、黒瀧山の潮音に謁す。潮音問ふ、甚麼の處より來る。三洲いはく、北陸より來る。潮音、棒に打ていはく、この鈍漢、來處もまた知らず。三洲、棒を捉住していはく、自己、甚に因つて冤家のことくなる。潮音、聲を勵まして一喝す。三洲、潮音の口を掩ふていはく、冤家々々と。これより後、意氣昂藏、工夫いよく進みきといふ。

三洲 相州箱根の塔澤山に登り、人跡の絶えたる處を擇ひ、閉關して居す。敢て佛を禮せず、また經を誦せず、只管打坐して、死工夫を下す。この際、魔境多端しはしは、撓擾に逢へとも、之を管せず、一坐に坐斷す。居ること一年、七月十五日、齋罷みて、外に向ひ打坐し、頻に光陰の移りやすきを慨き、猛に精彩を著く。忽ち清風一陣、雲破れ月出つ。三洲、目を舉して光に觸れ、忽然として省あり、頌を説きていはく、疑團一片坐山堂。咬嚼虚空齒已亡。忽點面前東嶺月。自家始覺是金剛。鷹峯に上りて、密に所由を申ふ。卍山、頗る鉗鎚を加へて、奉順の功を盡さしむ。時に三洲の年二十四なりき。のち許可を受く。卍山の付偈にいはく、此中種草類而別。珍重靈根長一莖。

享保庚戌 大乘寺大機三洲を請して補處す。九月、開堂。三洲、祝聖了りて乃ちいはく、大道虚立。眞宗無著。言語道斷。心行所滅。所以。坐斷十方。頓開千眼。左旋右轉。風行草偈。直得君臣道合。正偏位融。四海海平。百千潮落。正恁麼時。開堂祝聖一句。如何舉唱。拂一拂。金輪統攝四天下。萬象回收一印中。上堂。出圓通入圓通。闇中穿針。卽功勳離功勳。明頭藏線。逆拳順打。消息分明。規行矩步。文采縱橫。有意氣時添意氣。不風流處也風流。必竟如何。鳥飛似鳥。魚行如魚。

寶曆庚辰四月 三洲自ら遺誠を書し、更に偈を示していはく、九十二年。龜毛結華。正當今日。兔角生芽。唌。虚空拍手大地歌。八日午時、侍僧、香を裝ふ。三洲合掌していはく、佛誕吾滅。彼此珍重。乃ち微笑して化す。

三洲 操履太だ嚴正にして、寒けれども、帽を被らず、熱すれども、扇を弄せず。つねに長坐を好んで、夜もて日に繼ぎ、事に臨み剛毅にして、喜憂もその心を動せざりきといふ。

拈華 (曹洞)

諱は實參、拈華と號す。俗姓は野坂氏、越前國今莊の人なり。甫めて十二歳、業を正傳の大休に受け、また黃檗の慧極に阿波の法雲に參し、遂に丹嶺の法を嗣ぎ、伊勢の鈴鹿龍光院に住す。寶曆十年十二月一日化す、世壽八十又四、法臘七十又三。拈華 丹嶺に丹波の法華に侍して拈華の話を看し、之を久うして、一夕、闇中に華嚴の數句を憶誦し、豁然として、疑團を撲破して、丹嶺の印可を受く。此において、拈華と號すといふ。

拈華 龍光に住し、三語を垂れて學者を勘す。いはく、山を朝明と號す、甚に因て金鳥、夜半に飛ふ。院を龍光と稱す、甚に因て、毒蛇、古路に横ふ。室を無礙と名く、甚に因て、牆壁に撞著すと。人多くは契はす。

拈華 滅に臨み、偈を書していはく、前來後去。去來無跡。唌。獨尊無二。泊然として寂す。その法を得たる者、眞學ら十四人ありきといふ。

曹海 (曹洞)

諱は華嚴、曹海と號す。俗姓は松尾氏、豊後國國東郡見地村の人なり。甫めて十一歳、禪林寺悦秀に投して、薙染し、遊方して、徳翁、正山、丹嶺、惟慧、良悟、慧極の諸老に參し、遂に寶圓寺大用の法をつき、江州の長福、雲州の禪覺を開き、寶曆十一年九月四日化す、世壽七十又七、法臘六十又六。

曹海 永祿癸未の歲、江戸に遊ひて、錫を吉祥寺に掛け、徳翁に謁して咨參す。時に曹海、貧もとも甚しく、たゞ一單衣を著けて、冬夏を過しき。夏のある日、之を水に洗ひて、樹に掛け、寺後の塚間に入り、赤裸のまゝにて打坐す、たまゞ溝口侯、その先侯の墓に詣て、之を見て、怪みてその故を問ふ。曹海、答ふるに實をもてす。侯大に感し、直に衣を作りて、曹海に贈りき。またしはゞ財物を寄せたりきと云ふ。後年、曹海か吉祥に來りて衆を接するに及ひて、侯弟子の禮を取りて、禪要を問ふ。曹海つひに衣および法號を付して、淨名院諱玄性空居士といひぬ。

曹海 大用の永建に在りて、その爐鑪大に盛なるを聞き、直ちにゆきて之に謁す。

居ること一年、一夜、坐より起つて、まさに牀を下らむとする時、忽然として省あり、越て方丈に至り、所解を大用に呈す。大用いはく、汝すてに堂に升れり、未だ室に入らざることあり。曹海いはく、甚麼に因て、恁麼に道ふ。大用いはく、應無所住而生其心、作麼生か是れ而生其心。曹海いはく、心を覓ひるに不可得なり。大用いはく、果然入不得。曹海いはく、曹海肯て疑はず。大用、聲を勵まして云ふ、不是々々、眞にこの道に達せむと欲りせば、須らく是れ大死一番して始めて得へしと。曹海、この語を聞き、恰かも千尺の井底に墜されたるか如く、進退維れ谷まじ、茫乎として堂に歸り、寢食ともに廢す。兩句を経て後たまゞ厠に上らむとし、首を翹けて、數株の老松の雲を凌て立つを望み見て、忽ち身心器界洞然として、影響のこときを覺え、諸法従本來常寂滅相、始めて如來の我を欺かざるを知りぬ。久ち三偈を出して、大用に呈す。その第三に云ふ、萬丈懸崖撒手時。瓊樓玉殿現毛端。一回汗出呵呵笑。不似人間容易看。一日、大用上堂。曹海、徐に出て、問ふ、一物に依倚せざる時如何。大用いはく、祇這是。曹海いはく、與麼なれば、則ち電光も及はず、石火も通し難し。大用いはく、能く善く護持せよ。大用の攝の婆羅庵に歸るや、曹海ゆきて奉侍す。大

用いはく、我重擔あり、汝代つて力を竭すへきか。曹海いふ、諾、たゝ恐らくは利性を缺く。況やまた福縁薄し。たゝ門下の一庵主たるを得は足れり。大用すなはち目を瞑していはく、咄、箇の自了漢、佛祖の恩を思はざるか。享保庚子の夏、一夕、大用曹海を召して入室せしめ、青原垂足の話を舉し了りて、一足を垂す。曹海、三拜し、位に依りて立つ。大用、印していはく、むかし、老僧か月淵に契ふ因縁もまた如是なり。曹海、禮辭し去て、草を丹波の氷上郡に結ひて、稽晦しぬ。

享保戊申の春 曹海、請に永建に應す。開堂にいはく、諸佛大機。列祖大用。

雲從龍。風從虎。朝打三千。甜瓜徹蒂甜。暮打八百。苦瓜連根苦。俱胝墜指。

祕魔擎叉。禾山打鼓。雪峰輓毳。不强施爲。寧容思慮。氷河焰起。鐵樹花開。

所以道。如地擎山不知山之孤峻。似石含玉不知玉之無瑕。儘能恁麼履踐。堪報

不報之恩用助無爲之化。正與麼時。且道。功歸甚處。拂一拂。但見皂風成一片。

不知何處是封疆。

寶曆壬申の夏

江戸吉祥寺良儀、結制、一千餘衆を安し、曹海を延きて教導せしめ、殊に戒珠を授く。曹海、完戒上堂にいはく、薰風拂拂。梅雨淋漓。混融六合。打

開遮那如如藏。浩浩四海。展演菩薩心地戒。青山綠水。總是文珠羯磨。鷓鴣鳴。無非彌勒教授。塵々爾。刹々爾。信手拈來。總是家珍。縱步便行。無言不利。諸佛子還委悉麼。拂一拂。無相金剛心地戒。非生非滅不傳傳。六般神用色空外。一片靈光輝大千。是より先き、曹海の吉祥に入るや、市中の士女ら、曹海を拜せむとし、その日を待ちたりしに、一老僧あり、美衣を著け、二十餘人の僧を従へいと嚴かに市中を過く。士女ら、争ふて之を拜し、財物を捧ぐることに雨のことし。何ぞ知らむ、こは、橋下町の願人坊にして、その後に過ぎたる簑々しき僧こそ、即ち曹海にてありしなり。これより曹海の名いよ、噪きぬ。

曹海 終に臨みて諸徒を誡め、偈を唱へていはく、有句無句。樹倒藤枯。劈破太

虛。呈面目。會麼。靜處娑婆訶。奄然として化を戒む。

曹海 の法をつきたる者四十七人あり、金剛、絶宗ら尤も著はる。今の永平寺悟由のことも、實に曹海の系に出つといふ。

寂仙 (曹洞)

諱は宜靜寂仙と號す。俗姓は平林氏、信濃國大岡村の人なり。十四歳にして、業を碩水の山嶺に受け、惟慧、德翁の二老に參し、遂に鷹峰別峰の法を得て、碩水、清水の二刹を董し、寶曆十二年三月十四日化す、世壽七十又七、法臘六十又四。

寂仙 年十八より出て、惟慧、德翁らに參し、寢食ともに廢し、遂に覺えず、眼睛脫出するにいたりき。之を久しうして、證する所あり、機鋒觸擊し、能く之に當る者なかりきといふ。

別峰 か鷲月山清水寺を創めて之に居るや、寂仙をたゆきて之に見え、針芥相投す。別峰そのつねに趺坐して脊梁を堅起するを觀て、之を賞して、眞の鐵牛なりといひきとそ。

千丈 かつて寂仙の塔に銘していはく、舞勺出家。弱冠求道。艱苦備嘗。睥睨諸老。云旋云歸。冤讐難避。鐵牛轉機。雙忘功位。青山白雲。維父維子。蜂桶證羊。箕裘濟美。修廢補闕。雷雨呵風。正偏回互。靡弗是宗。境由人秀。水得

龍靈。卜期示滅。出入戶庭。於戲盛哉。道德標的。凡讀斯文。庶有感激。

月海 (黃蘗)

諱は元昭、月海と號す。のち高を姓とし、遊外と稱し、賣茶翁と號す。俗姓は柴山氏、肥前國蓮池の人なり。年甫めて十一、龍津の化霖に依りて、薙染し、遊方して、黃蘗の獨湛、萬壽の月耕に參す。京に出て、茶を賣りて生とし、寶曆十三年七月十六日、京都方廣寺南の幻々庵において化す。世壽八十又九、法臘七十又八。

月海 年わかき時より、穎脫にして、稠人と伍することを欲りせず。かつて化霖に従ふて、黃蘗に詣す。一日、獨湛、月海を召して、方丈に至らしめ、與ふるに偶をもてす、蓋し、その穎異なるを識れはなり。

月海 二十二歳の時たまく、痢を患ひて困憊し、自ら處すること能はず。此において、奮然として、參詢の志を起し、病いまた癒えざるに、腰包頂笠、萬里にして、東奥に到り、月耕に萬壽に見え、錫を留むること數年、日夕參究して、寢食を忘るゝにいたりき。すてにして、去つて遍ねく、濟洞の耆宿を叩き、また湛堂律師に依りて、毘尼の

學を習ふ。或ひは單孤居止、東西を恆にせず、身に蓄ふる所なく、一に斯道をもておのか任とす。かつて筑の雷山に上りて、その頂上に棲止し、麩屑を食ひ水を飲みて一夏を過こす。その精苦おほむねこの類なりき。

月海

多年刻苦して、ふかく造詣する所あり。而かも自ら足れりとせず。つね

に言ふていはく、むかし、世奇首座、龍門の分座を辭せし時に云ふ、これなほ金針の眼を刺すか如し。毫髪もし差へば、眼睛破れむ。生々、學地に居りて自ら煉らむには如かすと。予毎に此をもて自ら警め、以爲へらく、苟くも能く一拳頭の普ねく物機に應ずる有らば、出て、人の爲めにして可なり。或ひはいまた然らずして、兩婆の學解を修飾し、抗顔に宗匠と稱するは、予かふかく恥つる所なりとて、龍津に歸り、化霖に侍して寺事を監する事十四年。化霖化するに及びて、法弟大潮を擧げて之に主たらしめ、つひに去つて京にゆき、始めてその樂託の性を肆ふる事を得たりき。

月海

また自ら謂へらく、釋氏の世に處するや、命の正邪は、心なり迹にあらず。

僧伽の徳を張誇して、人の信施を勞するは、予自ら善くする者の志にあらずとて、一小亭を構へて通仙と名つけ、始めて茶を賣りて生となしき。これより四時をりを

りの花の朝、月の夕、眺をかしき處を選び、爐を開きて茶を煎す。自ら茶席に題していはく、茶饒は黄金百鎰より半文錢まではくれ次第。たゝのみも勝手、たゝよりはまけまをさす。達磨さへおわしてわたる難波江の流をくめる老のわか身を。また對客言志一篇をつくりて、その本志のある所を示す。いはく、客有り詰問して云く、夫れ沙門は、僧伽藍に住し、或は空間に獨處し、十方の供養を受け、若し供無きときは、乞を行して自活す。是れ大聖の遺誡にあらずや。今予、鬧市に跡を託し、煎茶を鬻きて活す、幾んと我命毀禁に似たり。請ふ其意を聞ん。余云く、公の言尤も公論なり。然りとはいへとも、略吾か志を言はん。孔子曰。君子居之。何陋之有。古人詩曰。大都心足身還足。只恐身間心未間。祇得心間隨處樂。不論朝市與雲山。況復吾か法門廣大無量、機の利鈍に隨ひて、教を設くる事萬般なり。經に云く、心淨佛土淨と。若し心無なる、ときは、酒肆魚行、姪舍戲場も、淨利に非すと云ふ事無し。以大圓覺爲我伽藍故なり。今時の輩を見に、身は伽藍空間に處して、心は世俗紅塵に馳する者。十に八九なり。又出家は、財施を受くるに堪へたりと云ふの言を假りて、千態百計して、信施を貪求す。施す者有るときは、媚ひ諂て、師長父母よりも

敬重す。これに依つて施者も少き財施を以てその功に誇り、重恩の思ひを作て、受者を輕蔑す。施者、受者共に本より三輪空寂の名字をも知らず。或ひは外威儀を逞しうし、内貪心を懷きて、異を顯し、衆を惑はして、人の供養を受く。此の一等信施消し難きの義を知ると雖とも、貪心に蔽れ、猶ほ故らに犯す。初より知ざる者に又一層蒙昧なり。或は乞を行すれば、平等の慈心を三千里外に抛擲し、有縁の郷里を擇ひ、言を巧にし、顔を作て、人の門戸を傍ふ。施さざる者を見る事、冤家の如し。此の如くなるか故に、世人乞食の僧を賤する事、路傍の丐者に同じ。是くの如き等、皆是れ邪命にして、現相激發方口等を免れず。其の害却て劫盜よりも甚し。與其有聚斂之臣、寧有盜心と云ふの語、暗に符合せり。其れ實に傷むへしとす。古徳の偈に曰く。信施一粒米。重如須彌山。若也不成道。披毛戴角還。と夷齊は首陽に餓死し、一瓢晏如たり。豈にこれを憶はざらんや。中古老宿あり、常住の豊儉を計て徒衆に安す。人間ふて曰く、佛在世、數千の大衆、皆乞食して處す。師何ぞ乞を行して、多衆を安せざる。宿云く、佛世は可なり、今時は不可なりと。唐土の禪林、多くは主伴各自ら田園を耕して自活す、誠に微意有るかな。外邪命に似て、正命清淨の

り。余洛に來りて東郊に寓すること數年、或は齋供に應し、或は施物を受く。皆是れ薦靈の爲めにして、粒米半錢も有心の施にあらすと云ふこと無し。加之らす、却て恩恵を加ふるの思ひをなす。悉く不淨食にして、彼の墻間の祭餘に同じ。余本より有心の施を嫌ふ。唯洛に留らんことを欲するか故に、忍んでこれを受く。而して謂へらく、殘生來日を期し難し。因循として、心に欲せざることを忍受するは、恰も兒女の志に同じ。即棄て去らんとす。棄て去るときんは、車轍の鮓魚に同じく、口壁上に掛くるに堪へたり。古人物外の活計を追憶するに、蒲鞋を編み、渡子と爲り、或は力を鬻ぎ、柴を賣る等、皆余か堪へざる所なり。是を以て、鴨水河邊、人跡の繁き處を相て、小舎を借り得舖を開き、茶を烹て、往來の客に賣與し、茶錢を收めて飯錢となす。是れ余か素懐に愜へり。賣茶は、兒女獨夫の所業にして、世の最も賤んする所なり。人の賤んする所、我れこれを貴しとす。即吾か吾れを快しとする所以の者なり。客云く、子か説、脱然として、潔きに似て、也た太た小見なり。縦ひ染心を以て施すとも、無心にしてこれを受けは、皆是れ清淨なり。何ぞ取捨の心を容れん。余云く、苟も取捨好惡の心を泯せは、屠家姪室の施財も、悉く正命清淨の物にし

て、何ぞ淨穢の相を見ん。然りとはいへとも、已に三輪空寂の名を立するときんは、淨穢を分つも亦得たり。如上説話、是れ眼中の翳なり。若し此翳を脱得せば、長河を攪て酥酪と成し、大地を變して黄金と作すも、分外にあらす。余未だ此翳を除くことを得ず。故に妄りに空華の淨穢を見る。是を以て、遣次頭沛にも、孜々として、茲れを思ふこと茲に在り。客云く、勉めよ哉。更に請ふこれを筆せよと。余才拙く學識にして、文を作ること能はず、聊か倭語を以て、其大略を述す。幾はくもなく、賣茶翁の名、海内に噪きぬ。

月海 賣茶の偶多し。偶成にいはく、性癖風頭世上遠。賣茶生計慙其機。心休冷淡勝甘旨。意足破衫齊錦衣。曉酌井華涵月荷。暮挑瓦鼎帶雲歸。老身用得這般事。物外逍遙絕是非。歲晚偶成にいはく、四序流行旋火輪。箇中自有不遷春。叙山削玉千尋雪。獨露毘盧清淨身。また、人間歲月轉車輪。洞裡乾坤郊外春。埋首市塵沒蹤跡。沒蹤跡處不藏身。自警にいはく、夢幻生涯夢幻居。了知幻化絕親疎。貪榮萬乘猶無足。退步一瓢還有餘。無事心頭情自寂。無心事上境都如。吾儕苟得體斯意。廓落胸襟同大虛。

月海 晩年にいたりて、洛外の岡崎に住し、仙窠を焼却す。仙窠は、茶籃の名なり。焼却の語にいはく、我從來孤貧。無地無錫。汝佐輔吾曾有年。或伴春山秋水。或嚮松下竹陰。以故。飯錢無缺。保得八十餘歲。今已老邁。無力于用汝。北斗藏身。將終天年。却後或辱世俗之手。於汝恐有遺恨。是以。賞汝以火聚三昧。直下向火焰裡轉身去。轉身一句且如何。良久云。劫火洞然毫末盡。青山依舊白雲中。便付丙丁。實に寶曆乙亥の九月四日なりき。此れより、人の爲めに字を作りて、僅に飢を療す。その參徒安田是誰に與ふる書にいはく、隱者道人杯と申者は、世を不貪者に御座候。此隱者は、物をほしかりに而、前方は茶を賣り米代に仕候へ共、只今は致老衰、茶を賣に出候事も叶難候へ者、人之墨蹟を頼候を幸に致、拙筆を不顧書候而物をもらひ申候。菓子や茶杯吳候人御座候へ共、何程結構成茶菓に而も、ひたるさは休み不申候。兎角、米程之事は無御座候。さらはとて、米計りにても澄不申時には、味噌汁も無んは不成、老人之事なれば、寒氣には、炭も入申候。借又借屋賃火難に而候。左候へ者、金銀米錢程之事者無御座候。卑劣千萬之隱者に而無面目候へ共、此道を御心得、拙筆願候人には、御取次可被成候。借又貧者之望候人には、紙

も有合候を用ひ、書て遣可申候。元より禮物杯と申事、曾而入不申候以上。遊外、是誰様。その枯淡生涯を見るに足るへし。

月海 歌あり、いはく、笛ふかす太鼓たゝかす獅子舞のあとわしになる胸のやすさよ。この什頗る人に膾炙せり。

月海 かつて自ら像に贊していはく、咄這瞎漢。護打風顛。早歳入釋。事師參禪。百城烟水。遠探要津。熱喝痛棒。嘗苦喫辛。歷盡雪霜。自救不了。顛預面皮。懺懺多少。老來安分。爲賣茶翁。乞錢博飯。樂在其中。養通天淵。瀟渡月花。若人論味。瑟瑟蹉過。因憶昔年王太傅。依然千古少知音。

笑堂 (曹洞)

諱は行契、笑堂と號す、俗姓は野村氏、越前國角鹿郡の人なり。甫めて十四歳、美濃國妙應寺笑山に投して薙染し、初めは無聞に越中の瑞龍に參し、のち隱之に下總の東昌に侍して、その法をつき、總持に瑞世し、近江の報恩、安藝の國泰等を董す。寶曆十三年八月十五日化す、世壽六十又八、法臘五十又三。

笑堂 東昌隱之の道譽を慕ひ、錫を飛はして參叩す。隱之會下枯淡にして、雲袂おほくは堪ふるに能はずして去る。笑堂ひとり脊梁を墜起して、晝夜弛へす。遂に鼻孔に模著して、隱之の付囑を受けたりきといふ。

享保十九年の夏 笑堂、近江の報恩に結制す。示衆にいはく、劈破虚空。立九句綱紀。打開圓覺。接大地群機。不管少室風致。豈攀摩竭條例。雖然恁麼。不入洪波裡。爭見弄潮人。

延享三年 笑堂、國泰の請に應ず。開堂拈香、隱之の法乳に酬ゆ。示衆、鳳山尋常。癡癡兀兀。懃懃侗侗。死柴無焰。冷灰不然。忽至今朝。一吹吹起。黑煙滿堂。活火互空。近前則燒却嘉州大像。退後則凍殺陝府鐵牛。不進不退。直須商量無賓主話。切忌撥灰弄筋、被守火神輓破。

笑堂 晩に備後國尾道の濟法寺に住す。偈あり、いはく、片心似再遊人間。一鏗穿開佛祖關。慧日光輝幽谷際。盲龜跛鼈盡和顏。この後、寺を驛西の栗原に移す。結制上堂、舊年雖已始經營。綿密工夫未十成。重向自家親下手。寸椽片瓦放光明。寶曆癸未の夏 笑堂、微恙を示し、八月十五日にいたりて、偈を書していはく、

六十零八。夜夢夜夢。天曉驚起。蹈倒大空。蹈倒去也。三界無蹤。と夜三更、脇を右にして化しき。

宜黙 (曹洞)

諱は玄契、宜黙と號す。出雲國の人なり。大乘寺慈麟に侍して、その法を嗣ぎ、永平に出世す。

宜黙 久しく慈麟に參して、ふかく洞山五位の宗旨を究め、道をもて自ら樂み、世と相忘る。鷹峯の覺城、郡山の柳里恭と共に交りて、莫逆の友たりきといふ。

宜黙 禪林飯瓦を著はして、獨庵一線、萬回、天桂諸老の説を駁す。その書の自序にいはいはく、客有問契者。上人名者何。對曰。契。客曰。善。以契名有以也。吾嘗聞之。方臬之鳴。試將契字。書諸飯瓦。而投之。其聲歇矣。嗟乎。居今之世。間有其人。儉安于我。爲臬爲鷓。有長舌鼓。噉噉不歇。不祥之甚。人其行忌。上人何爲之不投飯瓦耶。不佞曰。飯瓦乎。飯瓦乎。於器不貴。人皆棄焉。棄焉有微。吾焉惜哉。客歎甚。不佞於是焉書。名以禪林飯瓦云。寛保辛酉之夏。宜

默玄契自題。宜黙また曹洞二師錄を校して世に刊行す。今世に行はるゝもの即ち是れなり。

卍庵 (曹洞)

卍庵は曹洞の耆宿なり。いまたその出處進退を詳にせず、或ひはいふ、寶曆前後の人なりと。世にその法語一卷を傳ふ。

卍庵 二十八歳の冬、他と評論の事ありて、毒藥の害に逢ひ、全體忽ち變して紫黑色となりて、その苦惱云ふへからず、自ら無間焦熱の苦も此の上あるましと思ひき。時に大懺悔を發し、心に以爲へらく、そもく十七歳の初發心として、正師を尋ね、叢林に入りて參禪辨道し、水に立ち雪に坐して、脇を席に著けず、夙夜に忘却せざるこゝと十年餘、越後の長泉寺に冬安居して、元綱老師の鉗鎚を受け、生死を透脱し、自己を脱落せりと思へり。今この毒藥に苦められて、轉處自由ならざることかはとて、大勇猛心を起し、劇苦と戰ひて跏趺坐す。この時、いまた初夜を打せず、正念調息して、四大分雖觀に入るに、氣息忽ち滅盡して、眞觀現前し、性相ともに忘却して、正念相續す。

時に鐘聲の來りて虚空に響くあり、我體人相を觀照するに、一旦の虚空に針を掛けず、親しく那吒の本身説法を解す。身體を動搖し、手脚を屈伸すれば、柔軟皎潔なること、尋常と大に異なりて、前來の苦痛は、昨夜の夢のことく失せて、全體の色もまた常のことし。身心に大慶快を生じて、安祥として坐を起ち、意外に出て、東方を見れば、すでに曉明なり。少時ありて、吐瀉一時に來り、恰かも臟腑みな盡きて、皮膚のみ連立するか如し。活中に死を得て、死中に活を得ること、毒藥變して甘露の妙藥となるに似たり。此において、初めて憎愛の二見を離れて、冤親平等を證することを得たりきといふ。

卍庵 來參の官人に示していはく、むかし勇施菩薩は、禁を犯して、苦惱の中に大誓を發し、頓に無生忍を悟る。數千の蚊子にさゝれて、疴痒と戰ひて悟入するあり、或ひは身體を割切せられ、皮肉を焼針し、苦惱と戰ひて契悟するあり、雲門大師は、折脚せられて大悟し、崑川新左衛門は、喧嘩の席にて省悟し、尊氏將軍は、陣中に安心す。その戰ふといふは、彼を怖れず、彼に與せず、たゞ正念工夫を押し立て、無二無三に進めば、苦痛も妄念も、みな一團の精神となり、一色の辨道となる。もし正念工夫を

失するときは、妄念邪氣の爲めに、今生の身心を責め苦めらるゝのみならず、未來永劫の生死を相續して、大苦を受くること、古へも今も、僧といひ、俗といひ、舉げて數ふへからず。そもく、君として正念工夫なきは、生民を安んずること能はず、臣として正念工夫なきは、忠義を全ふすること能はず、民として正念工夫なきは、孝信を竭すこと能はず。この故にかへすくも信心決定して、行住坐臥、喫茶喫飯、屙屎放尿、一切の事業を打して、一則の話題となし、正念工夫暫らくも間斷なかるへし。參禪は、神氣健に工夫猛烈ならむことを肝要とす。自ら輕賤し、自ら懦弱に、自ら下劣なるへからず。佛祖も是の如く、我も是の如し。舜何人ぞ、われ何人ぞ、聖人も眼橫鼻直、我も眼橫鼻直、出息入息、他の鼻孔をからず、前歩後歩、他の脚を用ゐずと、直に超佛越祖の志氣を損せず、自心の根源に就て參し來り參し去るを、大丈夫の意氣といふ。這裡に至りて、出家在家を問はず、男子女性を論せず、利鈍賢愚を分たず、繁務無事を揀はず、大誓を立し、大願を具し、大疑を起す者は、見性悟道して、佛祖の皮肉を得すといふことなし。少林の總持、曹溪の淨居、了然道意、如大、悲春、妙總、未笑のことき女性にして、志氣、大丈夫に超え、修證、佛祖の機關を透得す。維摩、龐老、陸互、裴休、陳操、大年、

東坡無盡その外、竺支扶桑において、明王賢臣、居士夫人等の見性得法する者、百千に至る。この身今生に度せずは、更に何れの生をか待たむ、今日すてに過ぎぬれば、壽命もまた随つて滅す。念々世相の無常を觀して、明日ありと思ふことをやめ、歩歩心源の大道を踐みて、別路に向ふことなかれ。直に須らく萬仞嶮崖に手足を放ちて、身心一時に死却し去れば、恰かも大虚空の正中に立つかごとく、瑠璃瓶の中央に坐するに似て、忽然として、凡に非す、佛に非す、心に非す、物に非ざる底の大境界を突出し、心佛衆生、第二人にふらさることを徹證せむ、これはこれ諸佛の法身、人々本具の自性なり。これを悟るか故に佛祖となり、これに迷ふか故に衆生となる。人根に利鈍あり、修證に頓漸ありといへとも、前來の開示秘訣は、頓悟成佛の法門にして、三根一圓の規則なり、彼の漸々修學の二乘聲聞とは天地懸隔せりと。

遊女大橋 (臨濟)

名を律といひ、幕府旗下の士某の女なり。京都島原の遊女となりて、大橋といひぬ。心を禪要に寄せて、白隠に參す。のち髪をおろして、惠林といひ、寶曆年中歿す。

す。

大橋の父某 もと徳川氏に仕へて、祿千石餘を食む。故ありて退糧し、その妻

およひ大橋らを携へ、京都に來りて寄食し、一貧洗ふかことし。つひに大橋を島原に沾りぬ。大橋、髮容のかさり、最と艶ひやかにして、萬人にすくれ、資性また慧敏にして、よろつ風流を悦ひ、女紅はさらなり、文詞を善くし、音律、茶香の末技にいたるまで、みなその道の精しきに入り、繪事も善くすとは云ふにあらねと、一種の雅致あり。されは、その名大に世に噪きて、初代大橋にゆつらさりきといふ。

大橋 つらく顧みて思惟へらく、この身もと士人の家に生れて、深閨の裡に養はれたりしに、忽ち火坑に落ちたるは、こはそも什麼の狀そと、ふかく恥ち且つ悔みて、つひに積て病となり、醫もまた匙子を投するにいたりき。一日、客あり、大橋の動容を相て、問ふていはく、汝、憂ふる所あるか。大橋すなはちその來由を語る。客いはく、汝の病む所もとも理なり。此に黄金千兩あるにあらすむは、汝の病を治すべからず。たゞ一事の徹底別脱すへき法あり。汝おそらくは信せさらむか。大橋いはく、君誠もて告げたまふに、いかて疑ふへきや。願ふは、つはらに教へたまへ。

客よつて語りていはく、汝か一身、見聞覺知の四つのもを除去して、別に作す底のものなし。この四つのも、主ふり。汝、行住坐臥、造次にも顛沛にも、見るもの、是れ何物ぞ、聞くもの、是れ何物ぞと、切々に返観して、怠らすむは、本具の佛性、忽然として現前せむ。這裡の田地に至れば、是れ即ち苦界を解脱するの要徑なりと。大橋その言を信し、これより單々に僭修して、少しも間斷なし。延享年中、たゞく迅雷大に震ひ、一日に二十餘處に隕つ。大橋、性もと太た雷を忌む。よつて帳を垂れ衾を被り、小髪をして、その左右を護らしむ。忽ちにして、客の言を省みて、堅坐するに、雷聲遽かに震ひて、轟然として、庭中に隕つ。大橋、仰顔して、氣息を絶つ。少らくして蘇息するに、その見聞幾と平昔に異にして、その慶快、喩ふるに物なし。ために師證を得むと欲りすといへとも、欲染中に沈淪するをもて、その志を遂くるに由なし。のち島原を出つるに及ひて、初めて白隠に世繼氏の宅に相見することを得たり、實に寶曆元年の春なりき。

大橋 のち栗原一素の爲めに迎へられて、その婦となりき。一素をた磊落奇男子にして、尤も禪要を悦び、大橋と共に白隠に參す。されは、夫妻意氣投合して、常に

枯談を甘ない、大橋は、源氏物語を讀みつゝ、飯を炊きたりといふ。のち一素に請ひ、緑の髪をおろして、尼となり、名を惠林といひぬ。

大橋 詠みたる歌多し。今一二を録す。海邊雪にいはく、和田の原波もひとつに苦しろき雪をのせたるあまの釣船。自畫の贊にいふ、わするなとちきりし春は夢なれやねさめとひくる初雁の聲。老後島原をすきて、よそにみておもふもつらし身の昔うき河竹のさとの夕へは。また遊女の圖に題したる文あり、いはく、西になかれ東になかるゝ、おなし川たけの身にしある中にも、八重垣つくと詠したまひし神垣のほとりは、いとやさしく、繪にかけるを見てさへ、まことなつかしうおほゆ。しかはあれと、このふたりのすかた、こゝにかきあらはさるさきは、ありやなしや。

大橋の没するや 一素ために東嶺を請して、焼香せしむ。東嶺、たゝ観音大士の像を安して、大橋の牌を置かざるを怪み、之を問ふ。一素いはく、惠林は、謂はゆる婦女の身を以て得度すへき者には、即ち婦女の身を現して、說法する觀音の應現なり、故に大士の像を安す、什麼の恠むへきことか、あらむと。東嶺すなはち黙して香

を拈しきといふ。

指月 (曹洞)

諱は慧印、指月と號す。幼にして出家し、戒を大乘の智灯に受け、成田龍淵の春翁に侍して、その法を嗣ぎ、明和元年十二月六日化す、世壽七十餘なりきといふ。けだし、洞上近代の碩學なり。

指月 道價妙悟、一世に冠たり。或ひは稱して、宏智正覺の再來といふ。その文辭もまた純粹渾淳、妙用自在にして、情謂を脱出す。一代の述作みな不能語をもて名づく。洞上の徒その文才を稱して、古今獨歩なりとす。

指月 かつて身知夢一篇をものして、參徒に示す。いはく、世は實なきあたし名の、後はあとなきものなるを、迷は人の心にて、したしみあり、うときあり、愛するからにまた惡む。きのふの雨を、今日は風に聞くなれば、何をかまこととし、何をかいつはりといふへき。およそ世の中のこと、求め願ふことはかなはず、うとみきらふことは、日々に目に見え耳に聞え、昨日も、今日もこれそと悦ぶことは、なれにて、明日は

とおもへと、明日もおなし世のおなし人なれば、心にそまぬおなしうるさきことのみいてきて、是れまてといふ限りは知られず、山には山の苦みあり、海には海のくるしみあり、天地の大なるも、終にはほろふ時あり。まして山の高きはくつれ、海の深きはかはき、定めかたく實なきは、世のありさまなり。天子のいとも高き位、賢名もいつか無き世の人と問はれ、三公九卿諸侯の威勢高く、また福祿おほきも、おなしくなき世の人となれば、鬼のかすに入る、いはんやそれより下れるものをや。すへて世上のことに、善道はすくなく、欲と瞋と愚とのみおほく、邪見を主として、日夜に利をあらそひ、我を選ふするのみなり。たとへは鴟鳥の斃鼠を東西へ飛ひありき、南北にかけり争ひ、兎に角にかの腐鼠をとりあふて、互に樂むへき林をすて、碍りなき空を忘れて、誰彼を惡むのみなるかことし。世上の俗心は多く、我を立て利を争ふ。若し人心あらは早く世を遁れて、寂靜無爲の實道を悟り、七珍よりも寶なるもの、王位よりも貴きもの、天よりも自在なる身を知るへし。今の世間の僧徒には習はず、たゞ釋迦尊の法に習ふへし。すくれてよきことなれば、王位を捨て國をにけ親族を離れて、諸法の實相を親とし、兄弟とし、萬法一如を身とし、怨もなく親もなし、色を

けしたる衣を着て、錦繡よりもうるはしき一鉢を持して、萬石より多し。是の身は身にあらす、虚空法界を身とし、一切の因縁は、弊れたる履のごとく、俗の樂む事は我にまざる。威のあるものにあふて、大に恐れなやむのもととなる。たとへは蛙の水に游て、能く樂をおもふも、蛇にあへは、忽ち樂しき心恐しき心となる。世上のと皆かくのごとし。常に生を食るゆゑに死を恐る。若しよく生もと不生の本来人を知れば、今日の見色聞聲のうへ皆不生なり。不生なれば不死なり。生死は今世上の六塵の起滅とおなじく、善にもあらす悪にもわらず、怨もなく、親もなし。唯日夜虚妄分別して生死といふ。日月の出入をのみ見れば、有る無と見えて、生滅なるかとおもへとも、日月の本體はかはることなし。人といふ形こそ、生死は有ると見ゆれとも、人の眞實體は、すへて去來生死の分別なし。こゝを知れば、生死去來も實に生死去來にあらす、生死去來は唯其儘なり。分別にまとはされは、我さへなほ不可得なり。況や其の餘をや。雨や風や昨日や今日や何にも言ふ事なし。

指月 武州押切の西光寺、小曾根の西光院、川崎の養光寺を開創し、三處において、衆に接し化を揚ぐ。故を以て、世稱して三光老人といひきとす。

雲門 (曹洞)

諱は即道、雲門と號す。俗姓は富永氏、肥前國の人なり。甫めて十一歳、玉林寺天淳に投して出家し、長州大寧の玉洲に參し、三河の龍海院、大和の靈鷲山に住す。

明和二年正月化す、世壽七十又六、法臘六十又六。

雲門 十四五歳の頃より、儒書および教宗の書を読み、江戸に遊び、ますく之を究む。二十二歳に及びて、翻然として悔いていはく、たとひ此の如くにして、内外の書を讀破するも、生死岸頭にいたりて、何の功かあらむと、遂に悉くその書を擧げて、之を同參に分與し、從來の學解を放擲しきといふ。

雲門 一宗匠某に參す。某、雲門をして公案を工夫せしむ。雲門いふ、公案を工夫することは、我これを要せず、たゞ自ら死し了り、焼き了りて、一堆の灰と作ることを知りて疑はず。喫茶喫飯、什麼をか成す、是れ有か、はた無か。之を聞けば、即ち足んぬと。某いはく、與麼ならば、汝、外道とならむ。雲門いふ、もし外道となるも、安心を得は足れりと、參究純一、二たひ寒暑を経て、一日、林中に薪を採るの次、忽然として、

山河大地、自己と一時に崩裂して大歡喜を得たりき。その後、自ら思惟すらく、我自
己分上において大安樂を得たりといへとも、いまた三乗の教理を出てす、何處にか
教外別傳の旨あらむと、これより工夫を做すこと前に倍す。かくて二年を経て、つ
ひに祖師の活面皮に撞著し、瓦解氷釋す。時に年二十六なりき。

雲門 三河の龍海院に住す。上堂にいはいはく、若實舉揚宗乘。則法堂前草深一丈。
若實不舉揚宗乘。則法堂前草深一丈。直得摩竭掩室。少林面壁。泥裡洗土塊。
德山棒。臨濟喝。雪上加霜。況又理會葛藤。識得箇箇立住轉處。句句有出身路。
則有利無利了不離行市。山僧與麼告報。喚作舉宗乘乎。喚作不舉宗乘乎。道得
拄杖子兩手分付。若夫道不得。則擡奪汝拄杖子去。舉。洞山老祖道。地獄未是
苦。向此衣線下不明大事。却是最苦。即拈云。親言出親言。人人屏息吞江意氣。
箇箇合著蓋乾眼腦。參透得與麼事。諦當分明。則不辜負先聖。報四恩。若或未
然。他時異日大事有。大衆久立珍重。雲衲蟻集し、法雷大に震ふ。

雲門 終に臨て、門人を誡めていはいはく、我に四件の語あり、一にいはいはく、萬縁を截斷
して大法に據らしむ。二にいはいはく、身心を放下して生死を脱せしむ。三にいはいはく、

毘盧を慕過して生涯を立てしむ。四にいはいはく、拽石搬土、慧命を續かしむ。我か門
入來の衲子、拳々服膺して、頭燃を救ふかことくせよと。また遺偈あり、いはいはく、末後
一句。照天照地。

逆水 (曹洞)

諱は洞流逆水と號す。俗姓は水島氏、越後國中頸城郡柿崎町の人なり。幼にし
て、柏崎香積寺寰海に依りて得度し、智灯の法を得て大乘に住し、明和三年八月二
十一日化す、世壽八十又一、法臘七十。

逆水 永平開祖の誠示三寶三種の諸訛を拈し、三轉語を下して、參禪の徒に示す。
いはいはく、問云。如何是一體三寶。答。以心明心。如何是現前三寶。答。以心超心。
如何是住持三寶。答。依文解心。頌云。明了諸佛深深旨。見來一體舊三寶。現
前三寶明正傳。不識相逢超心法。雖有中間幾哲匠。現前而授釋迦尊。傳來法脈
囑開祖。末世伽藍住持孫。

明和三年 逆水、直江津の德泉寺に住す。八月、微恙を示し、二十一日にいたり

て沐浴して衣を換へ、偈を書していはく、度生願心。敬遊覺王。薪盡火滅。偏界不
藏。咄。筆を投して寂す。
絶宗 かつて逆水の像に題す、いはく、道德圓明傳四海。通宗通說舉揚新。應緣
觸事自瀟洒。妙密家風不惹塵。

覺門 (曹洞)

諱は一入、覺門と號す。俗姓は山上氏、越前國南條郡杵見村の人なり。甫めて十
三歳。嘉祥院大圭を禮して、苑染し、明州、良悟、大機、密山らに參し、遂に大乘智灯の
法を得て、その席を董す。明和四年六月四日化す、世壽七十又七、法臘六十又五。
覺門 年わかき時、江戸に遊ひて、講肆に出入す。時に鳳潭座主、華嚴匡心の章を
湯島に講す。覺門ゆきて之を聞き、首肯すること能はず、憤然として起つていはく、
心を識得するは、豈に言辭の間にあらひやと、直ちに席を退きて去り、越前に歸りて、
明州、大圭の二師を省し、巾瓶に侍して、刻苦すといふ。
享保丙申の秋 覺門、錫を大乘に掛けて、智灯に參見す。智灯、本分の鉗鎚をも

て接す。覺門、朝參暮請、頭燃を救ふかことし。仲冬、一衆接心、たゞく、曉天の更鈴
を聞き、忽然として省あり。偈を呈していはく、撥草瞻風知幾年。諸方門戶扣幽玄。
杖頭著得些些眼。照破威音那畔天。のち大乘に分座す。一日、智灯問ふていはく、
拈華微笑、作麼生か會す。覺門いはく、織成古錦合春象。無奈東君漏泄何。智灯い
ふ、未だ更に道へ。覺門位に依りて三拜す。智灯いふ、如是々々、宜く能く保護すへ
しと、法を傳へ、偈を付していはく、威音那畔有來由。一入此門針芥投。表信相傳無
柄拂。當頭不犯振宗猷。

寶曆八年 覺門、徹通禪師四百五十年の遠諱に値ふ。上堂、舉。開祖遺偈云。
七頭八倒。九十一年。蘆華覆雪。午夜月圓。揮拂曰。此是始祖末後一則公案。
而蔭庇兒孫、傳續宗旨、底之真訣也。所以道。一心一切法。盡法界以爲身心。一念
是萬年。盡來際以爲壽命。黃閣簾下。密窺家風。紫羅帳合。闇撒真珠。正偏宛
轉。功位雙忘。明闇混融。影跡俱隱。不肖覺門。恁麼窺破。只得傍提一半。如
正提全分底。如何相應去。良久。以拂子掛禪床角曰。遍地兒孫。一任卜度。
覺門 微恙を示す。門人遺偈を乞ふ。覺門、叱していはく、善知識生涯語話操履

みな是れ遺語なり。我か明州大圭二師、共に遺傳なし。子ら強ひて我に需めば、夫の完戒陞座法語是れ老僧放不下底の遺訓なりと。門人切に乞ふ。覺門すなはち筆に信せて書していはく、遊道無蹈跡。應緣現去來。

頑極 (曹洞)

諱は官慶、頑極と號す。俗姓は古川氏、肥前國高來郡諫早の人なり。甫めて十一歳、天祐寺月門に依りて難染し、遊方して、良悟、德翁、山山、洪元、天桂に參し、また黃檗の千呆に參し、遂に法を少林默子につきて、彦根の清涼寺に住し、また尾張の新豊寺を創め、大に四來の學人を接す。明和四年十二月十日化す、世壽八十又五、法臘七十又五。

頑極 二十歳の時、江戸に來りて、吉祥の叢に籍し居ること數年、大に内外の典籍、大小の經論に通す。然れども、生死を脱得するは、文字の筌罟に拘り、科目の塵沙を算ふるの非なるを知り、悉く從來の學得底を擲ちて、刻苦工夫し、たゞく河水を過くるに當り、忽然として、大事を徹證す。德翁、大に激賞して、之を印可しぬ。時に年

二十六なりき。

寛保癸亥の正月

頑極、井伊侯の請に依つて、彦根の清涼に住す。三月十

一日、晉山式を行ふ。法語に曰く、山門。步步通霄路坦平。千人萬人眼如盲。長安風月古今好。那箇男兒模壁行。喝一喝。佛殿。煒煒煌煌。灑灑落落。日月面。茄子瓠子。舉拂子云。灼然灼然。土地堂。我法妙難思。護衛也慙慙。依稀渭北春樹。彷彿江東暮雲。祖師堂。孔竅花拆。五葉聯芳。胡漢來往。石火電光。據室。橫按拄杖曰。南北東西。坐斷諸訛。卓一卓。纖洪長短。一串穿過。阿呵呵。趙州勘破臺山婆。即日開堂、拈請疏曰。目擊之先。消息分明。大衆會麼。只得補袞調羹手。撥轉如來正法輪。拈山門疏曰。東序西班。風流出格。舞底舞。吹底吹。唱底唱。拍底拍。咦。三臺須是大家催。拈同門疏曰。飲水知脈。發言忘機。同條生也。背觸交馳。拈江湖疏曰。曹源之一滴。江湖困法席。萬派都歸宗。水天共一色。指法座曰。灯王如來已說破了。諸人若也不會。且待山僧屙屎了。祝聖拈香。把懷香曰。此一瓣香。釋迦慳。迦葉富。將謂別有奇特。直得目瞪口呿。第二回拈出熱向爐中供養嵩山默大和尚。用酬法乳之恩。斂衣就座。白槌商量洪

洪地。乃曰。跛跛挈挈。運運騰騰。行到水窮處。滾滾落落。坐看雲起時。正法眼藏涅槃妙心。一筆勾下。一句嶄新。舉拂子曰。是嶄新不嶄新。崑崙粉碎。粉碎崑崙。衲僧家。回互不回互。轉法輪擊法鼓。風以時。雨以時。直得鼻風蕩蕩。大道平平。凡聖合靈俱我家。祇如芭蕉和尚道。汝無拄杖子。奪却汝拄杖子。又作麼生。卓拄杖。天上有星皆拱北。人間無水不朝東。又結夏上堂。いはく。青天白日。不可指東畫西。全提向上。說甚尅期取證。佛子住此地。經行若坐臥。豈不綽綽然有餘裕哉。所以道。以大圓覺爲我伽藍。守株待兔的。抱橋柱深洗底。有甚共語處。祇如平等性智一句。要且作麼生道。梅檀林裡無雜樹。返擲還他獅子兒。

頑極 達磨忌に値ふて偈あり、いはく、問却少林古道場。寒履十月滿天霜。一條大路自來往。別起眉毛見電光。香を拈して曰く、年年此日被鈍置。一頓糶茶一炷香。また永平高祖忌の偈にいはく、眼橫鼻直最初句。掣電之機阿剌刺。末後全提打踣跳。雙睛突出黑於漆。

頑極 清涼に住する三年、延享丙寅二月に至り、事に因つて退院す。その上堂に

いはく、海上横行頑藟苴。湖邊靠杖二三年。勾頭有路平平地。脱體化前遍界類。此において、一衆みな頑極を送りて愛知川に抵る。頑極、別に臨み、拄杖を卓て衆に示していはく、逆風吹兮順風吹。敗闕風流也太奇。各自西東看脚下。此行能有幾人知。

頑極 飄然として、大和國吉野の觀音に抵る。寺主大興は、頑極の嗣法なり。歡ひ迎へて小參を請ふ。頑極すなはちいはく、昨日紅塵鬧市中。千波競起也風流。今朝幽邃巖崖裡。一瓦清虛是我家。恁麼也得。不恁麼也得。從來不改生靈粹。焦尾大蟲元是虎。大家隨我到此山中。或庵居。或近侍。專守枯淡。不爲別事。且道。是文珠境界耶。是普賢牀榻耶。是諸人分上耶。是山僧分上耶。願視左右曰。聽取山僧一偈。途中家舍不容塵。南北東西處處真。衲被蒙頭芳野里。千峰繞膝好願神。

寬延庚午の秋九月 頑極、關東より尾州に抵る。大興、豫め新豐寺を創建し、恭く頑極を請して開山祖とす。頑極、即日、方丈に就いて、衆に示していはく、末後郎當、柳鳳山。分明一句到牢關。佛來祖訪難窺測。把住要津堪養問。また鳳山規約

五條を設立して、日用行持、石霜の枯木堂、汾陽七人衆に擬す。

頑極 因に客あり、白隠か書く所の詞を携へ來りて、一語を題せむことを求む。その詞は、大帝を描き、その上に題して云ふ、天下の悪知識を掃ふ帝と。頑極、即ち筆を抜て書していはく、「先掃白隠」。

頑極 縁に隨て感に赴き、恰かも閑雲野鶴のことく、定處あることなし。到る處、結制授戒、應化無邊、盛に法輪を轉す。遺偈あり、いはく、「八十五年。之乎者也。咄」。

大潮 (黄檗)

諱は元皓、大潮と號し、別に魯寮と稱す、肥前國伊萬里の人なり。化霖の法をつきて、龍津寺に住す。明和五年八月二十二日化す、世壽九十又三。

大潮 幼時より、月海と共に化霖に侍して、互ひに切磋す。のち、月海か去つて樂託の性を肆にするに及ひて、龍津の席を繼ぎ、大に道俗を化す。大潮もとふかく外典を究め、尤も文章を善くし、曹洞の千丈と共に併稱せられたりき。

大潮 涅槃會拈香の偈にいはく、「涅槃一畫儼然在。見見大千娑界中。月上東山」

白毫相。日沈西海紫金宮。阿難灑淚杏花露。迦葉攢眉楊柳風。八萬人天多少恨。黃鸝啼斷雨濛濛。

大潮 幽居の作あり、いはく、「榮者不知厭。窮者不堪憂。同是生死徒。共歸一荒丘。安心法如是。寧用爲身謀。比來愛嘉遯。種桂山之幽。時就白雲蔭。或依明月秋。山禽啼樹杪。蔓草鹿呦呦。樵童偶此過。竹邊放猿留。歸路吹橫笛。餘響滿岳湫。自當養癩癖。何苦問貴游」。

大潮 集中に詩太多し、此に二三を録す。江上吟にいはく、「江蓼岸畔白蘋洲。桂櫂蘭橈泛中流。仙子雲邊乘玄鶴。吹笙彈瑟任所留。袁紹有情邀明月。屈平無命悲素秋。天浸大湖三萬頃。波撼蓬萊十二樓。比來粟粒隨滄海。飄然身世空沈浮。天地日月或長在。逝者如斯不暫休。秋日抱疾依僑舍。乾坤同化城。不因人有死。安識我無生。書帶秋雲卷。詩題木葉鳴。交朋殊未息。四海尙逢迎。宿山寺。遙入雲端祇樹園。藤蘿百尺石堂昏。爾時梅月觀真諦。如是松風說偈言。草木春回慈雨潤。鉢盂晨洗老龍蟠。相逢休問西來意。目擊依然此道存。牽牛花滿琉璃碧。深看曉露中。開時空即色。湖處色即空。

圓通 (黃蘗)

圓通は、黃蘗の一散聖なり。獨湛の法を得て、紀州和歌山の光明寺を開きて之に住す。

圓通 人と爲り、飄逸にして、平生その意の欲りするまゝを行ひ、單孤居止、東西をつねにせず。殆とその生涯を測るへからさりきと云ふ。

圓通 かつて某の爲めに、或る書の跋を題す。草書わか意にまかせたるものにて、讀下しかたき所多し。某すなはち携へ來りて之を問ふ。圓通やかてうち返しうち返し見て、余もまた讀み得す。我か書は、門人の某か能く讀むなり、某に見せて讀ますへしと云ふ。某呆然たりき。

圓通 ある時、京にありて、訪ふへき家も名も忘れて、そのあたりに行き、圓通か行くへき家は、こゝにや〜と尋ねあるきたりとぞ。

圓通 またある時、京の富豪某の家に抵るに、家中最と騒かしく、奴僕ら奔走す。

圓通 これを問ふ。某いはく、今日我か子か爲めに婦を迎へ、その婚禮を行ふ故に、家

静かならず、今宵は他に行きたまへ、他日更に迎へまゐらせむと。圓通うなつきながら、その婚禮といふもの、老衲いまた之を見す。こひねかはくは、一見することを許したまへと云ふ。某もてあまして、なか〜和尚などの見たまふへきことにあらずと辭せしかと、圓通、苦しからずとて動かす。某すなはち之を隱居の祖母の一人居る處に迎ふ。圓通さらはとて、夜もすから普門品を讀誦したりきと云ふ。

圓通 紀州の岡田村に庵居するや、たま〜曹洞の密山もまた和歌城北の吉田村に棲遲して、その病を養ふ。此において、互ひに往來して道を談し、いと親しく交りたりきとぞ。

法眼 (黃蘗)

法眼 久しく黃蘗の獨湛に侍し、その法を得て、攝州天王寺畔に法福寺を開きて、之に住す。

法眼 圓通と共に獨湛の門より出て、その道交もとも深し。かつて共に京にあり、一日、圓通に語りていはく、祇園に茶屋といふものあり、師兄かつて行きたまひ

たるか。圓通いふ、いまた訪ひたることなし。法眼、さらば共に行きて見侍らむとて、手を携へて祇園にゆき、軒高く門亦大なる家を見て、この處好しかるへしとて、つと入りて、我は攝州の法眼なり、おのれは紀州の圓通なり。主人は何と云ふやと、そのことくしきさまに、主人最と驚きながらも、かねて二人か知識の名を聞き及ひしかば、之を一室に請し、家名などを述ふ。法眼、女どもの立まはるを見て、主人は娘を多くもたれたりと見ゆ、この座に招かれよと云ふ。主人あやしみつも、之を呼びあつむ。法眼つくく見て、さては好き育そだなり。親の身にしては、さそうれしからむ。因縁にもなるへきなれば、いさ三歸を授けむ、いつれも合掌して、我か云ふことく唱へよとて、やかて高聲に之を授く。はや女たちに用はなし、立たれよと、かくて法眼も歸り去らむとするに、主人これを止めて齋を供し、布施をも贈りければ、法眼いとねもころに廻向して歸りぬ。さて、このさまを人に語りて、茶屋といふものは、おもしろきものなり。年わかき僧らの行かむとするも、理りあることなりとて、この後は、たゝの家にて饗應にあひても、茶屋々々と呼ひさといふ。

法眼

またある時、戯場の前を過ぐるに、隨侍の僧そを見まくおもひて、欺きて、こ

の家の中には、さまくの尊きことあり、拜み給はむやと云ふ。法眼、しはしもの思ひ顔にて、今日は、某かもとへ心せけは、重ねて参らむ。先つこれより結縁せむとて、木戸口に向ひて三禮す。この後、戯場の前に観客の多く行きかふを見ては、今日も参詣者多しと語りきとそ。

面山 (曹洞)

諱は瑞方、面山と號す、俗姓は今村氏、肥後國の人なり。年甫めて十六、流長院遼雲を禮して、難染し、遊方して、久しく山に侍し、のち太源下の法をつきて、若狭の永福庵に住し、大に道俗を化導す。明和六年九月十七日化す、世壽八十又七、法臘七十又二。

面山 年十五にして、その母を失ひ、哀悼措くこと能はず、その百日に、ひとり墓に詣りて、自ら剪刀もて髪を斷ち、家に歸りて、之を父玄珍に告ぐ。玄珍その志の遂に奪ふへからざるを知り、流長院に送りて、得度せしめきといふ。

面山 二十一歳の春、東遊して、江戸の青松寺に掛錫す。たまくと書を讀みて、以

聰明領略。說得滴水不漏。安能敵生死。達磨門下。提唱此事。只要可直泯觀智。忘心識。雖道理。絕解會。以始出生死。繼祖灯。何得勞力數沙如一老庫主哉。といふを見て、大に感し、終に悉く書卷を捨て、日々、愛宕山に上りて、打坐工夫し、寢食ともに忘れたりき。

面山 損翁に侍す。一日、損翁問ふていはく、人あり忽ち是れ什麼ぞと問は、汝如何か對へむ。面山いふ、是れ什麼ぞ。損翁いはく、銀山鐵壁。面山いふ、銀山鐵壁。損翁合掌す。面山すなはち禮拜す。損翁因に謂つていはく、我病魔防きかたし、在世また久しからず、汝よく保重して祖恩を報せよ。永祖の面を見て、他の面を見され、是は吾か汝を得るの大因縁なりと、眼中に涙を浮ふ。面山拜して去る。

正徳辛卯の春 面山、慈麟、祖參の二人と共に伴を結ひて行脚し、三月三日京より河内に出てひとて、雨を衝いて草薊嶺を越ゆ。たゞく大鳥の谿間に飛ぶを見る。頭より尾に至るまで、長さ一丈餘、羽毛太た雉に似たり。やかて坂を下りしに、路上、松を書ける扇子を拾ふ。河内の南詢庵に抵るに及ひて、之を浙堂に告ぐ。浙堂大に賀していはく、今日まさに是れ禹門三級鯉魚の龍に化するの佳辰なり、公よろ

しく扇子一柄を握つて、千指の板首に任すへしとて、特に赤飯を炊きて、三寶と龍天に獻して、面山に饗す。時に相州大智寺の實秀また來り、面山を推して結制の首職に請す。

明和戊子 面山年八十六なり。歳旦、偈を打していはく、軒外一華五葉梅。嶺南法運興春回。可欣氷解金龍躍。萬里欲移西海隈。その翌年、京にあり、歳旦また偈あり、いはく、己丑祝春寓帝基。帶霞肩、上福田衣。八句餘、七亦須悅。堅固法身六大肥。

面山 己丑九月十三日に至りて、微恙を示す。十五日早晨祝聖、常と異なることなし。粥後、筆をとりて法語を書す。十六日門人、遺偈を乞ふ。面山叱していはく、我生前多口。汝らなほ少を嫌ふか、止めよ、復た言ふことなかれと、口を閉ちて一語なし、五更に至りて、安然右脇にして化す。顔容生けるかとし。門人ら、その靈骨を永福に藏め、塔を老梅と云ふ。

面山 禪教兼ね修め博學にして、文詞を能くし、聞解、斷壁等著述太た多し。その學人に接するや、老婆心切にして、諄々として倦まず。江湖稱して老婆面山といひ、

天桂と併せ稱して、當時洞上の二老宿となしぬ。

倫翁 (曹洞)

諱は大超、倫翁と號す。永福面山の法をつきて、豊後の永慶寺に住す。

享保七年 倫翁はしめて面山に禪定に見え、二祖安心の因縁を問ふ。面山つふさに之に示す。倫翁、默然禮拜して去る。翌年の春、再び禪定に參していはく、安心の因縁、徹骨徹髓。面山いはく、作麼生か是れ安心の處。倫翁いふ、捺著すれば則ち轉す。面山いはく、捺著せざる時また作麼生。倫翁いふ、眉毛、眼上に横ふ。面山いはく、老々大々、者箇の語話を作すか。倫翁いふ、和尚作麼生。面山いはく、眉毛、眼上に横ふ。倫翁いふ、恩大にして酬ひかたしと、便ち禮拜す。

享保戊申の夏 倫翁、禪定に分座す。つひに法を面山につく。面山、偈を付與していはく、黃梅開漚雨三更。室内一灯形影明。汝不是渠渠正好。人人堪指作權衡。時に倫翁の年四十八なりき。

倫翁 その齡、面山に長すること二歳、その師資たる、恰かも非翁の永平に嗣き、寒

巖の徹通に嗣きたるかとし。

愚谷 (曹洞)

諱は恆神、愚谷と號す。俗姓は蒲原氏、肥前國佐賀郡飯盛村の人なり。十二歳、開田庵に投して出家し、古岳の法をつきて皓臺に住す。明和七年九月十日化す。

愚谷 初めは、宗龍の天海に參し、尋て錫を加州天徳院に掛けて、雷洲に侍すること六年、大に省發する所あり、のち古岳の法を得て、皓臺に住す。明和乙酉の四月、愚谷、徳川家康の一百五十年忌齋を修し、對眞上堂を行ふ。宰尹石谷備後守、皓臺に入り、その行法を瞻て、歎していはく、ひかし、程明道いふ、三代の禮樂、盡く緇衣の中に入りと。余かつてこの言を信せざりしか、今や禪席に陪して、始めて古人の我を欺かさることを知得すと、便ち銀二十錠を施し、再下上堂を請ふ。愚谷、香を焚きていはく、雷洲之恩。微子今焉。昔日不見洲老。臨大法戰。焉得不辟易哉。

蘭陵 (曹洞)

諱は越宗蘭陵と號す。また自ら夜雨と稱す。石州圓光無隱の法嗣なり。蘭陵 久しく無隱に侍して、遂にその印證を受け、無隱を助けて雲衲を接す。また無隱が著述は、おほくはみな蘭陵が校訂の勞を取りたりきと云ふ。

蘭陵 いまた山居せざる先きは、四方に歴遊して、朝野市井をわかつたす、酒肆淫房をもさらはす。人ありてその故を問へば、便ちいはく、我が道、當處にあり、間に髪を容れすと。けたし、心性を鍊らむか爲めなりきとそ。

蘭陵 かつて九州に遊ひて、筑紫の山中に隠れ、また大和の葛城、京の東山などに草庵を縛し、枯淡を甘ないて工夫しぬ。蘭陵、性ことに夜雨を愛し、いつにても雨の降りたる夜は、香を焚きて静坐し、曉にいたるまで睡に就くことなし。されは、山村の人も、初めはその名を知らず、たゞ何となく夜雨和尚と呼ひき。蘭陵、いとその稱をおもしろく思ひて、自ら夜雨と號しぬ。

蘭陵 客の參禪と念佛との優劣を問ふ者あるに示していはく、參禪念佛兩重山。

上下根分一世間。到得同看峰頂月。但憐不信苦躋攀。永平開祖の像に贊していはく、三年一問五更鷄。頂相更無隻字題。脫落身心明歷歷。日升東兮月沈西。關山國師の贊にいはく、破衲藤環名翼飛。深山不許鎖柴扉。一言判斷西來意。柏樹枝頭著賊機。湖上映眺にいはく、秋天日暮一聲鐘。寒雨蕭條浦上松。水自流兮人自老。依然七十二芙蓉。淨業徒に示す、發心便見菩提成。任運隨緣稱佛名。定散不論末抄句。銀山鐵壁在平生。

蘭陵 つねに天台の敬雄、黃檗の月海、大潮らと共に遊ひ、尤も親善なりき。月海を訪ひたる時の偈あり、いはく、第二橋邊雲半間。無心老去不居山。賣茶却隱紅塵陌。一釜松風接往還。

天台の敬雄 かつて蘭陵を評していはく、今歸然而存者。海西蘭陵禪師一人而已。余餐其風。而未得接道儀者十有餘年矣。客秋忽來于洛下。卜居於東山。一日訪余廬。余目擊其道貌。奇標超邁。目光爛爛。儼乎如阿羅漢。灑灑落落。無世俗之態。無香火之氣。過於所嘗聞者。乃爲之心醉焉。於是社盟契矣。從時厥後。往來遊戲。道交日熟矣。又いはく、以師之道。若蒞鉅利爲獅吼。則曲盡木

上作射犴鳴者。氣喪而膽裂矣。可惜哉。

長門の永富獨嘯庵は、豪傑の士なり。ふかく蘭陵の道風を欽し、弟子の禮を取りて必要を問ひぬ。ある時たましく人ありて、蘭陵を嘲りて、二乗獨覺の禪にあらされはまさに是れ風癩の人なるへしと云ふ。獨嘯庵これを辯していはく、跡を陵藪に絶つは易く、形を朝市に渾するは難し。禪師の道を覺するは、これを世間に得たり、これを山林に得たるにあらす。之を二乗といふて可ならむや。まいて自ら七情の變を究め試るを、風癩と云ふて可ならむやと。世稱して、父を知るは子に如くはなしといひき。

拙堂 (臨濟)

諱は如雲、拙堂と號す。また懷珠と稱す。明和の末年、大阪に寂す。師承いまた詳ならず。

拙堂 ある夜夢に紫玉笛を拾ふと見て、大に奇なりとし、遂に自ら紫笛老人と號しぬ。これよりその用處あたかも電のことくなりきといふ。

拙堂 夷曲歌に妙を得て、人の來りて參する者おれは、之に歌を示す、八百のうそを上手にならへても誠一つにかなはざりけり。また、爲へき事かたつける氣は善處なりせずにおく氣はいつもくるしむ。

驢年 (曹洞)

諱は活宗、驢年と號す。若狹國小濱城南綱村の人なり。甫めて九歳、龍谷寺密僊に依て得度し、良悟、天桂、曹海等に參し、遂に少林默子の法を得て、美濃の善應寺に住し、明和八年八月二十一日化す、世壽六十又七、法臘五十八。

驢年 わかき時、某寺に坐夏す。時に貧甚しく、平生たゞ一布衫あるのみ。一日、自ら衫を洗ひ、之を墓樹に掛けて、赤裸々のまゝ、その下に坐す。たましく墓に詣する者あり、見て之を奇とし、その名を問ふて去る、翌日また寺に來りて、一領の衫を施す。驢年、受けて、懽ふ色なし。施主いよ、歎賞したりきといふ。この事、太々曹海の事と相似たり。

驢年 默子の道風を慕ひ、遠州の少林にゆきて、必要を咨訣す。よつて臨濟詰驢

の話を提撕し、豁然として省悟し、急に方丈に上りて所見を呈す。默子ふかく領し、
ために一頌を述べて之を證しき。

驢年 初めは河州の慶運寺に住し、のち、興聖の推獎を得て、宇治の正法寺に移る。
半夏上堂、九旬剋期。半已過了。至道無難。唯嫌揀擇。主賓交參。洞然明白。爲
什麼如此。三年逢一閏。雞向五更啼。少林先師忌拈香、羅茶淡飯一爐沈。追憶舊
冤恨轉深。真相依然肉猶暖。暑雲六月襯黃金。嘆。少林鐵笛好音韻。屋後松風
無古今。解制示衆、古德曰。汝等諸人直須向萬里無寸草處去。山僧則不然。萬里
荆棘。各各作麼生進步。速道速道。

寶曆壬午 驢年、鐵山の招に應じ、正法を辭して、法旃を美濃の善應寺に移す。
途に江州の瀬田を過ぎて、和歌を詠みき、いはく、いつまでも宇治の川瀬にすみもせ
てまたよをわたる瀬田の長橋。

明和癸丑 驢年、法兄頑極の訃音に接し、位を設けて拈香す、琵琶湖上捲絲綸。
復向浪江釣活鱗。隻履西歸堪哭處。紫羅帳裡笑開門。

明和辛卯の春 驢年、忽ち門人および檀越に告げていはく、我今年をさに行か

ひと。聞く者駭然たり。八月二十一日、山田某の請に赴き、水陸會を修し、平時に爽
はす。すてに畢りて某に謂て云ふ、我不安なりと、輿に乗して歸り、纔かに寢堂に到
り、右脇に臥し、泊然として寂しぬ。

驢年 性眞率にして言寡なく、つねに百丈大師の風を慕ひ、衆と共に作務し、土を
搬ひ石を曳き、手足胼胝するも、自ら輟まざりきと云ふ。

悦巖 (曹洞)

諱は素忻、悦巖と號す。少林默子に侍し、その法を得て、加州の天徳に住す。

悦巖 前田侯の請に應じて天徳の席を董し、大に士衆を度し、晩にいたりて、越後
國北蒲原郡紫雲寺村の長者館に一字を開創し、名けて觀音院と云ふ。觀音大士開
光にいはく、慈光放光著著新。莫臨南海相追尋。見聞一一渠逢我。犬吠驢鳴觀世
音。また地藏大士開光にいはく、腦後眼冷。光射迷心。俗人沾三升酒。此地無二
兩金。弘深願海無涯涘。十字街頭奏斷琴。

本光 (曹洞)

諱は瞎道、本光と號す。俗姓は新井氏、武藏國の人なり。幼にして、州の賀美郡保原村安盛寺に入りて祝髮し、指月の法を嗣きて、川崎の養光寺に住す。安永二年十月五日化す。

本光 人と爲り卓犖不羈、博洽強記、諸方の請に應じて禪法を提唱し、大に道俗を化す。世稱して、指月の子たるに愧ぢずとす。かつて、指月の爲めに上堂す、提綱にいはく、吾本師養光開山指月老漢大禪師者。寬以居之。仁以行之。善而不驕。謹而不恨。寬則汎愛衆。仁則能惠物。尋常左右。以嬰兒五相爲相。以不能言語爲語。有句猶不得物。哆哆啾啾。遂以歸宗。天真而妙。不屬迷悟。常顯文彩。亦不染汚。句裡遂無鈎鏤機。直鈎元求負命魚。恆憂道不憂貧。長薄己能重人。是以。橫行天下。無處不慕其德。跋涉東西。無人弗假其風。生前十三年。吾面拜瞻師顏。滅後十三年。今至如是我聞。小弟等。今也值此忌辰。應供底之一句如何舉唱。拂一拂云。啼月杜鵑識此意。一聲聲在落花枝。舉。洞山宗祖。爲先師

雲巖和尚營齋。僧問。和尚於雲巖處得何指示。師云。雖在此中。不蒙指示。僧云。既不蒙指示。又用設齋作甚麼。師云。爭敢違背他。僧云。和尚發跡南泉。爲甚麼爲雲巖設齋。師云。我不重先師道德佛法。祇重他不爲我說破。僧云。和尚爲先師設齋。還肯先師也無。師云。半肯半不肯。僧云。爲甚麼不全肯。師云。若全肯。即辜負先師也。拈云。作家不啐啄。啐啄不作家。洞山宗祖有句無句。則不無語諱十成。慎觸犯其主。出語直使燒不著。可謂只能莫觸當今諱。也勝前朝斷舌才。若有人問和上爲先師設齋肯先師也無。但對他云。唯人自肯正乃親。又曰。和尚已自肯。洞山爲甚麼不全肯。云。父爲子藏。子爲父藏。直在其中。又云。全肯辜負先師。如何不辜負得去。云。約臂黃金寬一寸。迷人猶道不相思。伏惟。衆慈久立珍重。

本光 かつて永平の正法眼藏を註す。時に數僧あり、首楞嚴經を講せむことを請ふ。本光すなはち机上の左に楞嚴を置き、右に眼藏を置き、その中間に紙を展へ且つ講し且つ註し、兩眼三處、一時同しく舉る。見る者大に驚きて、權者の現化となしきと云ふ。

本光 江戸の栴檀林にありて、學人の求に依りて、多く祖録を註す。著はす所正法眼藏參本二十卷、衆寮清規求寂參二卷、大智偈頌參註三卷、永平廣錄點茶湯、宏智録國字註、曹山解釋、洞山五位顯訣、三墮四異類、心王銘參註等百餘卷あり。

慈門尼 (不詳)

慈門尼は、江州彦根藩士武居次郎左衛門正景の長女なり。里根村廣慈庵の一枝を禮して薙染し、安永四年七月十九日化す、世壽七十又六、法臘五十又九。

慈門 十一歳にして母を失ひ、十五歳にして、またその父を失ひ、ふかく人世の常なきことを感し、つひに一枝を拜して、緑の髪をそりおろしぬ。時に享保二年にして、慈門の年甫めて十八なりき。慈門は、色白く、髪ふさやかにして、姿容人にすくれしを、人みな太た惜みあへりきといふ。

慈門 仁慈の心いと厚く、窮する者あるを見れば、之を賑恤して至らざることなし。ある歳の臘月、雪のいたく降りける夕、幼なき乞丐の兄弟連れ立ちて、草庵の前に立ちて物を乞ふ。そのさま最と寒けに見えしかは、直ちにおのか衣をぬきて之

に與へき。その時、詠みたる歌、わひひとのあはれは外にすこさねと覆ふにせはき袖そちらめし。またある寒き夜に、盜兒庵に入りて、財物を求む。慈門つゆ騒ける色なく身を起していはく、かゝる寒き夜に、野こえ山こえて來りたまへるは、いと便なし、暖きものをまゐらせむ、しはし待ちてよとて、粥を煮て與へ、火によらせて、さて云ふ、我は世をすてたる身なれば、價ある物もな、けれども、子か望む所の物みな携へ去るへし。そのかへに、子に囑むへき事あり。我つらく、子を見るに、如何なる業を營みても、世をすこすこと難からず。さるを、かゝる淺ましき境に落ちて、その身は云ふもさらなり、父母兄弟の名まで汚さむは、いかにくちをしき極みならずや。この後は、其心をひるかへして、夜盜のすさひを止めたまへ。我か庵の中にあらむ物は、悉く携へ去り、そを金に代へて、身にかなひたる業を營むへき料にせよ、いかに心安からむとあるに、盜兒大に感しかつ謝して、一物をも取らずして去りにきとそ。慈門 をりにふれては、和歌を詠みて自ら樂み、人をして、その稿を儒士澤村琴所に寄せしめて正を乞ひき。されと、琴所は、美丈夫なりければ、之に親まむは、世の聞もいかにとて、つひに之と相會せしことなかりきといふ。

大休 (臨濟)

山城國愛宕郡北巖倉村の人なり。年甫めて六歳にして、郡の木野村正福庵の竺傳に依りて驅鳥となり、遊方して、初めは古月に日向に參し、のち白隱に侍して、大事を了畢し、井山の寶福寺に住して、大に化を揚ぐ。安永五年六月三日化す。世壽六十、法臘五十又五。法を嗣く者十一人あり。

大休 いはけなき時より、穎脱にして凡兒と同じからず。諸宗師これを得むと欲りし、しはくその父母に乞ふに、みな許さず。大休自ら謂へらく、我來歳もて禪門に投して出家せむと。六歳にして、竺傳に依り、名を慧昉と改む。里人みな大休か前言の符するを欽し、感歎していはく、黃口兒言を食す、戴白の老人もまた之に愧つへし。

大休 十六の時なるか、たましく竺傳か人と共に父母未生前の事を言ふを聞き、心つねに疑をいたき、閑を得ることに、只管打坐しき。この時より、東福の象海に謁して工夫の要を問ふ。その途中つねに鼻頭を守り、いまた曾て市街の繁華を見ず。

誤つて車馬に撞著し、しはく、馭奴の叱する所となりきと云ふ。

東福僧堂開單す

大休もまた挂搭して、象海の侍薬に充つ。一日大休茶薬

の滓を捨てむとし、通天橋の上にゆき、茫然として前後を忘るゝこと數刻、時紅楓まさに錦を曬すかことくなるも、またその眼を歷す。その工夫も純一なること、おほひね此の如し。人稱して夢中侍者と呼ひき。時に大休の年十八なりきと云ふ。

大休 二十三歳の時、日向にゆき、古月に相見して所見を呈す。古月曰く、子の見處、果然門外に在り。もし生死岸頭に到らば、毫分の用處なし。猛に精彩を著けよ、自ら打成一片の時節あらむと、すなはち趙州十二時の歌を擧して之を參せしむ。あくる年の夏、大休、雲堂侍者寮に在りて、まさに茶瓶を携へて庫院に赴かむとするに、忽ち心頭鐵に似て、足は虚空を歩するか加し。時また停立し、清風颯として懷に入る。その行くに當りて、露柱に撞著し、忽然として省あり。よつて入室して、古月に告げて曰く、胸中の礙壅の物、今日まさに通脱し了りぬと、古月たゞ微笑せしのみ。大休 古月に侍すること數年、自ら謂へらく、大事了畢す、天下を一周するも、誰かよく我に及ぶ者あらむやと、同參快巖と共に南紀の熊野にゆき、閑處を得て長養せ

ひと欲りし、偕に辭して東し、たま〜路に白隠か清淨行者不入涅槃の頌を讀みて、之を怪み、他を勘し去らむとし、遂に松蔭に來りて、白隠に相見し、その波瀾の浩大なるを知り、心先つおとろきて挂搭し、行卷に従前參得する所の一句一語を記したるものを取て、之を丙丁に投しぬ。實に大休の年二十七の秋の事なりき。

白隠 一日、雲山を訪ふ。話次に雲山、白隠に問ふに碧岩百則中の頌、いつれをもてもとも殊絶なりとするかをもてす。白隠いはく、南泉一株花の頌もとも殊絶なりと。雲山もまたそを然りとす。大休その座に侍して之を聞き、苦思深省、憚焉として知ること能はず。自ら以爲へらく、我參禪日久しくして、而かもなほ未だ遺般の親疎優劣を辨すること能はず、何をもて人となさむやと。すてに歸途に臨み、所解を通せむと欲りし、また之を難かる。乃ち白隠の後に隨ひ、進んでその杖を捉ふるもの二三次。白隠その時機すてに熟するを知るも、故意に之を拂つて行く。大休、大に憤を發し、人家の半牀に腰かけて良久しく瞑思しけるか、忽然として省あり、眼を開けは、すてに白隠の在る所を失ふ。すなはち走せて寺に歸り、所見をもて白隠に呈す。白隠これを證す。大休こゝにおいて、凡百の言句みな親疎の分あるこ

とを知りぬ。

大休 まさに井山に歸らむとし、白隠を辭するの次、問ふていはく、如何なるか是れ第一句。白隠いはく、いろはにほへと。如何なるか是れ第二句。白隠いはく、ちりぬるをわか。大休、走て禮拜して出づ。時に東嶺侍者寮にありて之を聞く。後來、徒に謂ていはく、井山の、大休もまた麤なること甚し。當時第三句を問はずむは、幸はくは一たひ出て來れ。我これか爲めに穿鑿せむと。

大休三十歳 井山の命に依り、報恩に住して竺傳の衰老を扶く。一夕、坐して更深に至り、たま〜犬の吠ゆる聲を聞き、豁然として大悟し、従前の智見とみに脱しぬ。翌日、ゆきて井山に見ゆ。いまた一語を發するに及はざるに、井山すなはちいはく、來れ〜、我初め汝をもて北溟の物となし、その自ら化するを待つこと、茲に久しかりき。時なるかな、吾爾に隱さす、正法眼藏、今や汝に付與し了りぬと。大休たゞ黙々として、三拜を消ふるのみ。

大休 天資至孝にして、その竺傳に事ふるや、夙に興き夜に寐ね、春炊調和に至るまで、みな自ら之を辨し、つゆ倦む色なし。道俗、大休の行を見て、前非を悔むて面を

革むる者太た多かりきとそ。

大休 垂語していはく、すてに是れ大活現前、甚に因て透脱すること能はさると。會中その機に契ふ者なし。大休ふかく慨嘆す。

大休 六十歳の春、疾あり、遂に傳戒相承信衣およびその的々祖系を大雲に付す。病革るに及びて、侍僧ら、末後の句を乞ふ。大休、威を振つて、悦懌の色をなし、微笑眼を聞きて之に示し、湛然として坐化しぬ。

池大雅 (臨濟)

名は無名、字は貸成、秋平と稱し、大雅と號す。別に霞樵、九霞山樵、三岳道者の號あり。心を禪要に寄せて、白隠に參す。安永五年歿す、世壽五十又四。

大雅 白隠に參して、つひに隻手の聲を聞くことを得たり。すなはち一偈を打して白隠に呈す、いはく、耳豈得聞隻手響。耳能沒了尙存心。心能沒了尙難得。却識師恩不識深。

大雅 また遂翁に參し、道契もとも深し。遂翁の書を善くするは、實に之を大雅

に學ひたるなりと云ふ。

明庵 (曹洞)

諱は啓了、明庵と號す。俗姓は田中氏、遠江國周智郡の人なり。幼にして、安樂の眞嶠に投して、苑染し、寶壽の大梅に參し、のち鐵文に嗣ぎ、耕雲、善勝に住し、安永八年八月二日化す。世壽七十又五、法臘六十又八。

明庵 寶壽大梅の法席太た盛なるを聞き、ゆきて之に參す。一日、大梅、壁間の畫牡丹を指して問ふていはく、汝未生以前の時かつて這箇を見るやいなや。明庵、答ふること能はず。大梅、之を喚ふ。明庵、應諾す。大梅、いはく、感する底、變。明庵、また答ふることなし。大梅、喝出す。鐵文、之を激していはく、古人言へるあり、二乗は、精進にして道心なし。外道は、聰明にして智慧なし。是れ汝の謂なり。明庵、これよりいよ、憤發して、寢食ともに廢す。一日また入室す。大梅、すなはち問ふ、父母未生の時、試に一句を道へ、看む。明庵、いはく、道はむと擬すれば、即ち乖く。大梅、之を喚ふ。明庵、應諾す。大梅、良久しうして、又喚ふ。明庵、應諾するに當り、忽然とし

て省あり。いはく、某甲會せり。大梅問ふ、作麼生か會す。明庵いはく、老師、人を説くことなくむは好し。大梅また問ふ、作麼生か祖師西來意。明庵、一喝す。大梅いはく、未だ、更に道へ。明庵すなはち禮拜す。鐵文、傍に在ていはく、敢て保す、師弟未徹在。明庵いはく、何處か是れ未徹在。鐵文、遂に問ふ、大庾嶺頭、趁得て衣鉢に及ぶ、甚麼としてか提不起なる。明庵いはく、此は是れ人を欺くの語なり。鐵文、叱していはく、誠に知る汝未徹、佛法もし此のことくなれば、何ぞ今日に至ることを得む。明庵、沈吟す。大梅いはく、汝會せむと要せば、鐵文に問取し去れ。明庵、乃ち問ふ、その聲いまた絶えざるに、鐵文、威を振つて一喝す。明庵、當下に大徹し、これより機鋒捷俊にして、能く之に當る者なかりき。

明庵 一日、竹水庵主を訪ふ。たま／＼竹水の庭にありて柴を破るに會す。明庵、纒かに見て、便ち問ふ、有るや。顧眄せず。明庵、拄杖をもて、その背上当つて打つこと一下す。竹水、斧を揮つていはく、甚の處よりか來て、這の虚頭を作すや。明庵、また打つこと一下す。竹水、手を携へて庵に歸る。既にして、明庵、まことに辭し去らむとす。竹水、之を喚ふ。明庵、首を回す。竹水いはく、拄杖子を持ち去るや、未

たしや。明庵、笠子をもて輪を作る。竹水いはく、若し持ち去らば、則ち奪却せむ、もし持ち去らざれば、何を以てか受用せむ。明庵、乃ち笠子を戴て去る。竹水、いはく、作家々々。明庵、歸りて之を雪庵に舉示す。雪庵いはく、是なることは、則ち是、不借許。明庵いはく、作家の相見、何の是、不是か之れあらむ。鐵文、傍に在ていはく、有ることは、則ち有り、汝か會する所にあらす。明庵、つひに雪庵に問ふ、雪庵いはく、若し是れ達磨門下の客ならば、飯に墮つと雖も、首を回さす。竹水、たとひ、掣電の機あるも、之を奈何ともすることなしと。明庵、此において服膺す。

享保己酉 宗福の鐵文、明庵を延て第一座とす。因に快鞭問ふ、傍分帝命、爲傳持。萬里山河布改威。師兄、今夏分座、未審、何を以て法城を鎮護す。明庵いはく、横按、鎮鄒居闔外。當鋒、誰敢侵重圍。快鞭いはく、若し銅頭鐵額の漢ありて、鎮鄒を奪得し、重圍を掀翻する時、作麼生。明庵いはく、鉗鎚を動かさず、腦門を破裂せむ。快鞭いはく、即今出來、如何か祇對せむ。明庵いはく、頭腦すでに破裂し了れり。快鞭いはく、好箇の消息、誰か敢て鋒に當らむ。明庵すなはち耳を掩ふ。

明庵 峨山四百年忌に値て、偈あり、いはく、及第高登、選佛場。九天屢降紫泥章。

梧桐枝上由來別。五五哲人皆鳳凰。

明庵 晩に信州貞祥の地藏庵に住す。義秀出て、迎へ、便ち問ふ、山河不隔越。光明處處通。老和尚、即今、此の間に臨む底の一句作麼生。明庵いはく、老來殊覺山中好。死在巖根骨也清。

月船 (臨濟)

諱は禪慧、月船と號す、奥州田村郡小野村の人なり。幼にして、高乾院北禪に投し、法を東溪につき、天明年六月十二日化す、世壽八十。

月船 東溪の法を得て、高乾に住すること十年、去つて武州永田の東輝庵に住す。これより深く自ら韜晦し、迹を村民に混す。おほよそ里中子弟の教ふべき者、文藝道學、おのゝその志尙に因つて之を導き、知らず識らず佛法に歸依せしめき。此において、江湖の雲霧、その徳を慕ひ、陸續として來り參し、悉く容るゝこと能はず、乃ち庵の隣近三四里の間において、農屋あるは牛舎などを借りて、日夜參究するに至りき。物先、誠拙のときは、即ちその巨擘なり。

鐵文 (曹洞)

法諱は道樹、鐵文と號す。別に天地庵と稱す。俗姓は湯淺氏、三河國設樂郡古戸村の人なり。八歳にして、駿河國阪本林叟の九淵に投して出家し、古岳、全國に參し、遂に默子の法をつぎて圓通に住す。頑極と共に默子門下の神足たり。

鐵文 十五歳より秀道の曉翁に侍す。一日、曉翁、鐵文を顧みて曰く、參禪の一著子は、須らく郷關を離れ、朋友を覚め、知識を尋ねへし。汝は大膽の器なり、虚しく此に滞ることなかれと。鐵文これより激發し、一夜ひそかに九淵寢室の外に就て九拜して、自ら誓ふて曰く、生死大事を了せずは、再ひ此の山に歸らすと、促裝して山を出て、勢厩および熊野の祠に詣うて、大事了畢を祈り、近江の清涼に抵りて、全國に侍し、單提に力參す。

享保己酉の春 鐵文肥前の伊萬里にゆきて、默子に休々庵に投す。心に自ら誓つていへらく、大事を決擇すること未了なれば、此門を出てすとて、拄杖を拗折して咨詢し、日間は作務行乞、水を運ひ、柴を搬ひ、夜間には、靜坐提撕す。默子の提携、一

向他の公案に依らしめず、只管に打坐せしむ。問著すれば、只道ふ、且つ緩々地なれ、眞を求むへからず、妄を除くへからずと。鐵文、心頭穩ならず、煩惱うたゝ闢し。ある時、默子、團扇に箇の因縁を書して與へて曰く、雲門因召直歲。爲甚麼。歲曰。山上刈茅來。門曰。刈得幾箇祖師。歲曰。三百箇。門曰。朝打三千暮八百。東家杓柄長。西家杓柄短。作麼生。歲無對。汝須らく直歲に代つて、雲門兩處の間に著語せよ。鐵文曰く、某甲、省力の處なし。縦し著語するも、意識の註述なり。默子曰く、賊を過くの梯となつて著語せよ。鐵文曰く、初問の處、通身無影像。後問の處、賊不打貧家門。默子笑つて曰く、靴を隔て、痒を掻く。遠くしてうたゝ遠し。鐵文、立て拜し、直歲に代つて兩處の答を乞ふ。默子曰く、我もし直歲ならば、初問の處、茅鎌子を擲つて便ち坐せむ。後問の處、茅鎌子を取つて出て去らむ。鐵文曰く、初問の處、某甲思ふ、用を捨て體に就く。後問の處、措くことなし。默子叱して曰く、初問の處、汝争てか會せむ。なほ雲泥を隔つることあり。鐵文これより日夜煩悶す。一夕たまゝ衆と喫藥の次、覺えす失語していはく、奈何せむ、與麼に喫却して、信施如何か消得せむ。隣位に風外禪者なるものあり、之を聞きて曰く、喫する底のもの

を識得せば、何ぞ信施を愁とせむや。鐵文曰く、識得底の者といへとも、信施を消すことは、吾信し難し。風外、直ちに一掌す。鐵文、憤然として、湯盞を壁上に抛向して、起つて僧堂に歸り、風外と言語せさること六十餘日に及ぶ。默子叱して曰く、伊、爾か爲めに警策す。何ぞ言語せさるぞ。鐵文、服せすして曰く、一旦、著力の分あらは、須らく打殺すへしと、日夜寢食を忘れ、その心恰かも酔へるかとし。七月十三日の夜、蒲團を櫻樹下の石に移し、黄昏より五更に至り、困して覺えす倒に落つ。その直下に茅鎌子を抛つて坐する處、出て去る處を知り、尋常疑著的話頭、女子出定、趙州無字、一時に明了し、方丈に至りて之を呈す。默子、一々穿却して曰く、汝入門の一句を得たり。須らく向上の事を識得すへしと、微笑して休す。鐵文、女子出定の頌を呈して曰く、七佛師難出定。罔明彈指未曾知。佳人勿怪坐場屋。八臂三頭爭奈伊。こゝにおいて、風外の處に到りて、坐具を展へて懺謝して曰く、老兄の激發あるにわらすんは、争てか今日の事あらむ。前には錯つて打殺せむと思ひき。上座は實に某甲か善知識なりと。風外、雙眼に涙を揮つて曰く、某甲、晚戒如何ぞ人我を逞うして上座を打つへき。上座覺えす失語す。工夫のすてに胸に逼るを見て、聊

か精彩を扶くるのみと。時に鐵文の年二十なりきといふ。

享保十四年の秋 鐵文長崎に抵りて、皓臺の古岳に相見して問ふ、記得す、芭蕉情禪師、衆に示めして曰く、汝に拄杖子あらは、汝に拄杖子を與へむ。この意旨如何、古岳曰く、山僧耳聾すること久し。また問ふ、汝に拄杖子なくむは、汝か拄杖子を奪はむ。意、那裡にあるや。古岳曰く、虚空開口。鐵文曰く、拄杖子未だ拈出せざる已前、請ふ和尚道へ。古岳曰く、山河大地不覆藏。鐵文曰く、恁麼ならば、和尚の拄杖子、某甲か手裡にあり。古岳曰く、拄杖子長さこと多少ぞ。鐵文、拂袖して出てひと擬す。古岳曰く、汝未だ拄杖子を得ず。鐵文曰く、謹て證明を謝すと云つて、禮拜して偈を呈して曰く、一條拄杖黒如漆。大小芭蕉不惜眉。添得山河兼大地。分明兩老落便宜。また、布鼓當軒西海隈。怒電吼月徹皓臺。須彌槌子未拈起。拂袖夜明簾外來。古岳詰問數番。鐵文、禮辭せずして去る。

鐵文 また平戸の松浦に抵りて、瑞光の默堂に謁す。默堂は、黃葉三世惠林の神足にして、雪頂龍眉、八旬の老古錮なり。鐵文、偈を呈して曰く、龍象仰瞻老古仙。風光嫩富玉壺天。黃金籃裡盛春光。鶴髮弊衣入市廓。默堂、一看して、直ちに毫を染

めて曰く、學道先須學筆仙。勸君坐井勿觀天。禪非坐臥活三昧。聲色堆中與闍鄰。默堂曰く、汝曾て女子出定の話を看るや。鐵文すなはち偈を呈す。默堂、看て笏を舞はして曰く、出得不出得、老僧手裡の笏兒、何に憑て總に知らず。鐵文、聲に和して曰く、風流不在著衣多。默堂曰く、作麼生か道へ、女子定理事。鐵文曰く、老大宗師、今日、敗闕を納れ盡す。默堂、微々として笑ふ。鐵文、瑞光に留ること數日、親しく垂誨を領すといふ。

享保辛亥の春 鐵文、默子を多久原の野水庵に辭す。別に臨て、默子、一圓相を書して頂相に充て、贊して曰く、圓陀陀地。水綠山青。道根得擇。鐵樹花馨。鐵文、涙を包みて庵を出つ。時に年二十二なりき。

鐵文 再び清涼にゆきて、全國に謁し、その巾瓶に侍す。全國茶話にいはいく、禪僧分上、日用功中、須らく生死自在の分あるへし。汝三歳にして、法兄默子淵公に侍す、却て知るや。鐵文、便ち問ふ、如何か是れ生。全國、兩手を展す。曰く、如何か是れ死。全國また又手當胸。鐵文曰く、和尚は是某甲は不恁麼。全國問ふ、如何か是れ生。鐵文、又手當胸。全國問ふ、如何か是れ死。鐵文、兩手を展開して、蒜口に推倒す。全

國曰く汝脚跟いまた地に點せさることあり。鐵文伏せず起單して出て去る。

元文丁巳の中秋 一日鐵文、窓を開きて冥坐し、忽然として多福一雙竹の話に撞著し、誦詠節角あることを會得して、始めて默子か棒頭の痛痒を知ることを得たり。因て遙に望て、焼香禮拜して恩を謝す。従前所看了底の話頭を打するに、如今の所見と太た霄壤なり。今日より佛に入り、魔に入り、生死の岐に處して、遊戯三昧なるを得たり。實に鐵文年二十八なりき。

寛保元年十月二十九日 鐵文、西明寺に入りて默子を拜す。默子、石頭、南

岳に使したる時の話を舉して曰く、諸聖を慕はす、己靈を重せさる時如何、曰く、只た一雙の眉あり垂下す。鐵文、禮拜して曰く、鯨飲盡海水。露出珊瑚枝。默子、點頭して入室を命し、偈を付して曰く、青石筈、袋閉鉗斧。親曾四十二傳來。那邊磨去勿成用。且喜禪牀埋却埃。

鐵文 三轉語を以て學者に開示す、曰く、六街未剖。誰是天子。金輪珍御最尊貴。貴胤從來不風功。祕殿夜深無侍立。紫羅帳合月明中。到門客放下工夫來。昔年未到工夫熟。撲碎虛空來者難。鶴臭布衫須脫却。將魚目換眼睛看。主人憑底。

不居室内。假借本來常住錢。自家鳥自家穿。脚跟未點祖翁地。消息依然終不全。鐵文 道詠あり。遍界一息、出入ると思ふ心の路斷て何といふへき言の葉もなし。出息、出さるも入りくる息も主はなし吾とまことをわきまへてみよ。入息、むかし今別る、路もおのつから旅路の里に心とむるな。知長短、長みしか分つる主を尋ね見よ餘所にはあらしおのか面影。

遂翁 (臨濟)

舊名慧牧、のち元慮と改む、遂翁はその號なり。また別に浮島と號す。野州の人なり。白隠に松蔭に參して、玄微を吸盡し、その法をつぎて松蔭に住す。寛政元年十二月二十日化す。世壽七十三歳、法臘いまた詳ならず。教して特に有惠妙顯禪師の號を賜ふ。

鶴林下に之を稱す、いはく、大器遂翁、微細東嶺と、鶴林の道よく天下にひろこりたるもの、實に遂翁、東嶺二師か副貳轉化の功に由らすむはあるへからず。されは、二師の鶴林におけるはなほ靈龜氏の大雄氏におけるかとし。

遂翁 年三十餘にして、始めて白隠に松蔭に見ゆ。白隠その志氣のよのつねならざるを見て、痛く鉗鎚を下す。その禪室に參するは、必ず深夜においてするをもて、能くその蹤跡を見る者なし。鶴林の門下にあること、おはよそ二十年、昂々藏々として衆中に陸沈し、葦原の西青島に庵居す。松蔭を去ること三十餘里、講日にあらざるよりは、いまた曾て松蔭の門に入らず、講をはれば、また直ちに歸り去る。ある日白隠たましく、遂翁を召す、侍者之を尋ねるも得ず、或ひはいふ、慧牧すてに去ると、侍者すなはち追ふて告げて曰く、老和尚召し給ふ、速に來れと、遂翁いふ、和尚は召すとも、我は召さすとして、袖を拂つて去りぬ。

遂翁 天資卓犖にして、太た酒を嗜み、細事にかゝつらはす、言行おほくは繩墨の外に逸出す。居恆甚た坐禪せず、また甚た看經せず、これと定めたる居もなく、到處に脚を伸へて臥し、一酔もて自ら快とし、碁と書とを好み、優遊自得す。その簡傲おほむねこの類なり。是をもて人得てその深淺を測ることなかりきといふ。

白隠 の桑名天祥の請に赴くや、遂翁もまた之に従ふ。歸る時、七里の渡において石尤風おこりて船を覆し、一船の人みな沈溺す。師心に以惟へらく、海底に沈む

こと幾んど數百仞と。忽ち人の手もて捧け上くるかことく、波間に浮ふ。時に釣舸ありて之を救ひ、幸に死せざることを得たりとぞ。

白隠 年八十に達す。輪下の龍象ら相議して大應錄會を設け、遂翁を推して、その副司たらしめき。時に遂翁疾ありけるか、強ひて起つて座に上る、一會七百衆、また一時の盛を極む。散筵に及ぶ頃、東嶺、遂翁を推して副とす、白隠を領し、遂翁もまた許しき。東嶺よて偈もて賀していはく、南嶽三生藏老僧。黃梅七百衆、虛能傳衣事、畢績芳燭。且喜松蔭留慧燈。遂翁此において、籍を華園に挂く。

遂翁 の華園に在る時、僧あり、問ふに其の醉翁と號する所以をもてす。遂翁いはく、他なし、我太た酒を嗜む故に、自ら號するのみと。僧いふ、また甚しからずや、醉に易ふに遂をもてせは如何と。遂翁いはく、また可なりと、よて更めて遂翁と號す。

遂翁 轉版の後、浪華に遊び、臘月におよびて松蔭に歸る。偈ありいはく、明和九年六月旦。微笑塔前攀舊規。臘月歸來住破院。空却業風一任吹。

遂翁 白隠と同居することを欲せず、葦原に通れて索居すること三年。白隠の疾革かなるにおよびて、歸てその側に侍す。白隠遷化し、遂翁その後をつぎて住し

き。されど、事を事とせず、放逸自如なり。來りて參叩する者あれば、すなはちいはく、余何をか識らむや、去つて東嶺に參せよとて、竟に一言を出して人に示さず、口を杜ちて宛も臘月の扇子のごとし。然れども衲子の隨ふ者、つねに七八十人に下らす。示誨を乞ふ者あれば、すなはち曰く、東嶺に參し去れと。是において大休、靈源しはく、書を寄せ、遂翁をして起たしむれとも、自若として動かす。時に大休は井山より、靈源は天龍より、東嶺は龍澤よりおのゝ來り會し、遂翁を勸めて白隱の七年忌を修めしむ。遂翁やむことを得ずして起ち、參詳語要を提唱す、合衆二百餘。この時、遂翁の年方さに五十又八なりき。これより門庭市を成し、衲子百餘人、東西に庵居し、應接に違あらず、請に他方に赴くに、徒衆或ひは三百、或ひは五百、到る處に群を成す、實に白隱の嗣たるに愧ぢず。

白隱 の十七年忌に丁りて、松源録會を設く。衆おほよそ八百餘。快岩、東嶺、峨山らともに來りて化を助く。遂翁、拈香の略にいはいはく、十七年前胡亂去。到頭未免破沙盆。遂翁、衆に謂ていはいはく、快岩和尚この會に臨まることが辱うす。和尚の我が老漢における、もとも舊參たり。今夜よろしく衆を擧て小參を請ふへしと。此

において、宿諱了て、快岩、座に登り、大衆に謂ていはいはく、諸大徳、山僧をして什麼事を説かしめむと欲りするや。堂頭、遂翁和尚、日々法施を行して、衆をして厭厭せしむ。山僧孤貧よく、大衆に供養すへきものなし、然りと雖も、すてにこの座に登り、いかて緘黙して止むへけむや、幸に一件の事あり、これ大衆に告報すへしとて、よつて快岩か大休と共に初め白隱に相見したる時の事を語りき。

遂翁 遠州大通の請に應じて、人天眼目を提唱す。おほよそ七百餘衆。開筵の偈にいはいはく、五宗各要到其源。尋派逐流吾不論。瞎却人天雙眼目。須酬佛祖大深恩。

遂翁 また清見の請に應じて、碧岩録を講す、四百餘衆あり。たまゝ讀岐の竺源來り謁し、いはいはく、和尚もし開講の偈あらは、我その韻を和さむ。遂翁いふ、偈なし。竺源よつて代り作つていはいはく、雪上加霜勸巴子。錦上鋪花朵罵天。強被鵝林知住處。舍花鳥在碧岩前。遂翁一讀善と稱す。

遂翁 晩年、沼津永明の請に應じて、五祖録を提唱す。偈にいはいはく、曾向破頭山下栽。青青千本勢崔嵬。清風十里起濤去。須出松關看一回。

遂翁 因に琉球の僧來り參す、遂翁示すに隻手の話をもてす。僧居ること三年、期満ちてまさに郷に歸らむとす。遂翁に見えて涕泣していはく、某遠く海を涉り、この土に來りて大法を求む。恨む所は宿習いまた混ひすして、發明するに由なし。空く故郷に歸りて舊面皮を呈するは、良に歎すへきの極みなりと。遂翁これを憫み、慰め且つは諭していはく、汝且つ歎すること勿れ。たゞ速に去り、打坐すること七日せよ。僧去りて教の如くす。七日を経て、また來りていはく、某なは得る所なし、老師の方便を乞ふと。遂翁いふ、汝また去て坐すること、七日せよ、必ず透過の分あらむ。僧去て教の如くしまた復た來りて云ふ、某なは得る所なし、願はくは老師方便せよ。遂翁いはく、古人、得道を三七日の内においてす。汝たゞ去つて更に打坐すること七日せよ。僧すてに坐念すること三七日、些子の得力なし、來りて遂翁に謁し、歎息して泣く。遂翁いはく、我に者の方便あり、汝更に去つて坐すること五日せよ。僧また去つて教の如くす。五日を経てまた來る。遂翁いはく、如何。僧いふ、舊の如し。遂翁いはく、汝慙麼地ならば、徹し去ること能はず、宜く急切に究め將ち去るへし。三日の後もしいまた徹了せずは、即ち死し去れと。僧此に至り

て、始めて身命を抛ちて工夫を下し、三日にして、果して隻手を透過し、來りて遂翁に見ゆ。遂翁喜ひて之を印す。僧のち嗣法の書を通すと云ふ。

遂翁 よのつね衆に示していはく、古人云ふ、寧ろ緩に失するも、急に失するなかれと。我は則ち然らず、寧ろ急に失するも、緩に失するなかれ。また曰く、汝等、委々隨々地なることなかれ、者簡淡ありて、如何々と究め將ち去らば、一夕二夕に便ち徹し去らむ。また曰く、諸方は整々齊々として、威儀則るへし。我か者裡は、象目猿鼻、脚毛なし。吸計看經しよくかんぎん彌左衛門、什麼の用をか作すに堪へむや。

遂翁 かつて池大雅をして、雪竇の頌に據て、新に山水の圖を作らしむ。大雅、手に信せて揮灑し、邃林幽石、雲を帯ひ、水を環らし、淡然、森々乎、蕚々乎として、風致極めて多し。且つ隸もてそかに題していはく、圖書當年愛洞庭。波心七十二峰青。而今高臥思前事。添得廬公倚石屏。棘園妙喜いふ、余かつて松蔭において之を観る。因つて念ふ、翁の名を元廬と改めしは、蓋し雪竇を慕ふか爲めなりと。樞首座 かつて雪竇の圖を遂翁に乞ふ。遂翁寫して之に與ふ。その圖、太た遂翁と似たり。因つて遂翁の歿後、之を松蔭に留めて、遂翁の肖像となしき。

遂翁 園基の圖を書き、自らそか上に題していはく、聞説本因坊。園基天下強。皆言無敵手。它日奈閣王。こは、豆州仙人に示すものと云ふ。

遂翁 かつて請に梁田蛻巖の家に赴く。蛻巖、遂翁を堂上に延きて僧に閑談す。時に蛻巖の子年十五六はかりなりけるか、まさに他に行かむとして、蛻巖の前に頼つきぬ。遂翁そを視て首肯す。その子憤然としていはく、我は吾か父に禮するのみ。何ぞ浮圖を禮することをせむや。遂翁すなはち蛻巖の背を撫ていはく、尊尊兒なるかなと。蛻巖、他日、人に謂て云ふ、鶴林は、眞の善知識なり、世に阿らすは、た人に誚はす。遂翁は世間僧のみと。のち棘園妙喜この事を擧ていはく、噫、蛻巖は、區區たる一儒生のみ。白隠は、怒雷の石壁を劈くかごとく、遂翁は、兜羅綿の手をもてその頂を摩するかごとし。蛻巖かこときは、道同しからされは、相爲めに謀らざるものなり。

遂翁いはく かつて我か鶴林老漢に従ひ、悉く屋裡の法財を奪卻し了る者は、東嶺一人のみ。ふかく法源に徹する者は、大休一人のみと。

遂翁またいはく およそ臂を振つて天下を横行する衲子と雖も、吾か鶴林

老漢の室内に入るに及びて、直に得たり、手忙く脚亂れて、伎倆頓に盡ることは、何そや。荆棘參天、蒺藜滿地、進むことを得ず、退くことを得ず。是の故に、一向に旗を掲ぎ鼓を奪ひ將ち去られて、胃を免て下る。是れ他なし、已むことを得されはなり。他家の叢林、者の荆棘あることなし。是をもて、衲子臂を振て過く、遂に一箇半箇を絆倒すること能はず、宜へなるかなと。

寛政己酉の夏 我山、天澤山にありて碧岩録を提唱す。遂翁まさに病を力めて往かむとす。衆之を止む。遂翁いはく、これ宗盟なりとて。遂に往く。歸途、暑に中りて臥す。十二月二十日、侍者ら、遺偈を乞ふ。遂翁之を叱す。二たひ請ふに及びて、乃ち筆を索めて書していはく、欺瞞佛祖。七十三歳。未後一句。什麼々々。喝。目を斂め、側臥して寂す。

無學 (臨濟)

諱は宗衍、無學と號し、別に把不住と稱す。龍門の法をつぎて龍寶山を董し、また東海寺輪番職たり。後櫻町天皇、敕して、至聖大妙禪師の徽號を賜ふ。寛政三年

正月十六日化す。

無學 かつて自ら老狸腹鼓の圖を描き、そかに題していはく、そもくこれは八疊にすむ隠居にて候。わかしゆとも化て候へとも、いとまゝをして歸る山の山のおもしろ狸のはらつゝみ、うちをさめてこそうせにける、いささらは化されぬ間に歸るへしあなおそろしの人の世の中。

無學 また茶事を嗜む。つねにその徒に示していはく、茶味禪味。禪味茶味。是什麼。

素銳 (曹洞)

諱は俊乘、素銳と號す。俗姓は石井氏、越後國中頸城郡直江津中島の人なり。甫めて十歳、雲門寺灯外に投して、難染し、遂にその法を繼ぎて雲門に住す。寛政三年七月十五日、化す、世壽六十又五、法臘五十又四。

素銳 年三十七、灯外の後を承けて雲門に住す。完戒上堂に、雖猫兒虎面玉石相投。悉是放光動地。傍分閻裡緇素之寶珠。投水石子玉針。未至妙。論丹霞掩耳。

高禪不登壇。尙此一隅所轉也。佛祖傳來正戒者。離卻語默。一切時中。不取不捨。如不見一法。是則本根自性淨戒。老僧至此彫珠眇眼。雖然恁麼。本根自性淨戒。如不真不善惡因果。則何如領取。の語あり。

素銳 瑞鳳山偶懷にいはく、禪林煙雨深。殘雪消塵心。君掃綠苔坐。我向桃李吟。壁掛兆殿司。樓布燕丹金。瑞鳳出山穴。到今聞妙音。また林泉寺口詠にいはく、蕭條勝利絕塵緣。梵祇齊齊公案圓。衣內包香春日頂。鉢盂汲月古林泉。留趾門外曼殊慧。推位樓臺身子禪。坐聞爽籟流水鼓。怨奈洞上普秋天。

素銳 滅に臨みて、也太奇奇。六十五年。吞卻無生無盡藏。寰下無跡普遍界。咄。書し了り、從容として坐化す。

東嶺 (臨濟)

名は圓慈、東嶺と號す、近江國の人なり。始め古月に參し、のち白隱の毒手に觸れて大事を了畢す。龍澤を開き、白隱を仰て開祖とし、自ら第二世に居る。寛政四年閏二月十九日化す。世壽七十二。

東嶺は、遂翁と共に鶴林門下の二大神足にして、大に化を揚げ道俗を度す。朝廷特に救して佛護神照禪師の號を賜ふ。

東嶺 白隱に見えて侍者となり、數年にして、悉くその室内の事を參得す。その辛鍊苦修、遂に病を發し、百藥效なく、殆と死に瀕す。自ら謂へらく、我すてに宗趣を究むと雖も、一旦溢死せば、何そ法門に益あらむやと、よつて宗門無盡灯論を著はし、そを白隱に呈していはく、這の中もし探るべきものあらは、まさに之を後世に貽さむとす。はた杜撰ならば、速に丙丁に投せむのみと。白隱一見していはく、こは、後世點眼の藥となすへしと。

東嶺 白隱を辭して京に行き、關を白河の邊に掩ふて、たゞ病を養ひ、死もまた得たり、生もまた得たり、任運自在、靜に時光を消す。かくて一日、無心の中より白隱平生の受用底を徹見し、此れよりその病もまた自ら安し、歡喜に堪へず、書を馳せて、その由を白隱に報す。白隱、書を得て、大に喜び、書を與へて東嶺を召す。東嶺すなはち急に歸り來りて謁す。白隱、法衣を出し、付與していはく、この金襴衣は、我がかつて之を著て、四たひ碧岩錄を講す。今これを汝に傳ふ、宜しく後世をして斷絶せしむ

ることなかれと。東嶺、頂戴して之を受く。此れより、師資商論して、宗旨を建立す。五位十重禁等の微細の穿鑿は、東嶺もとも懋めたりとす。是を以て、天下の叢林の士、大器遂翁、微細東嶺を併せ稱しぬ。白隱、晩年に至りて、氣力やうやく衰ふるや。東嶺力めて學者を鞭勵す。おほよそ晩年從事する所の者、その得力多くは、華鹵なり。然かはわれと、峨山、頑極の諸子みな東嶺の穿鑿に與かりたるをもて、太た瞥脱なりき。

白隱 八十四歳の時、京都の等持の請あり。然るに當時老病殊に甚しきをもて、東嶺代つて之に赴き、人天眼目を提唱す。合衆四百餘、大に鶴林の宗風を振ふ。この會いまた畢らざるに、白隱の訃至りき。東嶺、解制を待つて、直ちに松蔭に歸り、遂翁と共に葬事を行ひき。

等持支院の小僧あり 年十七八なりけるか、密かに北野の妓に通し、情交太た密なり。たま〜院主の他に行きたる間を伺ひ、百金を偷みて、それを囊中に納め、一夜、妓を携へて走り、伏見より船を買ひ、大阪に著きたる時、懷を探るに金を得ず。よつて思へらく、夜來、囊を柱釘に掛けおきたるを遺れたるものならむと、いたく望

を失ひ、遂に妓と共に樹に縊れて死しぬ。その夜、支院の側室に啼泣の聲ありて云ふ、我が囊の此に掛けおきつるか、いつちに失せけむとて、手もて柱釘を撫て、壁あるは梁などを摸索して啼く、間また女子の啼く聲も交れり。これより後、夜ことに此の如く、その凄怨の状、喩ふるに物なく、聞く者みな魂を失ひ、遂に一院閑として人なきに至りぬ。時に東嶺まさに等持に行かむとす。客あり、その状をもて東嶺に告ぐ。東嶺いはく、傷むことなかれ、我その室に居らむと、東嶺行くに及ひて、幽霊頓に失せて出てす。ある夜、東嶺別請に赴く、三河の昌禪人といふ者あり、侍者たり、また有力の士なり、因つて之か留守をなしけるに、忽ち一女の髪容のかかり最と艶やかなるか、昌禪人の前に額つきて、妾願ありて、これまてはまゐりつれと云ふ。昌いはく、速に汝か願を告げよ。いはく、妾はうつせみの人にあらず、金を遺るゝの故をもて、浪華に縊れて亡せ侍へるか、今に至るまでも、いまた苦輪を脱ること能はず。願ふは、大善知識の濟度をうけて成佛せむと欲す。妾か爲めに、この由を東嶺大和尚に願ふてよと、さめくと打泣けり。昌いはく、然らば、汝いかてか自ら之を願はさるや。女いふ、和尚の徳太た高くして、いやしき妾のえ近つきかたきをいかにせむ。

昌すなはち諾し、之を東嶺に告ぐ。東嶺これを憐み、念經の次、淨水を設けて、水陸會の法を修す。此において、女の幽霊また出てすと云ふ。のち昌禪人不幸にして早世す、東嶺痛く之を惜み、きと云ふ。

東嶺 かつて夏を江戸の東北庵に過し、虛堂録を講す。乾峰法身三種病に至りて、便ちいはく、この一段の因縁、實に格外たり。今日且く置かむ。聞く、峩山和尚、解制の後、永田より來ると、那時これを講せむのみ。峩山來るに及ひて、東嶺之を講するに、大に他日に異なりきといふ。

東嶺 また東北庵にありて、碧岩録を提唱す。第三則に至り、擧揚していはく、日月面佛、月面佛と。時に柴田元養の母氏年六十あまりなるか、座下にありて之を聞き、胸宇これか爲めに豁如たり。講をはりて、見解を東嶺に呈す、東嶺大に之を喜ぶ。のち母氏歿するに臨て、その女孫を誡めていはく、汝いとけなき者なりと雖も、宜しく佛乘に歸依すへし。我がかつて東嶺和尚の日月面佛、月面佛を擧するを聞き、一旦開悟し、直ちに今に至るまで、胸中すかしく、また一點の塵滓なく、明なること鏡のことし。即今死し去るも、安然として歸するかことく、また何の患ふることあらむ

や。汝もし佛乘に歸依せずは、吾か女孫にあらず、よく記取せよと、言終り、泊然として化しぬ。

江戸の俳人 雪中庵蓼太かつて白隠に松蔭に相見し、のちまた龍澤に來り、東嶺に謁して垂示を乞ふ。東嶺すなはち俳句を題して之に與ふ、いはく、飛込んだ力てうかふ蛙かな。蓼太、此において力を得る所あり、誠を傾けて歸敬す。

白隠遷化の後 龍澤火を失して烏有となるや、東嶺衆を率ゐて、江戸の至道庵に遁居す。此において、龍澤頓に寂寞たり。遂翁よつて住庵の諸子に命していはく、先師の三周忌すてに近きに在り、汝ら宜しく力を戮して、法會を成辨すへし、遂に龍澤に赴く、諸子もまた隨ふて行く。遂翁、日々衆を率ゐて作務し、自ら舊方丈の前なる石上に坐して、衆を指揮し、舊址に就きて芽を縛し、日ならずして成る。その中間に一の大柱を樹つ、四面廣くして、衆五六百を容るゝに足れり。けたし、法堂を兼ねたるなり。近郷の檀信この事を聞き、おのゝ來りて營辨す。東嶺すなはち至道庵より歸りて、二たひ法柄を執つて、圓悟心要を講し、白隠の三周忌を修す、合衆二百餘。これを龍澤小屋掛の大會といふ。龍澤の再ひ叢林と成るものは、實に遂翁

の親切に輔翼するに縁るなり。

東嶺 かつて嵯峨にありて說法す。時に天寒くして、衆みな畏色あり。東嶺大喝していはく、寒を畏る者は、須らく早く俗に還るへし、禪を學ひて何かせむ。汝ら、なんそおのゝ諸を心に求めざる。魚は水中に在りて、水あることを知らず、人は妙法の裏に在りて、妙法を知らずと。時に座下に心學者中澤道二といふ者あり、東嶺のこの言を聞き、豁然として悟り、曰く、說法、吾か心を外にせず、即身成佛これなり。こゝに於いて、參前舎を聞き、衆を聚めて道を講しき。

東嶺 平生參徒に示す所の法語、和歌等あり、門人之を題して快馬鞭と云ふ、今盛に世に行はる。

滄海 (臨濟)

諱は宜運、滄海と號す。白隠に參し、日向の報恩および播磨の龍谷寺に住す。寛政六年二月二日化す。

滄海 白隠に參して省あり、日向にゆきて住山す。因つて結制、雲衲百餘人あり、

滄海、臨濟録を提唱す。散筵の後、駿河に赴き、再び白隠に參す。白隠いはく、汝かつて此の間に在りしや否や。滄海いはく、さきに和尚の慈蔭を蒙りて、直ちに如今に至りぬ。白隠いはく、汝住山、掃除の人を得たりや。滄海いはく、某甲不肖、客冬、百餘衆の請に迫られて、臨濟録を提唱せりきと。その言いまた了らざるに、白隠起つて竹籠を拈し、目を怒らし呵していはく、汝黃口の小兒、いくはくの大口を開くや。豈に容易に臨濟録を提唱すへけむや。汝更に舌を開かば、汝を打殺せむと、その聲雷のことし。滄海、叩頭して罪を謝し、また留まること三年なりきといふ。

滄海 かつて疑團の起らざるを思ひ、觸體を掌上に置いて坐す、これより工夫やうやく進みて、遂に疑團を打破すといふ。

滄海 ある時、頑極に語つていはく、鶴林に無字業、識性の事あり、我いまた之を穿鑿せず、如何。頑極、怒つていはく、汝、老々大々、なほ者去就を作す。業識性を識らむと要せば、驢年にし去れ。滄海、休し去る。

滄海 湯山普説あり、いはく、安永庚子の秋、請に都城の二嚴に應せり。一會、聊々として、臨濟の語録を提唱す。會中百餘員の龍象あり、就中、中山國の雲衲五十有餘、

誠を抽て、參扣す。其憤發激勵、今時鳥鼠啜羊の輩と大に天壤を隔つ。予始め其人と爲りを見て、大に之を喜ぶ。晝三夜四、鉗錘を惜まず、爐鞴常に熱す。此の如くなる者僅に三十日、終に乃ち霧島温泉に到りて、暫く影を休めんと欲す。偶々數十箇、後に隨ひ臭を遂ふて來り、破屋壞牀、蓬を席とし、石を坐とし、日參夜究、寢食を忘るに至る。予其志を怜み、遂に之に告げて曰く、夫れ參禪は、須く心路絶せんことを要す。妙悟は、須く祖關を透脱せんことを要とすへし。心路絶し、祖關透る時は、則ち一生參學の事畢んぬ。所以に道入、懸崖に手を撒て自ら肯て承當し、絶後に再び蘇せば、君を欺くことを得ず、若し任麼の田地に到らずして、唯一向虚頭ならば、喻へは、世に僭して自ら帝王と稱する者の如し。爭て誅滅を免るへけんや。近世邪師の輩自ら會せされは、則ち止む、却て他人を毘殺して曰く、黄蘗唾酒精の如き、是れ乃ち文字僧を破す。禪無しとは道はず、唯是れ師なしと、使ち龍頭蛇尾の會を作して、曰く後言は前言に應せずと。又臨濟半夏山に上る因縁を論するか如き、曰く師理は即ち得たり、事は即ち未し。故に謂ふ、此事を疑ふて、却廻して憂を終ふと。却て息耕禪師兩處の拈語を將て、又妄に貶刺して曰く、虛堂初め一たひ拈すと雖も、自ら

知る穩當ならざるを。故に再び取り來りて指出す。然れども、又未だ理事の處に及はすと。吁是れ何の謂そや。佛言へることあり、般若を誘する者は、拔舌犁耕塵沙劫を免れすと。蓋し預め此等の輩を誡しむる也。或は又庭前柏樹子の話を舉げて曰く、是れ乃ち心境一如底の公案、便ち合頭語を下し得て曰く、向きに謂ふ、山下の路を行くこと莫れ、果然として猿叫斷腸の聲。又人の解せざることを恐れて、自ら瞎注脚を作して曰く、猿叫は是れ境、斷腸は是れ心と忽ち這の衲僧あり。關山國師道はく、柏樹子の話に賊機あり、作麼生か會すと問は、便ち目瞠し口呿して答ふる所を知らず。其餘の瞎禿子、無眼の漢、佛祖血滴々の話を將て、世俗の閑話に及はさらしむる者、勝て敷ふ可らず。嗚呼、水潦鶴又起てり。汝輩切に須く眞正の見解を求取せんことを要すへし。他の替者、替弟子に一聯の古詩を教ふ。忽ち傍人指して是れ什麼の字そと問は、師資共に覺らず知らざるか如くなるを知らん也。老僧禪を説くことを會せされとも、唯是れ病を識る。且つ那箇か是れ病そ、有と説き空と説くは是れ病、理と説き事と説く是れ病、心と説き境と説く是れ病、拳を行し喝を下す是れ病、向上向下是れ病、平常無事是れ病、若し纒に物に依らば、悉く是れ病

ならざるはなし。妙は唯汝か懸崖に手を撒し絶後に再蘇するに在る而已。然れとも、若し大信心を起し大憤志を發するに非されば、争てか之を得ん。在昔、慈明、汾陽に參す。北地の苦寒、諸人忍ひすして棄て去る。慈明、晝夜を分たす打坐し、睡魔纒に來れば、即ち錐を以て股を刺して曰く、古人刻苦して證を取る、光明必ず盛大なり。我れ生きて時に益なく、死して人に知られず、如何々々と、如此者三四年、終に汾州の野狐窟を踏翻して、西河の獅子と稱せらる。又竹原菴、正宗元、妙喜に徑山に參す。晝夜無字の話を提撕して、寢食共に廢す。或時雨に打たれ、欄干の邊に在りて坐す、兄弟之を見て曰く、元兄雨りて偏を打濕し了れりと、之を拽けとも覺らず、如此者四十餘日、終に打發して名を後世に揚く。看よ、古人道を求むるの親切是の如し。喩へは燧を鑽りて火を取るか如く、轉た鑽れば轉た輝く、汝等唯悟の遲きを憂へずして、工夫の續かざるを憂へよ。死して活せざるを憂へずして、活して死せざるを憂へよ。只管身を摘み枝を尋ね、句を逐ひ世に隨ふは、何の目か入處の分あらん。所以に道ふ門より入るものは、是れ家珍ならず。須く自己の胸襟より流出して、蓋天地、始めて得へし。越に一則の古話あり、汝諸人に舉示せん。一行脚僧あり、渡下

船の既に岸を離るゝに逢ひて、大に喚て曰く、且く請ふ船を還せと。座主あり、時に船尾に在り、答へて曰く、上人は是れ達磨宗なること無らんや。曰く是。座主曰く、何そ蘆に乗りて渡り去らざる。曰く、蘆を出して將ち來れ、汝か爲めに渡らん。座主茫然たり。汝若し難透の重關を打破し、實に證據し得て分明ならば、則ち一蘆子を出して這僧を渡らしむる。豈に難爲ならんや。所以に參は須く實參なるへし、悟は須く實悟なるへし。各自に力を著けよ。珍重。

天苗 (曹洞)

諱は祖育、天苗と號す。俗姓は吉田氏、肥前國天草郡本土邑の人なり。十一歳、明德寺石門に投して出家し、忍谷の法を得て、皓臺に住す。寛政六年九月二十一日化す、世壽七十又四、法臘六十又一。

天苗 曇屋に定林に參し、また忍谷に菩提に謁し、針芥縁契ひ、初めは、深海の天初院に住し、深堀の菩提寺に遷る。一日、偈を述へていはく、踏蹴深海入深堀。煩惱菩提去又來。禪子生涯無住著。山雲散處海雲回。明和辛卯の四月、海雲山皓臺寺の

請あり、人以て懸籤とす。天苗皓臺に遷り、接衆利生、二十四年、法席太た盛なりき。

金翎 (曹洞)

諱は雪風、金翎と號す。尾州藩士大澤彌三左衛門の子なり。甫めて八歳、業を百津吾拙に受け、のち、華嚴曹海に侍して、その法を嗣ぎ、羽州の東林、滿珠及び越中の光禪、山城の神應、近江の長福、美濃の華嚴、越前の永建、長府の功山等に住す。寛政六年十一月二日化す、世壽七十、法臘六十又三。

寶曆庚辰の春三月 金翎始めて羽州本莊の東林寺に住す。上堂にいはく、

道原無心。非情識倒。法自無我。寧容思慮。騰騰如雲倚群峰。寥寥似月浮衆水。故或時在龍華山頭奉師採菓汲水。或時來東林精舍應請。光嚴住持。觸事隨緣。全無拘束。且道。畢竟是什麼三昧。拂一拂曰。風吹柳絮毛毬走。雨打梨花蛺蝶飛。又舉。僧問投子。和尚住此山。有何境界。子云。了角女兒白頭絲。師曰。投子和尙。可謂妙唱洞中曲。獨占郊外春。雖然如是。翎上座便不然。若有人問和尚住此山有何境界。對他道。短袖臨舞筵。且道。與他古人相去多少。具眼底

辨取。

寶曆辛巳の秋 金翎曹海の計に接し、その遺偈を拈して衆に示していはく、有句無句。樹倒藤枯。纒彰文彩。即屬染汗。劈破太虛。呈面目。夜半正明。天曉不露。會麼。爲物成則。靜處娑婆訶。用拔諸苦。恁麼四轉語。諸方還肯也無。縱令有肯。畢竟鐵背道底。

寛政乙酉の三月 十三日、金翎亮天の請に應して、長府の功山寺に晉山す。

即日開堂、珍牛衆を出て、禮拜して曰く、祇林重開海西濱。四雨六振祥瑞新。法令無私能及物。八紘盡頌昇平辰。正與麼の時、請ふ師提唱せよ。金翎いはく、天高日月正。珍牛いはく、虚空拍手、大地起舞。一箇什麼に因て、此の定を出てさる。金翎いはく、翡翠踏翻荷葉雨。珍牛いはく、低聲々々、露柱傾耳。金翎いはく、此の一間を得て、眼瞎耳聾。當晚小參、前輩亮天衆を出て、いはく、金山、今日開堂、長府一城の人を動著す。是れ甘露となすか、是れ毒藥となすか。金翎手をもて面を掩ふて哭聲を作す。亮天いはく、前佛の光、後佛に依つて彰はる。金翎いはく、鈍置するなくひは好し。亮天いはく、今宵、和尚の困勞を謝すと、一座具を與ふ。金翎いはく、和尚、此

打なくひは、争かてか後蹤に接することを得む。亮天いはく、勘破せむと欲して却て、勘破に遭ふと、揖して位に歸りぬ。

金翎 晩に美濃に歸らむとし、功山を辭し、下關に到りて舟を埃つ。忽ち微恙を示し、徒を召して示誨し、纒に唱へていはく、是錯非錯。滿七十年。末後一句。分附船便。咄。つひに従容として化す。

脱首座 (臨濟)

初め清見の陽春に依り、のち白隠に松蔭に參し、駿州比奈の無量寺に住す。

脱首座 かつて清見寺陽春の輪下にあり。陽春、碧岩録を設くる時、白隠三十六歳にして、はしめて松蔭に住し、一日、來りて會に預る。あくる日、陽春衆に謂ていはく、昨日は、松蔭か座下に在りしをもて、老僧殆と評唱に勞しきと。脱、これを聞き、意に犬に怪み、會をはりて、つひに白隠の槌下に歸しぬ。鶴林の門下、實參衲子あること、實に脱より始まるといふ。惜いかな、早く化しぬ。

良哉 (臨濟)

尾張の人なり。初め古月に日向に参し、のち白隠に松蔭に侍して契悟し、三河の華嶽寺に住して、大に鶴林の道を振ふ。けたし、鶴林の下宗師大に多しと雖も、良哉をもて先鳴とす。圓山の宗徳寺に終ふ。世壽およひ遷化の年月等いまた詳ならず。

良哉 來りて白隠に謁す。白隠一見して曰く、文珠來也と。居ること數年にして、ふかく玄奥を究む。白隠之を許可す。のち白隠人に語りていはく、我の良哉を印せしこと、太た早し。是をもて、彼今事を濟さす。もし三年を待ちて、然る後に之を許さば、天下の人また彼を奈何ともすることなし。侍僧いはく、老師何をもて、早く之を許し給ひしや。いはく、我當時たゞその人の得かたきを覺えて、その太た早きを覺らざりきとて、常にふかく之を惜みきと云ふ。良哉、文字の才ありて、好むて詩偈を作る。白隠また往々之と唱和す。

良哉 華嶽寺に住す、偈あり、いはく、維長維短松千樹。或曲或斜竹一叢。不許人

來成境會。鳴鐘僧立夕陽中。

良哉 また日向に行き、再び古月に骨清堂に謁す、古月大に之を喜ふ。良哉すなはち偈を呈していはく、鐵錫不會誤再來。參陽人事字良哉、骨清堂上捲簾坐。雨後青山雲霧開。古月もまた之に和す。

良哉 かつて江州大圓院の請に應じて、大悲の書を提唱す。開題の偈に云はく、活捉錦囊獅子兒。虛堂背上與人騎。太湖三萬頃秋水。一碧渺漫月滿時。

絶宗 (曹洞)

諱は無學、絶宗と號す。俗姓は長井氏、越後國蒲原郡古河邑の人なり。甫めて十四歳、岩松院古岸に投して、薙染し、大用、白龍、默子、宗白の諸老に歴參し、遂に華嚴曹海の法を嗣ぎ、越後の大榮、吉祥、羽州の滿珠、龍門等に住し、寛政七年八月十四日化す、世壽八十又七、法臘七十又四。

絶宗 享保丁未の秋、笈を負ふて行脚し、錫を加州の寶圓に掛けて、親しく大用に參す。一日、大用に從ふて菜園に入り、菜蟲の多きを見て、いはく、脚下悉く是れ蟲な

り。大用いはく、正に好し踏破するに。絶宗、晩間に至りて、即ち問ふ、みたりは一切の命あるものを殺すことを得ず。和尚、何としてか踏殺せよと道ふや。大用いはく、汝に向つて道ふ、正に好し踏殺するにと。甚麼に因つて、這裡に把將し來ると。更に歸宗、斷蛇の因縁を擧して云ふ、汝また歸宗を見るや。絶宗、措くことなし。己酉の冬、大用、化を載め、一如席を繼て寶圓を蓋す。絶宗、また之に侍し、一日、忽然として、菜蟲踏殺、歸宗、斷蛇の話頭に撞著す。

享保辛亥の秋

絶宗、越の永建に到りて、はしめて、曹海に謁し、孜々として打坐し、脇を席に著けす、一夜、坐定、更の深るを覺えす、忽ち曉鐘を聞きて、脱然契悟し、直ちに威儀を具て方丈に上り、默然として禮拜す。曹海、微々として笑ふ。これより、語話、常流を出てにきといふ。

元文己未の春

絶宗、太瑞と伴を結び、越後に赴きて、默子に參す。默子問ふていはく、父を殺し母を殺せば、佛前に向つて懺悔す。佛を殺し祖を殺せば、何處に向つて懺悔す。絶宗、聲に和して即ち道ふ、座上、和尚なし、座下、絶宗なし。默子いふ、且坐喫茶。

絶宗

また種月宗白に相見す。宗白、垂語して云ふ、牛、意楹を過く。過き得ざる底の尾巴、作麼生か會す。絶宗いはく、劫火洞然、毫末盡。青山依舊、白雲間。宗白すなはち休しぬ。

延享乙丑の春

絶宗はしめて伯州の長榮寺に住す。丁卯八月、鷲仙の席を承て龍徳に移る。上堂にいはく、諸佛無上妙道。無物而不含真。十二時中。開單展鉢。屙屎送尿。運水搬柴。語默竝動靜。全不離師道。喚何云斯道。至道無難。

唯嫌揀擇。但莫憎愛。洞然明白。三祖大師。不欺吾人。宗上座。今日移鉢此山。及登此山。龍天推轂。真俗應緣。事不得已。舉古論今。不見麼。三聖然禪師云、我逢人則出。出則不爲人。興化云。我逢人則不出。出則爲人。二大老雖出一隻

明和乙酉の秋

絶宗、越前永建要默の請に應して錫を移す。開堂に曰く、佛佛要機。祖祖機要。以言語不可到。以寂默不可通。三乘五乘。不能解了。有學無學。非所窺覷。若是舊參上士。則僅聽舉著。直下知歸。出沒卷舒。縱橫自在。坐斷報化佛頭。揭示頂門正眼。無法而非妙用。無物而非真常。若能怎麼會去。

坐斷報化佛頭。揭示頂門正眼。無法而非妙用。無物而非真常。若能怎麼會去。

則堪助無爲化報不報恩。正與麼時。開堂祝聖一句如何宣揚。良久曰。金輪統御三千界。玉燭延熾億萬年。復舉。唐太宗皇帝因有一僧朝謁。帝即賜座。問言。卿甚處來。僧奏云。廬山臥雲庵。帝言。臥雲深處不朝天。因甚到者裡。僧無對。師曰。皇帝天然貴胤。威風嚴冷。者僧肅然有義。敬伏知禮。後來雪竇明覺大師。代此僧曰。至化難逃。又作麼生。卓拄杖曰。海晏河清。普天同慶。伏惟珍重。

安永壬辰の春 絕宗雲州の禪覺寺に赴く。けたし禪覺は曹海の尼弟子了智これを創建し曹海を請して開山祖とす。然れともいまた法地たることを得ず。曹海滅に臨みて、絶宗に囑するに、禪覺の従事をもてす。此において、晉山式を行ひて第二世に居る。尋て公許を得て、寺籍を法地に列しぬ。既にして、嗣子藏明瑞祥寺を越後に建て、絶宗を迎へて開祖とす。これより越後、出雲の間を往來して、衆を度し、前後その幾回なることを知らすと云ふ。

絶宗 一日、急に門人を召し、示していはく、十處住山四十四年。驢胎馬腹打鞞。人云米賀今非遠。予憶近時掉雙樹舟。嘆。世事分明草露夢。終身難保最寒心。爲憐松竹老兒子。好箇翻身菩提林。止止不須説。莫來妨余睡。道ひ了りて右脇

に臥す。これより只管打坐、氣息奄々として、有るかごとく無きかとききもの三日三夜。門人ら、徐に問訊す。絶宗、眼を開きて喝一喝し、溘然として寂を示しぬ。

阿三婆 (曹洞)

阿三は、信州上伊那郡七久保村の人なり。鐵文に參して大悟す。のちまた白隠に參す。

阿三 ふかく心を禪要に寄せ、道樹に參して、工夫怠らす。ある日、曉坐中たまたま雞聲を聞きて、豁然として漆桶を打破し、歌を詠みていはく、野も山も花も我身も鳥の聲何か残りて聞くといふらむ。これより機鋒太た鋭くして、久參の衲子といへとも、敗闕して去る者多かりきといふ。

白隠 の請に信州に應ずるや、阿三またゆきて相見す。白隠、搦するに、隻手をもてす。阿三、直ちに一首を口すさみて呈す。いはく、白隠の隻手の聲を聞くよりも、兩手を打つて商をせよ。白隠また自ら竹帚の圖を描きて阿三に與ふ。阿三これに題していはく、日本の悪知識を掃くは、き先づ第一に原の白隠。白隠、微々とし

て笑ふ。
阿三 老病まさに革るや、兒女ら、その枕を擁して遺言を求む。阿三、笑つて詠し
ていはく、言の葉のつゆものこらぬ世の中に如何なることをいふておかしし。從
容として身まかりぬ。

蘭山 (臨濟)

諱は正隆、蘭山と號し、別に積翠と稱す、出羽山形の人なり。髫鬢にして、勝因寺台
禪を禮して、薙染し、初めは、月船、大道の二老に參し、のち古月に日向に參す。寛政
中化す、世壽八十。朝廷、特に圓機妙應禪師の謚號を賜ふ。

蘭山 十七八歳の時、一日、唱然としていはく、道の微妙を得むと欲せば、豈に估畢
の能く得る所ならむやと、此れより出て、丹波の大道に參す、大道、示すに雪峯粟米
粒の話をもてす。蘭山之を服膺する六年、佛成道の日、脱然として省あり、工夫空費
六年禪の句あり。大道、慨然として、空の字を指し、不の字を示す。蘭山、慚如たり。

蘭山 大道の命に依り、日向にゆきて古月に相見す。時にその嗣翠岩、その孫拙

堂、一時化を並ふることを鼎足のことし。蘭山、三老の間に周旋し、終に蘊奥を盡しき
と云ふ。

有馬侯 福壽寺を創建し、古月を請して開祖とす。古月まさに蘭山をもてそか
嗣となさむとせしか、この時、竊かに衣鉢を争ふの徒ありしかは、蘭山かたく之を辭
し、嗣法を大宙に囑して去て、豊前の開善寺に住す。故に古月七年忌上堂に曰く、換
手推胸祖一言。却因遺囑負宗恩。秀峰設有斯消息。杜宇聲聲月色昏。

明和乙酉の冬 蘭山、息耕録を評唱す。雲衲三百餘員、禪風大に振ふ。小倉侯
小笠原忠總、嘆して曰く、三代の禮樂、緇衣の中にありと、この言誣ひさるなりとて、有
司に命し、金穀若干を贈りき。けたし、蘭山の盛徳を表章すといふ。

明和庚寅の春 蘭山、衆を辭して、靜泰院に隱る。靜泰は、柳浦、戸上山の麓にあ
り、小笠原侯高祖の香華院なり。幾はくもなく、仁山、大雲、春澤、薰岩の輩もまた武を
踵て至り、榛を披き、畚を挈け、薪を採り、饗を親らし、道の爲めに軀を愛ます。小笠原
侯もまた自ら畚築の役に混して、之を簸揚し、忽ちにして、鬱乎たる叢林となりぬ。
執政太夫丸田登、靜泰の食給らざるを憂ひ、竊かに一士を諭して、蘭山をして官穀を

乞はしむ。蘭山之を叱して許さず。俟その事を高尙とし、歳ごとに糜穀を給しき。蘭山 たましく長崎に遊ぶ。四衆傳へ來りて授戒を請ひ、達嚨の奇貨、勝けて計るへからず。蘭山、左右に謂ていはく、利を都會に罔みする者、滔々みな是れなり、我この輩と伍するを羞つと、悉く達嚨をもて粟を市ひ、乞食の徒に施す。その境を出つるに及びて、士庶五十或ひは一百、之を路に送りて三歸を哀請し、數十里の外まで追慕して法號を乞ふ者ありきといふ。

蘭山 未だ世に即かざるの口、その顔より舍利を出す。また牙齒脱して舍利に化し、瑩徹珠のことし。侍者之を捧けて靜泰に安す。

蘭山 容貌短矮、度量寛弘、器識精嚴、戲詭を喜はす、衣は帛を著けず、食は飢を療するに止るのみ。威儀整肅にして、能く初步を踐み、邪慢を挟む者といへとも、一たひ蘭山を見るに及びては、氣索き色沮まざるものなし。他山の請あるも、多くは辭して往かす。かつて二三子に謂ていはく、我、佛に代つて化を揚ぐ。豈に遊化することを欲せさらむや。而かも敢て矯好して人の師となり、佛法を稗販する者ならむやと、その介潔おほむね此の如し。

峩山 (臨濟)

名は慈棹、峩山と號す、輿州の人なり。幼にして、三春光顯の月仙に依りて剃髮し、遊方して、虛靈、大道、翠巖らに參し、のち白隱に見えて、大事を了畢し、江戸の天澤山麟祥院に住して、大に化を揚げ、寛政九年正月十四日化す。世壽七十又一。敕して大方妙機禪師の號を賜ふ。

峩山、峻機妙用、大作家の手段ありて、愚溪、行應、隱山、卓洲、關堂の五神足を接得し、鶴林の道大に振ふ。今日濟家の宗匠と稱する者、みな峩山の法孫に出つ、盛なりと云ふへし。

峩山 年甫めて十六にして、出て、遊方し、直ちに豊前に赴き、萬壽の虛靈に謁し、入室參禪、九十日間、少しく省處あり。のち日向の翠巖、丹波の大道等に見えて、參究し、およそ三十餘人の善知識に歷叩す。他みな峩山を奈何ともすること能はず。乃ち歸りて月仙を永田に省す。月仙もまた之を許可していはく、汝また他に往くことなかれ、たゞ此の間に住せよと。時に峩山もまた心に自ら思惟すらく、大事す

てに了せりと。たゞその問しは、白隠の門を過くれとも、之に參見することを欲せず。一日、自ら計るらく、我天下の諸老和尚を見るに、曾て一箇も我を指摘する者なし。たゞ白隠一人を除て、他の用處若何と云ふことを知らず。よつて白隠に見えむと欲りし、その志をもて月仙に告ぐ。月仙いふ、汝何を必ずしも白隠に見えむと。峩山もまた然りとなし、住すること一年なりしか、たゞ白隠か江戸の桃林の請に應じて碧岩録を提唱するよしを聞き、乃ち思ふに、我這の老を見されは、實に大丈夫にあらすと、まさしに志を決して往かむとす。月仙また之を止めしかと、遂に肯かす、直に桃林に行き、白隠に見えて見解を呈す。白隠罵りていはく、汝何の處の悪知識より來りて、許多の惡臭氣を放ちて我を薰するかと、鞭ち之を打出す。峩山つゆ屈せず、打出さるゝこと三たひなりき。自ら云ふ、我實に悟處あり。然るを彼故意に我を摧くのみと。一夕、散筵に及ぶ比ひ、衣單下に在りて思惟す、彼は實に天下の大善知識なり、豈に浪りに人を打することを要せむや、彼必ず長處あらむ。此において、入室悔謝していはく、昨日は、慈棹錯つて和尚に觸忤す、願はくは之を許して、慈示を垂れよと。白隠いはく、汝後生家、一肚皮の禪を擔ふて、一生を過し了る。

たとひ口波々地なるも、生死岸頭に到りて、總に力を著けす。汝もし平生を痛快にし去らむと欲りせば、須らく我か隻手の聲を聞くへし。峩山拜謝して出て、此れより始めて白隠に服事しぬ。時に峩山の年三十餘なりき。歸りて之を月仙に告げ、まさしに松蔭に往きて挂搭せむとす。月仙また之を止む。峩山可かすして去り、白隠に松蔭に參すること、およそ四年。時に白隠して八十を過ぎ、應接或ひは怠りき。よつてしはしは東嶺に叩きたりきといふ。のち峩山衆に示していはく、余かつて行脚し、天涯海角に遍歴すること、殆ど二十年なりき。その間、三十餘員の善知識に參見せしかとみな我か機鋒の鋭なるをもて、我を奈何ともせず。最後に鶴林老漢に撞着して遂に三たひ他に打出せらるゝに至りて、毫髪はかりも平生の得力を用ゆることを得ず。此において、誠を傾けて服従しき。この時にわたりて、天下誰か能く我を打著する者そや。實に鶴林老漢一人のみ。我、他の道德の尊大なるを貴はず、他の聲名の四海に洋溢するを貴はず、他の見處の古今に超過するを貴はず、他の古人節用諸説の因縁において、一々明了に見徹して、毫芒を遺さざるを貴はず、他の横説豎説、獅子吼無畏なるを貴はず、他の三百五百乃至七八百の徒衆圍繞して、一

佛出世のことくなるを貴はず、たゞ他の天下の老和尚我を奈何ともすること能はざるを、却て悪手脚を下して、我をして三九ひ棒を喫せしめて、我進退維れ谷よりて、遂に大事を了畢せしめたるを貴ふのみ。誠に此事の極めて容易ならざるを知るなり。我の鶴林老漢に従ふこと、僅かに四年、その老憊して、入室時に或ひは協はざるをもて、東嶺和尚に叩きぬ。五位兼中至以上は、之を東嶺和尚に質したりき。その時もし東嶺なかりせば、竟に餘蘊を盡すこと能はざるへしと。

峩山 かつて白隠に參せし時、寺尾に庵居し、疎山壽塔の話を見る。一日、忽然として見得し、我知らず、手に香爐を捧げて起て舞ふ。白隠遷化の後、永田に歸りて、依松に庵居す。よつて自ら思ふ、むかし松蔭に在りし時、柏樹子の話に賊の機あるを透得せしか、いま十成ならずと、此において、單々に體究し將ち去る。ある夕、寒颯俄かに起て、林木嘈雜として山鳴り谷響く、この時、忽然として柏樹賊機に撞著し、趨りて庵外に出て、疾く走ること四五十歩、始めて關山國師の肝膽心腸を徹見したりきと云ふ。

峩山 松蔭の請に應して、槐安國語を提唱す。示衆にいはく、我昔挂錫當山時。

輪下龍象。成群成隊。禪師歿後。各旺化一方。歲月其往。各自遷化去。何圖。我不肖今日登高廣座。舉揚宗乘。實可畏懼矣。當今鶴林宗風幾乎墜地。汝等諸人。努力挽回眞風。祖庭秋晚。可歎可悲。偶あり、いはく、月上槐宮三五夜。修行供養若爲宗。夢中拈得栴檀木。分作二分供二翁。けたし、二翁とは、白隠、遂翁の二老を謂ふなり。また講了の偈にいはく、韶石關臨濟喝。宗風滅却滿林霜。白狼河北音書斷。丹鳳城南秋夜長。

峩山 かつて衆に示していはく、堪對暮雲歸未合。遠山無限碧層層。この語、容易の看を作すことなけれ。たとひ難透難解を透過し、はた三玄五位に參得し了るも、者境界に到ること能はず、他日必ず分明に見得透する底の時節あらむ、記取せよ。
峩山 いはく、我天澤に住すること十年、胡床を天香閣に置き、毎夜そか上に坐し三更より四更に至るまで、一睡して便ち起つ。鐘司、木屐を鳴らし、樓に上りて鐘を撞く。那時すてに洗面して了て、威儀を著けて、佛前に詣して晨誦す、毎々此の如し。およそ夙に興て、精神を抖擻し、誦經罷むて、然る後に、本參の話頭を提撕せむことを要す。切に忌む、空しく光陰を過すことを。今や老いたりと雖も、勉めて怠らず、

何そや、黄龍南禪師いはく、雖老不寧居逸體。

峩山 因に松山來り參し、入室して所解を呈す、峩山肯はず、松山これを争ふ。遂に打出す。第三回に至りて、峩山拄杖を提けて、趁ふて山門に到る。松山回顧す、峩山また趁ふ。こゝにおいて、松山服膺して開示を請ふ、峩山示すに清淨行者不入涅槃の因縁をもてす。松山路は領會す。鶴林の頌を擧するに至て、一向に分疏不下。これよりしはく、參叩す。峩山請に清泰に應するや、松山、僧堂に在りて第一位たり。峩山の歸る時に當て、松山これを請して碧岩を講せしむること十日なりきとそ。

峩山 つねに好むて熱海に浴し、動やもすれば、二三旬を経たりき。晩に病ありて、また浴し、遂に熱海において化しぬ。

葦津 (臨濟)

雲州の人なり、久しく白隠に松蔭に侍して、その法を嗣く。世壽およひ示寂の年月等、いまた之を詳にせず。

葦津 白隠の家風を承け、その手段の峻峻なること、白隠に十倍す。よのつね人に接するに、白刃を座右に置き、人擬議すれば、すなはち刃を揮つて之を逐ふ。學者往々崖を望むて退くと云ふ。

鹿王院靈源 來りて謁す、いはく、丹後の慧桃、特に來りて相見を請ふと、侍者之を葦津に告ぐ。葦津いはく、これ鶴林下の桃首座なり。侍者これを閣上に延く。靈源威儀を著け、升りて相見するや、葦津纔かにその面を見て、即ちいはく、桃首座相見は、且く止みぬ。我一問あり、大力鬼王ありて、汝か臂を捉へて、焦熱地獄に投入せば、汝如何にして救ひ得るぞ。靈源擬議す。葦津直ちに起て、靈源を閣下に蹴落しぬ。靈源茫然として、爲す所を知らず、威儀を著けなから、方丈の後架にゆき、坐すること七日にして、省あり、また閣に登りて、見解を呈す。葦津いはく、者般（よこ）の事を知らば、便ち休せよと。その機鋒の峭峻なること、おほむね此の如し。

靈源 (臨濟)

名は慧桃、靈源と號す。白隠の法を嗣ぎ、丹後の全性に住し、天龍に出世す。世壽

およひ示寂の年月等、いまた詳ならず。

靈源 白隠に參すること、年久しく、日夜孜孜として參究す。松蔭を去ること二十餘里にして庵居し、往來嘿々として、又手當胸し、目虚視せず、同火の者に逢へば、たた低頭して去るのみにて、いまたかつて一言を交へず。或る時同火相聚りていはく、桃兄、者見處あるに似たり、他の深淺若何を知らざるのみ、且く我か他を勸せむことを待てと、明日、路に邀へて問ふ、桃兄、疎山壽塔の因縁作麼生。靈源たゞ低頭して去る。是をもて、人その涯際を知ることなし。靈源、臍癰を患ふこと百餘日、呻吟懊惱の中において、遂に疎山壽塔を透過す。

靈源 人と爲り朴實にして、文字なし、たゞ艱辛刻苦して倦まず、この故に、その得力大に超過すと云ふ。

靈源 かつて京に赴く途において、海門來り見ゆ。海門進て揖していはく、願生は、提洲の法嗣海門と。靈源俄かに手を伸へて、之を示していはく、我か手何ぞ佛手に似たる。海門擬議す。靈源、一踏に蹈倒しき。

圓桂 (臨濟)

白隠に參し、ふかくその宗旨を得て、雲州松江の天倫寺に住す。世壽およひ示寂の年月、いまた之を詳かにせず。

圓桂 應機接物の手段に巧にして、循々として、よく人を誘ふ。こゝをもて松江の士太夫みな之を仰きぬ。葦津か平生怒罵呵咄して、動もすれば士太夫を罵辱すると適かに殊なりきとぞ。

圓桂 上足頓上座また曾て白隠に參して旨を得たり、作州の本源に住して神宗と號す。惜いかな、早く化しぬ。けたし頓上座は、鶴林下三頓の一なり。三頓は、神宗およひ讚岐の頓九峰、その一は名を失す。

快巖 (臨濟)

甲州の人なり。初め井山の大休と共に古月に日向に依り、のち白隠に松蔭に參して、玄微を吸盡す。世壽およひ示寂の年月等、いまた詳ならず。

快巖 かつて古月の門に入りて大事を發明す。時に井山の大休もまた同參なり。二人相與に謂ていはく、我ら二人すてに大事を成辨せり、此に在るもまた益なし。たとひ天下を一周するも、孰れか能く我ら二人に勝る者あらむや、迹を熊野に晦まし、聖胎を長養して、一生を過し了らむには如かずとて、相與に古月を辭し、浪華に出て、淀の養源寺に投宿するの次、たま／＼且過の壁上に清淨行者不入涅槃の頌を題するを見る、その頌にいはく、問蟻爭拽蜻蜒翼。新燕竝休楊柳枝。蠶婦携籃多菜色。村童偷笋過疎籬。二人これを読み了つて、惘然として措く事なく、大に波斯の謔語を説くに似て、通曉すること能はず、よつて恠みて問ふ、こは、何人の作そやと。一僧いふ、東來の雲襍傳へ云ふ、これ駿州白隠和尚の作なりと。二人相議していはく、我らすてに大事成辨して、而かも者老漢の説話を解すること能はず。願ふに、者老漢必らず道理あらむ。もし此老を見すむは、他日必ず悔ゆる事あらむ。且つ白隠に見えて後、熊野に入るもまたいまた晚しとせすとて、こゝにおいて、脚を轉して東行し、直ちに松蔭に入りて相見を請ふ、白隠これを許す。快巖、大休をして先つ入らしむ。大休進ひて、纒かに挨拶して即ち出て來る。快巖いはく、汝いまた入室せ

ざるな。大休いはく、止みね／＼、者老漢は、我か輩の企て及ふ所にあらず、汝た／＼去れと。快巖入り來りて見解を呈す。白隠或ひは抑し、或ひは揚す。言論往復數遍にして、快巖遂に理盡き詞窮り、白隠の爲めに折倒し了られて、慄懼して趨り出て、大休に謂ていはく、我らの及ふ所にあらずと、此において、二人僧に拄杖を拗折して挂搭を乞ふ。快巖かつてこの事を人に語りて曰く、大休と我とは、利鈍懸かに殊なり。大休纒かに鋒を交へて、すてに負墮することを知る。我の如きは、弓折れ矢盡きて、始めて他に擒獲せらるゝことを知ると。その夜、雲山和尚來りて白隠を訪ふ、雲山は即ち古月下の尊宿なり。白隠之と茶話の次、いはく、この間、新到二人の日向より來る者ありとて、よつて二人を召していはく、汝ら始めて此間に來り、いまた門限の高低を知らざらむ。我雲山と道話す、汝ら姑らく傍に坐して、我か説話を聞けと、すなはち雲山と共に綱要を提掇し、古今を商確し、曉に徹して止む。二人その未だ聞かざる所を開きて、覺えず涙下ること雨のごとし。席を退き、相謂ていはく、意はさりき、佛法是の如き事あらむとはと、大に感激すと云ふ。

快巖 大休と共に松蔭に挂搭するや、白隠いはく、常住枯淡にして、汝らを畜ふこ

と能はず、明日出て、村民に乞食せよ。二人頓首して下り去る。おくる朝、風雨殊に甚しきをもて、且過に到て雨の歇むを待つ。白隠、竹笠を提げて來りていはく、汝ら者裡に在りて箇の什麼をか作すや。快巖いはく、風雨烈しきをもて躊躇す、白隠忽ち呵していはく、箇の慵儒の漢、風雨を怕れて什麼せむ。且つ東道豈に人の往還するなからむや、汝ら速かに出て去らすむは、我汝らを打殺することわらむと。二人大に恐れ、頓首して謝し去り、門外に到り、相顧みていはく、嚴和尚なるかな。笠を著け制を衣て、雨を衝て去り、日午、柏原に到れば、天やうやく霽れ、米麥七八斗を化して、晩間、歸り來る。白隠見て喜ひていはく、汝ら、後生家まさに是のことくなるへきのみと、よつて藕絲孔中辯を出して之を示しきといふ。

快巖 南泉斬猫の圖に贊していはく、提起猫兒撈兩堂。炎天六月勢飛霜。一刀斬却三三九。日到西峰影漸長。或る時、これを東嶺に視す、東嶺極めて善と稱す。快巖時に年八十なりきとぞ。

環溪 (臨濟)

遠州石原の人なり。白隠の法をつぎ、勝光寺に住して、大に道俗を化す。

環溪 勝光寺に住して碧岩録を講す、一會百餘人なり。衆に示していはく、黄蘗、曠酒精漢話。今時叢林乘如土。我鶴林老漢云。黄蘗曠酒精漢話。須若自己口唱出。始見黄蘗肝膽心腸。吾以爲。不啻見黄蘗肝膽心腸。亦與鶴林老漢相見。諸子勉旃。

悟庵 (臨濟)

悟庵は古月下の尊宿なり、晩に白隠に依り、遠州の廣嚴寺に住す。世壽およひ示寂の年月等いまた詳ならず。

悟庵 その年齒略は白隠と齊きをもて、つねに相親み、およそ白隠の法幢は、悟庵必ず之を輔けたりきといふ。

白隠 かつて龍潭の請に應するや、悟庵またその輪下に在り、ある夜、木屑を焚きて蚊を薰し、曉に達するまで、閑談して倦ます。

白隠 一日、講間に忽ちいはく、我今日勞倦すること甚し。悟庵和尚、我か爲めに

代つて講を終へよとすなはち下座し、悟庵代つて座に登る。白隠、座側におりて之を聞き、その旨を失ふ所に至れば、則ちいはく、悟庵過てり〜と。悟庵これを思ふこと良久しくして、乃ち改め講す、白隠いはく、是なり〜。

梁山 (臨濟)

梁山は、遠州の人にして、環溪の法弟なり、久しく白隠に松蔭に侍し、その道を得て、壽量、實相等に住して、大に化を揚ぐ。

梁山 壽量に住して、韜晦自ら養ふ。たま〜靈源、内野龍泉の請に應して五祖録を提唱す、梁山ゆきて入室す。靈源、詰るに鶴林下の事をもてするに、梁山、應答滯ることなく、こも〜相詰難す。明日、靈源衆に謂ていはく、この邦に梁山和尚といふ者あり、昨は、辱く老僧を訪はれ、夜來共に鶴林の家私を語りき、他は大に作家なり、我及はざるなり、宜へなるかな、七十里の灘にこの大鯨あるやと、大に嘆稱しきといふ。

梁山 三州實相の請に應す。實相は聖一國師の嗣、應道禪師開棧の地なり。梁

山、金剛經を講す。偈にいはく、開卷即知令四生。全遊實相涅槃城。海濱風斂蚌含月。堪憶智門血滴情。けたし、これより先き、靈源の天龍に歸るや、たま〜實相より來り請す。靈源よつて告げていはく、遠州に梁山和尚といふ者あり、何ぞ彼にゆきて懇請して起たしめざるや。他は僻地に鏗彩すといへとも實に有道の士なりとて、遂に移書して、梁山をして起たしめたるなりと云ふ。

梁山 聖一國師の五百年忌に屬し、齋を設く。拈香にいはく、列聖叢中無第二。曾登北闕恣開示。天魔膽落五百年。月色滿天風匝地。

梁山 衆の爲めに維摩經を講す、開講の偈あり、曰く、通身是病通身藥。七佛師難著問頭。不二門開重相見。笑看明月照高樓。

梁山 かつて貞永一法の梵網經會を隨喜し、またその開講の韻を和していはく、水邊林下逐春光。漸到法身妙戒藏。百億國阿那箇正。洞庭過了又瀟湘。時に遂翁もまた來りて一法の化を助く。梁山の和偈を見て、大にその巧妙を稱す。

梁山 晩年に中風を患ひて、手足不仁なり。時に遂翁たま〜新橋大通の請に逢ふ。遂翁これを辭みていはく、遠州には、環溪、梁山の二人あり、我何ぞ行くことを